

日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書 1 5 7

「群集」を再訪する—ただしパトスなしに

—両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討—

海老根 剛 編

一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 157

**Neubegegnung mit der Masse in der deutschsprachigen
Literatur der Zwischenkriegszeit**

Herausgegeben
von
Takeshi EBINE

JGG Tokyo

本叢書は、春季・秋季研究発表会におけるシンポジウムの記録のため、日本独文学会が（2017年以降は学会ホームページにおいて）発表の場を提供しているものです。叢書の編集は、学会編集委員等による査読制をとらず、各編集責任者に完全に任されています。

Mit der Studienreihe (SrJGG) bietet die Japanische Gesellschaft für Germanistik den einzelnen Veranstaltern der Symposien in den Frühlings- und Herbsttagungen die Möglichkeit, die Beiträge und die Diskussionsinhalte der Symposien zu dokumentieren und (seit 2017 im Internet) zu publizieren. Die Artikel sind nicht von der JGG-Redaktion peer reviewed, sondern werden ausschließlich vom jeweiligen Herausgeber wissenschaftlich-redaktionell zusammengestellt.

目 次

はじめに

いま「群集」を再訪するということ

海老根 剛 1

発酵する群集

A・デーブリン『山海巨人たち』におけるモノの多様性

糸田 文 8

第一次世界大戦と「死者たちの群集」表象

——戦友意識と戦死者祭祀

古矢 晋一 27

ヘルマン・ブロッホにおける「群集」という未解決の問い

早川 文人 46

同期の詩学

マルティン・ケッセル『ブレッヒャー氏の失敗』における群集と集団性の表象

海老根 剛 66

あとがき

古矢 晋一 89

Inhalt

Vorwort

Was heißt es heute, der „Masse“ neu zu begegnen?

Takeshi EBINE 1

Gärende Massen

Die Diversität der Dinge in Alfred Döblins *Berge Meere und Giganten*

Aya KUMEDA 8

Die Vorstellung der „Massen der Toten“ im Ersten Weltkrieg

– Kameradschaft und Gefallenenkult

Shinichi FURUYA 27

Die ungelöste Frage der „Masse“ bei Hermann Broch

Fumito HAYAKAWA 46

Poetik der Synchronisierung

Bilder von Masse und Kollektivität in Martin Kessels *Herrn Brechers Fiasko*

Takeshi EBINE 66

Nachwort

Shinichi FURUYA 89

はじめに

いま「群集」を再訪するということ

海老根 剛

本叢書は2023年10月14日に日本独文学会秋季研究発表会（於・京都府立大学）にて開催されたシンポジウム「〈群集〉を再訪する——ただしパトスなしに 両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討」にもとづいて編集されたものである。各論考は当日の発表原稿を基礎にしているが、シンポジウムにおける議論もふまえ、大幅な加筆修正を施している。本シンポジウムの狙いは、2010年代以降に顕著になった「群集」という主題への関心の高まりと、今世紀初頭以来の集団の振舞いに関する新たな学術知の形成を視野に収めつつ、両大戦間期のドイツ語圏の文学・思想にみられるいくつかの群集表象を再訪し、今日的な視点から再検討することにあった。本叢書に収録された各論考も同様の趣旨のもとで執筆されている。もちろんドイツ語圏、そして両大戦間に限定したとしても、「群集」を扱った文学作品は無数に存在しており、本叢書が扱うのはそのごく一部に過ぎない。しかし、ここに集められた論考を通して、「群集」という主題にアプローチするいくつかの新たな視点を提示してみたいと考えている。導入の役目を果たすこの文章では、本叢書の背景をなす問題意識を概括的に提示するとともに、各論考の議論において前提されている群集概念の整理を行う。

1. 「群集」の回帰？

冒頭に述べたように本叢書の企画の背景には、近年観察される「群集」という主題への関心の高まりがある。とはいえ、それは必ずしも、人々がまた *Masse*（群集）について盛んに論じるようになったということでない。ここでの「回帰」とは、かつてなら *Masse* という主題のもとで論じられていたであろう事象が再び社会的重要性を獲得し、それについて考えることが喫緊の知的課題となっているという事態を指している。

いくつかよく知られた例を挙げるなら、とりわけ2008年のリーマンショック以降、世界各地で新しいタイプの集団的な政治行動が展開してきた。エジプトのタハリール広場における反体制運動、マドリードのプエルタ・デル・ソル広場における「インディグナードス」（怒れる者たち）の抗議行動、イスタンブールのゲジ公園をめぐる市民運動、ニューヨークを発生源とする「オキュパイ・ウォールストリート」運動、香港における民主化運動、日本

における原発再稼働反対運動などがそれにあたる。これらの運動の多くは、従来のデモとは異なり、広場などを占拠するスタイルを採用し、一元的な指揮系統をもたずに、ソーシャルメディアを活用して流動的に運動を組織していた。こうした新しいタイプの抗議行動の展開に触発され、2010年代には主に政治哲学の分野で集団的な政治行動をめぐる新たなタイプの思考が練り上げられていくことになる。また2016年にアメリカでトランプ大統領が誕生すると、ポピュリズムが切迫した問題となり、その解明のためにル・ボンやフロイトの群集心理学が読み直されるという状況も生じている。デモや蜂起や民主政の危機といった20世紀前半には群集の名のもとに論じられていたトピックが、新たな概念装置のもとで議論されているのである。

他方、2000年代にはまた、一見するといま触れた動きとは無関係に、複雑系の科学において群れの振舞いの研究が急速に進展し、それが人文学にも影響を与えるようになった。当初は動物の群れを対象としていたこの研究は、のちに大都市の雑踏における人々の振舞いや、集団パニックのような現象を、群れの自己組織化の問題として扱うようになった。ここでもまた、かつてなら「群集」の名のもとに主題化されてきた事象が、新たな角度から究明されているとすることができる。

これら今世紀に入って成立した集団の行動をめぐる新しい思考は、後で確認するように、決定的な点で群集心理学に代表される20世紀的な思考の枠組みから決別している。つまり、それらの思考によって、20世紀の思想や文学を支配してきた群集の概念は決定的に歴史化したとみなすことができるのである。この歴史化によって、群集をめぐる言説と表象の構築性を、言い換えれば、それらを規定していた思考のパラダイムを、より明瞭に認識することが可能になった。この歴史化が開くチャンスを掴み取り、両大戦間期ドイツ語圏における群集という主題を新たな角度から捉え直す可能性を探求することが、本叢書の根底にある問題意識である。

2. Masse の概念の意味論的広がり

では20世紀の群集の思考は、どのような概念的枠組みから出発したのだろうか。ここでは本叢書が対象とする言説の分析の前提として、ドイツ語圏における群集の概念の意味論的な広がりを確認しておきたい。

2-1. 人混みと群集、群集と大衆

両大戦間のドイツ語圏の文学・思想において「群集」の主題を検討するさいには、二組の基本的な語義の対立を確認しておくことが有益である。すなわち「人混み」と「群集」の対立と「群集」と「大衆」の対立である。

本叢書が対象とする時代・地域の言説にみられる特徴のひとつは、Masse (群集) と Menge (人混み) を明確に区別する点に認められる。そのさい Menge が何ら共通の関心も志向も持たずにたまたま形成された人間の集まりを指すのに対して、Masse にはつねに共通の関心や志向の存在が想定される。心理学的に定義される場合でも、社会学的に定義される場合でも、Masse は多数の人間の単なる偶発的な集積以上のもの、すなわち、ある特殊な性質を持つ統一体として理解されているのである¹。

次に群集と大衆の区別であるが、これは Masse の現象形態に関係している。すなわち、ある特定の瞬間に特定の場所に現れ、空間を占拠する可視的な存在としての「群集」と、共通の社会化の形式によって特徴づけられてはいるものの、実際にひとつの場所に現前する必要のない——したがってしばしば集団全体としては不可視なままにとどまる——「大衆」の違いである。「群集」が直接性 (無媒介性) を特徴とするのにたいして、「大衆」はむしろメディアや技術的なシステムに媒介され、それに依存し管理される点に特徴がある。この二つの集団のあり方は、フランス語圏では、ガブリエル・タルドによって「群集」と「公衆」として概念的に区別されたが、ドイツ語圏の言説では、いずれも Masse という同じ言葉で指し示される。それゆえ、ドイツ語圏の言説では、Masse がこの二つの現象形態のあいだをつねに揺れ動くことになる。ちなみに、一見したところでは、偶発的な人々の集積——つまり Menge——とみなされるような現象でも、そこに何らかのシステム的作用が見いだされる場合には、Masse と呼ばれることになる。本叢書でも論じられるヴァイマル共和国時代の都市小説において、大都市の交通機関の利用者が Masse として主題化されるのは、このためである。

2-2. 語源的意味と近代以前の意味内容

語源的にみると、Masse という語はラテン語の *massa* に由来するが、この語はさらに「パン生地」や「こねること」を意味するギリシア語 (*μάζα, μάσσειν*) に発するとされる²。これらの語が指し示すのは、自立的な生や活動性の不在、内発的に自己を形作る力の欠如などによって特徴づけられる事象である。すなわち「群集」には、語源的に、形を欠いたもの、外部からの力の作用がなければ形を得ることの出来ないものという意味内容が含まれていることになる。

¹ 社会学的な群集の概念化の例として次を参照。Werner Sombart: *Der proletarische Sozialismus. Zweiter Band. Die Bewegung.* Jena (Verlag von Gustav Fischer) 1924, S.99.

² Johannes Chr. Papalekas: „Masse“ in: *Handwörterbuch der Sozialwissenschaften.* Hrsg. von E. Beckerath u.a., Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1961, S. 220. Peter Friedrich: *Die Rebellion der Masse im Textsystem. Die Sprache der Gegenwissenschaft in Elias Canettis „Masse und Macht“.* München (Wilhelm Fink Verlag) 1999, S. 292-309. Michael Gamper: *Masse lesen, Masse schreiben. Eine Diskurs- und Imaginationsgeschichte der Menschenmenge 1756-1930.* München (Wilhelm Fink Verlag) 2007, S. 19-20.

近代以前のドイツ語においても、Masse は、「不定形に結びついた物質のかたまり」という語源的な意味で用いられ、「鉱物の塊」、「薬剤の生地」、あるいは、より一般的に「外からある一定の形を与えられる塊」などを意味していた。また哲学用語としては、Masse は「重さをもって運動する物質（質量）」を意味した。グリムの辞書によれば、この哲学的な用法から派生して、Masse が「大量の、重みのある、大きな塊や物」という意味で用いられるようになるのは、18 世紀の後半だとされる³。しかし、この時点ではまだ、社会的・政治的な意味、すなわち「群集」という意味では、Masse という語は用いられていない。

2-3. 近代的意味

社会的・政治的な意味（「群集」）で Masse という概念が最初にドイツ語に導入されたのは、1793 年、フリードリヒ・ゲンツによるエドモンド・バークの著作『フランス革命の省察』の翻訳においてだとされる⁴。ゲンツによって、英語の crowd が、フランス革命における民衆の政治化によって起こった国民皆兵（levée en masse）に由来する Masse という言葉を用いて翻訳されたのである。すなわち、「群集」という意味での Masse の概念は、優れて近代的な出自を持っているのである。

Masse という言葉の意味論的な広がりには以上のように素描できるが、20 世紀のドイツ語圏の文学・思想における群集の表象が興味深いのは、Masse という言葉のなかに、語源的意味から近代的意味にいたるまでの複数の意味の層がすべて保持されているためである。この意味論的な広がり豊かなのが、フランス語圏や英語圏の文学とは異なる独特な群集表象を生み出す素地になっていたと言えるだろう。

3. 古典的群集心理学のパラダイム

19 世紀末、ギュスターヴ・ル・ボンとガブリエル・タルドの仕事によって、古典的な群集心理学が成立する。彼らの著作は 20 世紀初頭にドイツ語にも翻訳され、大きな影響を及ぼした。しかしながら、両大戦間のドイツ語圏で成立した群集の文学的表象や理論的反省において真に注目に値するのは、そうした影響関係それ自体というよりも、その受容にみられる偏差である。本叢書の各論考においても、古典的な群集心理学の理論的枠組には収まり切らない部分にこそ注意が向けられている。ここではそうした偏差の議論の前提として、古典的群集心理学の骨子を確認しておきたい⁵。

³ Vgl. „Masse“ In: Deutsches Wörterbuch von Jakob Grimm u. Wilhelm Grimm. Sechster Band. 1. Abteilung. Leipzig (Verlag von S. Hirzel) 1956, Sp. 1708-1710.

⁴ Vgl. E. Pankoke: „Masse Massen“. In: Historisches Wörterbuch der Philosophie. Hrsg. von Joachim Ritter u. Karlfried Gründer. Basel Stuttgart (Schwabe & Co AG.) 1980, S. 828.

⁵ 古典的群集心理学の特徴については、以下の拙論を参照のこと。海老根剛「群集・革命・権力 -1920 年

3-1. ル・ボンの群集心理学

ル・ボンが『群集心理学』で提示した理論において、本叢書が対象とする言説との関係で重要な論点は以下の五つである。

(1) 人ごみと群集の区別

ル・ボンは群集と人ごみを厳密に区別した。偶発的な人々の集積だけでは群集を形成するには不十分であり、外部からの刺激や影響によって人々の感情や思考がただひとつの方向に導かれる必要がある。その場合にのみ、諸個人の意識的な人格が消滅してひとつの集団精神が形成されるのである。このとき成立する単一の存在をル・ボンは「心理的群集」と定義した。

(2) 群集と個人のラディカルな対置

群集を個人に対立させることは、ル・ボン以前の群集論にも共通する要素だが、ル・ボンは、群集の性質はそれを構成する諸個人の性質からは導き出せないと主張することで、個人と群集の対立を極限にまで押し進めた。群集化した諸個人は一人にいるときとはまったく異なる仕方で考え、感じ、行動することになるとされる。

(3) ラディカルな同質化としての群集化

ル・ボンはまた、個人が群集の一員になるプロセスをラディカルな同質化と定義した。どんなに教養と分別のある個人でも、群集の一員になるや否や個人としての性質と能力を喪失し、群集に共通する特徴を帯びることになる。

(4) 個人と群集の両極への人間の諸能力の再配置

ル・ボンは群集に固有の特徴として、衝動性、興奮しやすさ、論理的思考能力と判断力の欠如、アナロジーとイメージに導かれる想像力の働き、感情の誇張などを挙げる一方で、個人には論理的思考能力、判断力、批判的精神、感情や衝動を統御する能力を帰している。それゆえ、ル・ボンの分析においては、個人と群集の対立は、同時にまた、意識と無意識、精神と身体、理性と感情、論理的思考と想像力の対立でもある。

(5) 群集の客体性と指導者の不可欠性

ル・ボンの理論によれば、群集化するということは、主体のステータスを失うことを意味している。ル・ボンにとって、明瞭な意識と意志を備えた自由な行動の主体たりうるのは個人だけであり、群集は内発的な動因を欠いた客体的なものとみなされる。それゆえ群集は、行

代のドイツとオーストリアにおける群集心理学と群集論-」、『ドイツ文学』(第 130 号)、日本独文学会、2006 年、120-139 頁。

動するために、つねに外的な動因を必要とする。この動因が指導者である。ル・ボンはこうした群集と指導者の関係を催眠術のモデルを用いて説明した。

3-2. タルドの群集心理学

タルドの群集心理学は、一見したところ、ル・ボンの言説ほどにはドイツ語圏の議論に影響を及ぼしていないように思える。しかし、実際には、フロイトの群集心理学やメディア化された群集を扱うヴァイマル共和国中期の言説において、それは重要な役割を果たしている。ここでは二点に絞ってその特徴を確認する。

(1) 群集 (foule) と公衆 (public) の区別

タルドによれば、群集が「身体的接触によって生まれた本質的に心理的な伝染の束」として、密度と近さを前提し、つねに限られた空間を占めるのに対して、公衆とは「純粹に精神的な集団」であり、「物理的には分離していて、心的にのみ結合しているような個人たちの散乱分布」である⁶。群集が街頭や広場に出現し、集団で行動するとしたら、公衆はいわば不可視であり、メディア技術の媒介によって純粹に心的に構成される集団だと言うことができる。すでに述べたように、ドイツ語ではいずれの集団も *Masse* という言葉で分節化される。

(2) 群集と組織集団 (corporation) の区別

タルドは集団を組織性の度合いによって分類することも提案した。一時的で、無定形で、階層秩序を欠いた群集が一方にあり、組織化され、階層秩序をもち、恒常性を獲得した組織集団が他方にある。タルドによれば、前者の代表が革命時に出現する群集であり、後者の代表は修道院、工場、軍隊であった。そして、組織集団の「もっとも広大な表現」は、教会と国家だとされる。この区別はフロイトの群集心理学にも形を変えて見いだされる。

4. 集団の行動をめぐる二つの知

すでに「群集」の回帰を論じたさいに触れたように、集団の行動をめぐる二つの新しい知——集団的な政治行動の政治哲学と群れの科学——は、古典的群集心理学に淵源を持つ 20 世紀的な群集をめぐる思考の枠組みから一線を画している。本論叢に収録された論考では、これらの新しい言説を両大戦間の言説と直接に接続する議論はあまりなされていないが、最後に簡単にその要点に触れておきたい。

たとえば、ジュディス・バトラーのアセンブリ (集会) の政治哲学は、主権的主体——自

⁶ Gabriel Tarde: *L'opinion et la foule*. (1901) Paris (Librairie Félix Alcan) 1922, S. 2. 訳出にあたって、『世論と群集 (新装版)』(稲葉三千男訳、未来社)を参照したが、一部訳文を変更している。

由に思考し行動する能力を持つとされる個人——を出発点して集団的な行動を考えるのではなく、一人ひとりの人間のあらかじめ主権的な主体性を剥奪された関係的・相互依存的な存在様態のうちに、集団的な政治行動の条件を認めている。この点でバトラーの考察は、群集心理学のパラダイムを解体している。バトラーによれば、デモや占拠のような人々の集団行動は、理性的な諸個人の合意に基づく組織化された運動でも、強度的な情動において一気に形成される集合的主体の行動でもない。それは還元不可能な多数性としてある人々のあいだの関係的な存在様態に立脚し、人々の日々の抵抗の経験の中で時間をかけて形作られる認識と判断に支えられたオルタナティブな共同性の遂行 (enactment) なのである⁷。

他方、群れの科学は、集団の振舞いのうちに中枢的な指揮系統もヒエラルキーも必要としない自己組織化のモデルを見いだすことで、群集と知の関係を刷新している。群集心理学に代表される 20 世紀の知においては、群れあるいは群集を考えることは、理性の限界に触れることであり、無秩序、見通しがたさ、不気味さに遭遇すること——知の外部と向き合うこと——と同義であった。それに対して、いまや人間も含めた群れの振舞いは、そこから洗練された組織化のモデルを抽出することのできる知の源泉となっているのである。この新しい知においては、群集は狂気ではなく、知能 (群知能) と関係づけられることになる⁸。

本論叢に集められた論考は、以上に素描した群集の概念史的な広がりや集団の行動をめぐる新しい知の形成を念頭におき、群集という形象が歴史化した地点から、両大戦間のドイツ語圏の文学や思想で主題化された群集を再検討する。そのさい、私たちは、20 世紀の群集をめぐる思考に逃れがたく纏いついていたパトス——群集に対する嫌悪や軽蔑、あるいは群集に託されたユートピア的な希望——を共有することなく、群集を考察することになるだろう。そのようなパトスなき眼差しは何を発見することになるのだろうか。これが本論叢の根底にある問いである。

⁷ Vgl. Judith Butler: Notes Toward a Performative Theory of Assembly. London (Harvard University Press) 2015, p. 9, p. 178. Dies.: "Uprising". In: Georges Didi-Huberman (Hrsg.): Uprisings. Paris (Gallimard), 2016, p. 27.

⁸ Vgl. Sebastian Vehlken: Zootechnologien. Eine Mediengeschichte der Schwarmforschung. Zürich (diaphanes) 2012, p. 395, S. 406.

発酵する群集

A・デーブリーン『山海巨人たち』におけるモノの多様性

桑田 文

「人間は地表に巣食うバクテリア以外のなにものでもない」(SLW52)——アルフレート・デーブリーンは、バクテリアに等しい人間が頭脳とテクノロジーを手に入れて地球を荒らしまわると未来を小説『山海巨人たち』(以下BMGと表記)に描いた。バクテリアなどの微生物は地球上のあらゆる環境に存在し、温度等の環境条件に適応しながら複雑で密度の高いコミュニティを形成する¹。一方、世界には微生物のほかにもたくさんの群れが存在している。デーブリーンは世界には群集しか存在しないと考えた。「世界はただ膨大な数とそのきつかったりゆるかったりする結びつきからなる。それは細胞であり、植物や動物や人間であり、硫黄や銅や鉄もあれば、ガスや液体もある。そうして世界はひたすら量を増して広がる」(UD59)というのだ。このように生態系を視野に入れるデーブリーンのもとでは、バクテリアに喩えられる人間のみならず、有機物であれ無機物であれ、有形無形のあらゆるものが「Masse」という語に回収されることになる。

デーブリーンの多くの小説では、兵士や労働者の群れ、革命群集、人口過密な都市群集など、人間の集団が中心的な登場人物に劣らぬ存在感を示し、群集が重要な社会的アクターとなっている。政治エッセイ「共和国」(*Republik*, 1920)のなかで「感情に訴える曖昧で眩しい言葉や概念」が「普段ものを考えない連中の脳味噌を刺激し、問題をよくわかっていない者たちを誘惑する」(SPG121)と述べられていることを殊更に重視するならば、先行研究において、群集を非理性的な存在として捉えるル・ボンやフロイトの群集心理学の間接的な影

本論考は2023年10月14日(土)日本独文学会秋季研究発表会(京都府立大学)シンポジウムI:「〈群集〉を再訪する——ただしパトスなしに。両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討」における口頭発表「発酵する群れ、発熱するテキスト: アルフレート・デーブリーン『山海巨人たち』における文学的テルモグラフィー」の発表原稿に大幅な改稿を加えたものである。デーブリーンの著作からの引用は以下に拠り、タイトルを略記し頁数のみ示す。Döblin, Alfred: *Schriften zu Leben und Werk*. Olten und Freiburg i. Br. (Walter) 1986 (SLW); ders.: *Berge Meere und Giganten* [1924]. Herausgegeben von Gabriele Sander. Düsseldorf (Walter) 2006 (BMG); ders.: *Unser Dasein* [1933] Olten (Walter) 1964 (UD); ders.: *Schriften zu Politik und Gesellschaft*. Olten und Freiburg i. Br. (Walter) 1972 (SPG); ders.: *Berlin Alexanderplatz. Die Geschichte vom Franz Biberkopf* [1929]. Zürich und Düsseldorf (Walter) 1996 (BA); ders.: *Schriften zu Ästhetik, Poetik und Literatur*. Olten und Freiburg i. Br. (Walter) 1989 (SÄ); ders.: *November 1918. Eine deutsche Revolution. Erzählwerk in drei Teilen. Zweiter Teil, Zweiter Band: Heimkehr der Fronttruppen* [1949]. Solothurn (früher Olten) (Walter) 1991 (HF).

¹ サンダー・エリックス・キャッツ『メタファーとしての発酵』(水原文訳、オライリー) 2021年10頁参照。

響が指摘されることにも納得がいく²。しかし、別のエッセイ「自然主義的時代の精神」(*Der Geist des naturalistischen Zeitalters*, 1924)で、資本主義社会のシステムである大都市が「集合的存在 (Kollektivwesen)」としての人間の「珊瑚株 (Korallenstock)」(SÄ180)に喩えられたり、都市生活者の行動パターンから渡り鳥の模倣のメカニズムとのアナロジーが導き出される点にも留意したい³。デーブリーンの群れの科学は集合的存在として人間の創発的進化を可能にした群集の知性や合理的思考を認めるものであり、群れる人間の行動を蒙昧として批判する心理学的な言説から逸脱する面があるのだ⁴。このようにデーブリーンの *Masse* について考えるならば、人の集団に限定するだけではその絶妙な魅力と多様性を捉えきれない。有機物、無機物、有形無形の様々な群集を射程に入れて、マクロとミクロのあいだを行き来する作者の変幻自在な語りのパースペクティブに注意を向ける必要がある。

本論考は「発酵 (gären)」と「共振 (Resonanz)」というキーワードを介して、BMGにおける群集をめぐるナラティブの射程の広がり測る試みである。*Masse* の語源であるパン生地に関わる発酵は、食品のパンが作られる工程に欠かせない化学反応であり、共振は物理学の用語なので、文学作品の分析には意外な取り合わせに見えるかもしれない。しかしいずれも群集と環境との関係に注意を促し、人間の集団に限定されないデーブリーンの群集表象の多様性を浮かび上がらせるのに有効な概念だと思われるのだ。群集といえば、未来派の熱狂的なパトスや新即物主義的な冷たい観察がすぐに思いつくが⁵、本稿が論じる発酵し共振する群集は、それらとは大きく異なり、デーブリーンのテキストにパトスなしに発熱することを要請せずにはおかないだろう。

1. *Masse*・発酵・温度

デーブリーンのテキストにおける群集の多様性や *Masse* の意味の広がりを考察するにあたり、はじめにドイツ語の *Masse* という語の由来を確認する必要がある。*Masse* の語源

² Vgl. Hahn, Torsten: Nachwort. In: Döblin, Alfred: *Schriften zu Politik und Gesellschaft*. Frankfurt am Main (Fischer) 2015, S. 492-509, hier S.501f.

³ Vgl. SÄ188f.

⁴ 人間の集団形成と創発的進化については vgl. Hahn, a.a.O., S. 502f. また、デーブリーンの群集表象を同時代の言説との関連において捉え直し、その大衆に開かれた態度や群集に知性や精神を見出す人間学的な考察を評価するものとして vgl. Becker, Sabina: „Korallenstock“ Moderne. Alfred Döblins Poetologie der Masse. In: Keppler-Tasaki, Stefan (Hg.): *Internationales Alfred-Döblin-Kolloquium, Berlin 2011. Massen und Medien bei Alfred Döblin*. Bern (Peter Lang) 2014, S. 33-50.

⁵ BMG における未来派や表現主義や新即物主義の影響については以下が詳しい。Vgl. Sander, Gabriele: Nachwort. In: Döblin, Alfred: *Berge Meere und Giganten*. Frankfurt am Main (Fischer) 2013, S. 628-651, hier S. 629; ガブリエーレ・シュトゥンプ: 陶酔と制御——アルフレート・デーブリーン『山と海と巨人』における技術。鍛冶哲郎/竹峰義和(編)『陶酔とテクノロジーの美学——ドイツ文化の諸相 1900-1933』(青弓社) 2014年 65-24頁。

をさかのぼれば「パン生地」を表すギリシャ語の $\mu\alpha\zeta\alpha$ やラテン語の *massa* に辿りつく⁶。そして中高ドイツ語では、酵母の働きによって膨らむパン生地や、錬金術などで嵩を増す金属が *masse* と呼ばれ、未成形の状態にある集塊が意識されていたという⁷。

ペーター・フリードリヒは自身のカネッティ論の余論のなかで、ギリシャ語の $\mu\alpha\zeta\alpha$ の語源がユダヤ教の過越祭で神に捧げられる「未発酵のパン (Mazzen)」につながるものであることをふまえ、宗教的な文脈における禁忌としての発酵に注目し、バシュラールやカネッティを参照しながら、発酵をめぐる言説に潜む権力と共同体支配の構造を浮き彫りにする⁸。例えばバシュラールによれば、未発酵は「静止状態と凝集」を、発酵は「動きと自由」を象徴するものであり、したがってユダヤ教における発酵パンの禁忌は、民衆みずからが変化して自己を形成することを禁じると同時に、神の契約にもとづく宗教的・民族的秩序の維持、ユダヤ教徒の結束性を表している。フリードリヒはこうした未発酵の「静止状態と凝集」をカネッティの「閉じた群集」につなげ、他方、発酵の「動きと自由」は、無秩序、動的エネルギー、成長や変化への欲求を象徴することから「開いた群集」に接続される⁹。さらにフリードリヒは発酵のロジックとして、小さな原因が大きな効果をもたらすこと、その広がりやスピード、自己変性作用をあげるが、完璧な結束性を求める一神教は、こうしたロジックが民衆の社会活動に与える影響を恐れたということだ¹⁰。

「発酵」を意味するドイツ語の動詞 *gären* の語源をDWDSで調べると「高次の有機化合物からより単純な化合物に分解する (*zersetzen*)」「泡立ちながら沸騰すること (*schäumend aufbrausen*)」とあり、そこから「危険をはらんだ (*bedrohlich*)、ざわついた (*unruhig*)」といった意味への派生が認められている¹¹。またグリムのドイツ語大辞典では、人間の精神や心理状態を表す場合にも *gären* が用いられると説明されており¹²、なるほど DUDEN をひもとけば、ワインやパンの発酵とならび、個人や人間集団のあいだに不満や不安や憎しみや怒り等の感情が渦巻く様子を表す際にもこの動詞が用いられることがわかる¹³。

一般的に、微生物の働きによって有機物が分解され、より単純な物質に変化する反応のう

⁶ Vgl. Gamper, Michael: *Masse Lesen, Masse Schreiben. Eine Diskurs- und Imaginationsgeschichte der Menschenmenge 1765-1930*. München (Fink) 2007. S.19f.; *Masse* の語源に関する詳しい説明については本叢書「はじめに」(海老根 剛)を参照のこと。

⁷ Vgl. Friedrich, Peter: *Die Rebellion der Masse im Textsystem. Die Sprache der Gegenwissenschaft in Elias Canettis „Masse und Macht“*. München (Fink) 1995, S. 292-309, hier S.292ff.

⁸ Vgl. ebd., S. 295-298.

⁹ Vgl. ebd., S. 300f. バシュラールとカネッティについてはフリードリヒに拠る。

¹⁰ 発酵のロジックについては vgl. ebd., S. 304.

¹¹ Degitales Wörterbuch der deutschen Sprache: <https://www.dwds.de/wb/gären> (最終閲覧: 2024年5月5日)

¹² Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm auf CD-ROM und im Internet: <http://dwb.uni-trier.de/de/> (最終閲覧: 2024年5月5日)

¹³ DUDEN Deutsches Universalwörterbuch. München (Bibliographisches Institut) 2007.

ち、特にそれが人間に有益な物質を生み出す場合は発酵と呼ばれ、人間のためにならない物質に変わる場合は腐敗と呼ばれる¹⁴。こうした意味の重なりにより、発酵は、フランス革命以降のヨーロッパ文学において、革命の熱狂を具象化する集合的象徴の一つとなった¹⁵。メタファーとしての発酵の力に拠りながら人間社会の変化を捉えようとする発酵復興主義者で作家のサンダー・エリックス・キャッツは次のように述べている。

発酵を意味する英単語、fermentationは、文字通りに細胞代謝現象（微生物やその酵素が栄養素を消化し変容させること）を示すだけでなく、揺らぎ、興奮、泡立ちといった状態を暗示する、はるかに広い意味でも使われる。（略）つまり、何であれ泡立つもの、興奮あるいは揺らいだ状態にあるものは、発酵していると言えるわけだ。¹⁶

キャッツの言葉を敷衍すれば、発酵という言葉がメタファーとして用いられる場合、それは、揺らぎ、泡立ちながら、これまでであったものを別のものに変えて広がっていくというゆるやかな変化の原動力を表すことになる¹⁷。例えば、エルンスト・ユンガーの『労働者』には次のような箇所がある。

日曜日や祝日のにぎわいや社会のなかに、政治的な集会では投票し同意する要素として、あるいは街路の暴動のなかに出現し、バスターユに押し寄せたような群集なるものは、かつていくつもの戦争のなかでその残忍な重量級の突撃力にものをいわせ、彼らの歓喜の声は先の大戦の勃発時に世界の都市を震撼させたものだが、その灰色の軍隊は総動員解除によって分解酵素にかわり、通りの隅々に消えていった。この集団は、決定的な勢力としていまだにそれを拠り所とする者と同様に、もはや過去のものだ。¹⁸

第一次世界大戦の後、総動員が解除されて路頭に迷う復員兵たちが「分解酵素 (ein Ferment der Zersetzung)」に喩えられている。かつてドイツ帝国を支えた軍隊は解体され死んだも同然、分解つまり腐敗の一途を辿るわけだが、構成員であった兵士たちも軍隊と共に消えてしまったということだ。デーブリーンも『November 1918』の第二部・第二巻『前線兵士の帰

¹⁴ 日本大百科全書 電子辞書版 (小学館) を参照。

¹⁵ Vgl. Friedrich, a.a.O., S. 301; Gamper, a.a.O., 465.

¹⁶ キャッツ、前掲書 21-22 頁。

¹⁷ このほか社会理論における温度の形象という観点からメタファーとしての発酵を言説史的にふりかえる試みとして vgl. Beregow, Elena: *Fermente des Sozialen. Thermische Figuren in der Sozialtheorie.* (Velbrück Wissenschaft) 2021. 分解、発酵、腐敗というキータームを介して共同体社会や歴史や文化を読み解く論考として、藤原辰史『分解の哲学——腐敗と発酵をめぐる思考』(青土社) 2019 年も参照。

¹⁸ Jünger, Ernst: *Der Arbeiter. Herrschaft und Gestalt* [1932]. (Klett-Cotta) 2014, S. 117. 訳文は以下に拠り、適宜筆者が手を加えた。エルンスト・ユンガー『労働者』(川合全弘訳、月曜社) 2013 年 145 頁。

還』のなかで、路上にたむろする復員兵の群れを捉えている。

第一部、それは戦闘と行進と塹壕と野戦病院を伴う帝国軍——終わりの見えない戦争だった。第二部、休戦、引き揚げ、革命。第三部、それが今であり、みな一人ぼっちになっていた。話し相手がおらず、何かを恵んでくれる人もいなかった。今となっては帝国軍の竜もばらばらに解体されてしまった。／そして周りを見渡せば、そこにいるのは除隊された兵士たち。町に戻ってきたときには、すでに幾千もの人間が路上に溢れていた。今やみなそこに混ざり込んで街路を覆う泥の一部となったのだ。(HF353)

ここでデーブリーンは通りの復員兵の群れを「泥 (Schlamm)」と表現している。総動員をほどかれた復員兵たちは土に還ったということだ。もっともユンガーとデーブリーンの記述にはニュアンスの違いはある。ユンガーの目にはドイツ兵たちは「消えた」ように映ったが、デーブリーンは消えたとは考えていない。むしろ、歩道にへばりつく形なき泥から新しい何かが形作られる気配を読み取ったのではないか。兵士の多くが労働者だった。無事に故郷のベルリンに帰還しても工場は稼働しておらず、仕事はない。歴史をふりかえれば、泥という無形の塊に喩えられた彼らが、やがてスパルタクスや共産党、あるいはナチスの突撃隊に加わり、社会が大きく変わる原動力となったのは明らかだ。

ところで発酵は泡立ちや熱を生むが、世界は Massen からなると考えたデーブリーンは、「熱 (die Wärme)」までも Masse とみなしている。

熱は目に見えない集塊 (Masse) であり、物体と物体のあいだ、物体を作る分子と原子のあいだに入り込んで、それらを離れ離れにすることができる。固体はこうしてまず液体になり、それから気体になる。固かろうが、液状だろうが、熱がこの固体や液体を作るわけではなく、こうした形状化を成し遂げるのは物体それ自体だ。しかし熱は形状化を克服し、いわば物体と物体をくっつけている接着剤を溶かすのである。熱はあらゆる形成力に対立し、その敵となる。(UD136f.)

発酵するパン生地由来するドイツ語の Masse と目に見えない熱の塊としての Masse は、結束をほどいてアモルフな状態を生じさせるという点で共通している。ただし、持続的かつゆるやかな社会変化の原動力として、メタファーとしての発酵に期待を寄せるキャッツのエコロジカルな思想を嘲笑うかのように、デーブリーンは発酵と熱にグロテスクな力を感じ取り、次のように可視化している。

森は鬱蒼と繁り、窮屈な、どんどん窮屈になる箱となり、その蓋から光が漏れていた。

刺激臭を発するガスがたちこめ、空気は発酵しながらむっとしていた。それにしても地面は、ついさっきまでは平らだったのに、波打ち、とぐろを巻いて、曲がりくねっていた。もりあがった土のなかで根がふくらみ、腕のように太くなった脈から砂がこぼれ落ちた。地面がどンドンせりあがっていった。／ 彼らは、ほんの数時間前ならどこにでもスペースがあったことをおぼえていないかのように、太く、どンドン太くなる木々のあいだに隙間を探した。みな息をきらし、ぬけがけして薄暗いところからより明るい場所に身をくねらせて移動していくものがあると毒づいた。たびたびだれかが飛び上がった、男が、女が、衣服を脱ぎ捨てながら、一本の木に飛びかかって、しがみつ、噛みついた。しかし、噛みつかれた木は嫌がってそれをふりほどいて、涎をたらし、とても湿っていて、とてもあたかかった。そして人間たちの舌を腐らせた。(BMG141)

これは27世紀頃の出来事として語られている。ベルリンの執政官をつとめる科学者マルドゥックは植物に妙な成長を生じさせる実験を行っていた。彼は四十二人の男女の囚人に命じて自分の作業場に隣接する壁の向こうの小さなブナの森を漂泊させる。そこで囚人たちは、極端な規模とスピードで成長した木々に捕食されるのである。「ぶかっこう (unförmig)」に巨大化した木々の「集塊 (Massen)」(BMG140) が空間を奪い、まるで「沸騰している (kochen)」かのように「しゅーしゅーと音をたて (zischen)」、「アンモニア」(BMG139) のような鼻をつく臭いを発していた。木の「箱」と化した森のなかでむっとする (muffig) 空気が発酵 (gären) している。ここでは成長、熱、沸騰、臭気という発酵を特徴づける現象がテキストを満たしており、ミクロの次元の出来事であった発酵がこのように人間を凌ぐスケールに拡大されることによって、科学技術の力で自然を自在に操れると考えていた人間が、やがて自身が生み出したものを制御しきれなくなる未来がほのめかされるのである。そして『ベルリン・アレクサンダー広場』でも Masse と熱が描かれている。

うわ、ものすごい湯気だ！ あいつら茹で蛸みたいになってるぜ。ほら、風呂場みたいな湯気のなかにお前が見える、あそこで豚たちはロシアやローマの風呂に入っているのかもしれない。みんなどこかに向かっているが、お前にはその行き先がわからない。メガネが曇っている、ひよっとするとみんな裸なのか、リウマチの発汗療法かな、コニャックだけじゃ効かないのか。スリッパをぱたぱた鳴らして歩いている。湯気が濃すぎて何も見えない。それにしても、このぶうぶう、がらがら、ぱたんぱたん、男たちの叫び声、機械の落下、蓋を叩く音ときたら。(BA138)

第四部の「この〔家畜の〕ように人も死ぬ」(BA136) と題された章では、屠殺場に連れてこられた家畜の群れと組織的に遂行される屠殺の過程が衝撃的だが、屠殺場の空間そのも

のに意識を向ければ、視界を奪う湯気の効果が見えてくる。一瞬ではあるが、屠殺場がリューマチ発汗療法のための浴場に変質し、屠殺される豚の群れにリューマチ患者の裸体が重なるのだ。読者は惑わされ自分の立ち位置を見失う。R・W・ファスビンダーは本小説を映画化した際に、家畜の群れを、効率的に殺害される人間の群れにすり替えて山積みになる全裸の死体を映し出した。そして、ウンベルト・エーコは「この細部、数字、血の洪水、おびえた子豚の群れという過密のなかでは、場所の形態と出来事の論理的なつながりを認識するのは困難」だと考えた¹⁹。双方とも屠殺場のエピソードからナチスの強制収容所を予言するような伏線を読み取っているのは間違いない。しかし、とりわけエーコの指摘で興味深いのは、子豚の群れや血液の洪水など、屠殺場という語りの空間での過密と、大量の数字や地理や敷地や施設をデータとして正確に記述する言葉というテキストレベルでの過密が並列されている点である。デーブリーンの *Masse* を描くとき、*Masse* を語る言葉もまた過密化し *Masse* となる。エーコが述べるように、屠殺場の規模や設備や殺しの過程を細部に至るまで詳細に記述する、その極端に官僚的な緻密さと細部の凝集は狂気の域に達している。一方、閉じられた空間に充満する熱気と湯気は屠殺場を異化させて、テキストに書かれた経済効率至上主義の秩序に基づく場所の論理や行為の合理性を骨抜きにするのである。

ちなみに、この章では家畜の頭数と市場で動くお金の規模を表す数値や説明文のあいだに「敷地内に戦没兵士のためのオベリスクが立っている」(BA137) という一文が挿入されている²⁰。もっとも、ここでのオベリスクは屠殺場を構成する様々な物の一つにすぎず、そのほかの大量の情報に埋もれるがゆえに、オベリスク本来の死者の鎮魂の意味は消滅している。大量死の記憶が情報の集塊に埋没し忘却される状況が、テキストのレベルでさりげなく可視化されるのだ。

2. 「共振」の詩学——環境に適応するための能力として

それでは、先ほどの泥に喩えられる復員兵たちを一つにまとめ上げるものはいったい何か。デーブリーンの思考に拠るならば、それは「共振」である。共振とはデーブリーンが好んで使う物理学の用語だ。デーブリーンによれば、物理学では、一つの体から発せられる振動は、同じ固有振動を持った別の体に吸収され、その体もまた振れ始めると考えられている²¹。つまり固有振動が違えば共振しないが、同じ場合はたとえ離れていたとしても振動を介して互いを認識し共振することになる。デーブリーンは自然哲学的・人間学的著作『われわれの

¹⁹ Eco, Umberto: *Die unendliche Liste*. Aus dem Italienischen von Barbara Kleiner. München (Carl Hanser) 2009, S. 284.

²⁰ 都市空間に表出する戦争については vgl. Honold, Alexander: Im Nervenzentrum der Katastrophe. Die Großstadt als traumatischer Gedächtnisraum in Döblins „Berlin Alexanderplatz“. In: Klinkert, Thomas / Oesterle, Günter (Hg.): *Katastrophe und Gedächtnis*. Berlin / Boston (de Gruyter) 2014, S. 99-119, hier S. 115f.

²¹ デーブリーンによる物理学の共振の定義については vgl. UD169ff.

『現存在』において、ラジオのチューニング、振り子の運動、ヴァイオリンの弦に生じる共振現象を例示しながら上述のように物理学の共振についてまとめているが、さらに共振は物理学だけのものではないと考えて、それを社会的な領域にも応用する。

第一に、デーブリーンは共振を人間の模倣の能力に結び付けて「実践的な共振 (praktische Resonanz)」 (UD171) なるものについて説明している。

これと大衆形成、グループや群れの形成そのものが密接な関係を持つ。彼らの根底には、同じことを繰り返したがる傾向、繰り返しへの衝動、共振への強迫がある。人は自分で自分を調整する。人々は集まり中心なるものを形成する。その中心、つまり指導部が音源となりそこから音が広がっていく。共振は集会の方法であり原理であり、社会を生み出す。／ 共振は生き物や群集形成のための方法である。／ 認識と同じように共感もまた共振現象に属するものだ。／ 共振は、共鳴を促し、受動的なところがあるかのように見える。しかし、結局のところこれらの共振の動きはそのほかの動きほど受け身ではない。共振によって覚醒や解体が引き起こされるのである。(UD171f.)

同調への「衝動」、共振への「強迫」とくれば、まるで心理学のようだが、これをデーブリーンは物理的な同期現象につなげていく。例えば、壁にかけた二つの時計の振り子は、振れのタイミングをわざと乱しても、しばらくすると壁を通しての微弱な相互作用により同期が成立する。「この世界はリズムにみちている」と述べる物理学者の蔵元由紀によれば、複数の振動、すなわちリズムの歩調がそろうことを「引き込み」または「同期」といい、「相互作用するリズムは、そのタイミングを相互に調整しあうことによって、協調した挙動を自己組織化する能力をもっている」ということだ²²。

デーブリーンは共振とは人が考えるほど受動的な動きではないと考えた。「自分で自分を調整する (Man ordnet sich an)」という man を主語とする再帰表現からも、共振が主体を特定することなしに協働を促す自己組織化の作用であることは明らかだ。「ある体の振動が周囲の体と同じ振動を伝え、その体たちが伝播体 (Überträger) として機能する」のであれば、共振においてやがて「すべての体は、それ自身が発する振動を吸収する」 (UD170) ことになる。こうした定義が人間の群れに適応された場合、共振が人を覚醒させ、自分が自分に命じるものとなる一方、共振のなかで振動の源は消滅する。つまりわれわれは大きな関係性のなかに収まっているのだ。デーブリーンはこうした人々の共振を促す「凝集させる力 (Kohäsivkräfte)」について次のように述べる。

世界の物事や人間たちがもたらす苦しみと困窮が私たちのなかで強大な力を及ぼして

²² 蔵元由紀『新しい自然学——非線形科学の可能性』(ちくま学芸文庫) 2016年 133-138頁参照。

いる。欲求、欲望、愛、憎しみは、私たちを凝集させる力となっており、それらは私たちと切っても切り離せないものであり、これは決して抽象的な話ではないのだが、自然——食べること、飲むこと、呼吸すること——と社会——欲求、欲望、好意、嫌悪、困窮、充足——の関係の外側に人間という生き物を作り上げることは誰にもできないのである。(UD350)

人を「開いたシステム」²³として捉えるデーブリーンの人間学的な思考の特徴が際立つ一節である。人を「凝集させる力」、すなわち欲望や欲求、食べることや呼吸といった自然の代謝、そして他者との関係から生じるさまざまな感情が刺激となって人々を結びつける。つまり共振とは、人間をはじめとするさまざまな存在物を環境を介して結びつけるものであり、それは自然と社会を、そして私と他者を分つ思考を克服する。デーブリーンは共振を介して生まれる関係性のなかにあらゆる存在が成立すると考えており、したがって地球上の群集を構成する個々の要素は共振の中継点に過ぎない²⁴。

ミヒャエル・ガンパーは群集の瞬発力や爆発的な力を表す熱力学的な知の詩学について考察したが²⁵、デーブリーンの関心は人々を共振させるメカニズムに傾いている。

たとえば力学的衝突や落下の法則、さらに重力や遠心力が直接的かつ圧倒的な質量作用であるのに対して、共振の基礎にあるのは、微かな、極めて微かな形で現れる運動である。その微かな動きは繊細に震えながらぶつかり合い、共振を呼び起こす。そうやってインパルスが伝播される。／これが私たちの実存の根本をなす出来事であることがわかる。こうした深く繊細な影響を受けていないなんてことになれば、私たちは世界に存在する物質からできてはおらず、生きてはいないことになる。(UD172f.)

共振はデーブリーンの巨視的かつ微視的な群れの科学を浮かび上がらせる。共振を集合的存在としての人間に当てはめた場合、集団の内部に生じる繊細かつ持続的な刺激が複雑に

²³ 「開いたシステムとしての人 (die Person als offenes System)」については vgl. UD93-98.

²⁴ Vgl. Bultmann, Christof: Monströse Massen. Zur Ökologie in Alfred Döblins *Berge Meer und Giganten*. In: Keppler-Tasaki (Hg.), a.a.O., S. 127-148, hier S. 142f. ブルトマンは、デーブリーンの「共振」概念とガブリエル・タルドが述べる模倣の能力との共通点を見出す。タルドを援用するブルトマンによれば、人間社会とは人間の情緒や認識に働きかける刺激の効果であり、この刺激は慣習や流行や共感や従順や教育を介して人々のあいだに絶えず広がる。このとき集団の各構成員は単なる感情や情報の中継点となる。ブルトマンはさらにタルドの模倣の法則をブリュノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論に接続させて、自然と人間、自然と社会の二項対立を乗り越える BMG の群集表象を浮き彫りにする。

²⁵ Vgl. Gamper, a.a.O., S. 435-474. ガンパーはハイム、シュテルンハイム、カイザーらの作品に顕著な旧秩序を解体するエネルギー的な群集の描写と 19 世紀から 20 世紀初頭の熱力学等の物理学との影響関係について論じている。

作用しあい伝播するなかで人々は共に揺れ動くということになる。模倣の能力を心理的に捉えるのではなく、環境のなかで人間が生きていくために不可欠な現象として物質的かつ物理的に理解することによって、デーブリーンの群集表象もまた物質性を帯びるものとなる。

そして第二に、デーブリーンは、共振について思考しながら、病原菌や遺伝子の世界までも射程に入れていることを忘れてはならない。

そこで私たちには自然の力の均衡、つまり形あるものの形成と崩壊のための共振の意義が見えてくる。／ 私たち自身の実存のために、私たちが襲う病気のことを考えねばならない。一定数の病気は感染症である。植物的な病原菌がわれわれの体に根を下ろし、大きなコロニーを形成し、人体の組織を危険にさらす、もしくは破壊することに成功する。これは粗雑な物質的な圧迫であり篡奪である。ともかく、われわれの体に根をおろす植物生物たちのこうしたコロニー形成力は、もっと多くのこと、すなわち病原菌と私たち人間の同類性を意味している。身体のださまな領域から病原菌に対する抵抗がもたらされる。(略) 感染力、それは人間の身体という自己形成システムにおける奴隷の蜂起の可能性そのものである。粗雑な物質的な共振が原因なのか、より微細な共振が原因なのかはいうことはできない。遺伝的なものが、このシステムのなかで、遺伝子構造の結合を強固にすることもあれば、その結合をゆるめたりもする。(略) ここでは共振が自然関係の秩序の更新の際に主要な役割を果たすことを言い添えておきたい。共振は<適応>のための前提条件なのだ。(UD173ff.)

病原菌を捉えるミクロの視線が、それに対応する遺伝子のファジーな働きを捉え、さまざまなものが互いに補完し合いながら一つの身体を成り立たせる人間の性質を浮かびあがらせる。病原菌の体内への侵入とその身体反応を語る「圧迫 (Erdrückung)」「篡奪 (Ausbeutung)」「コロニー (Kolonien)」「抵抗 (Widerstand)」「奴隷の蜂起 (Sklavenaufstände)」といった言葉によって集合的存在としての人間の自己組織化の能力が暗示され、共振のなかでそれぞれが絶えず変化を繰り返しながら周囲の環境に対処し適応しようとする人間集団のイメージが二重写しになるのだ。

ところで、バクテリア研究においても微生物の環境適応能力をめぐる議論がある。キャッツによれば、19世紀にパストゥールによって始まったバクテリアの研究方法は、21世紀になって飛躍的に発展し、微生物を動的で複雑な群集として、つまり自然界のあらゆる場所に存在しているのと同じ状態で観察できるようになった。それにより、生物群集の多様性や、バクテリアの驚くべき遺伝的柔軟性とニッチな環境へのユニークな適応能力が明らかになったということだ²⁶。

²⁶ キャッツ、前傾書 39 頁。

こうした自然科学の分野における知の更新は、生態系における生物の環境適応能力について言及するデーブリーンの共振のテーゼを補強することになるはずだ。デーブリーンの共振は、微生物の群集に対するマイクロな眼差しを生態系のダイナミズムを捉えるマクロな眼差しへと拡大する。こうした眼差しの揺らぎのなかで集合的存在としての人間の社会システムが観察されるとき、地球上に巢食うバクテリアに喩えられた群集としての人間の営みが発酵自在な環境適応能力によって支えられていることが明らかになる。

それでは、地球が地表に蔓延る存在物が群れて結びつき作用しあう場だとすると、その営みの時間はどのように捉えられるのか。デーブリーンは「自然主義的時代の精神」のなかで、ある一つの時代というのは「常に様々な時代を捏ねまわした錯綜であり、大きく輪切りにしてもどこもかしこも発酵しきらない、生焼きのものであり、自らのなかに、他の諸力の残り滓を、また新しい力の芽を運んでいる」(SÄ187)と述べている。時間が「発酵しきらない」「生焼き」のものであり、「残り滓」と「新しい力の芽」を運んでいるとするならば、変化が進行する状態そのものが時間というわけであり、よってある一つの時代というのはさまざまな時代の分解と再生が同時に行われる場ということになる。こうしたデーブリーンの言葉に拠りながら、歴史的かつ空間的に環境を捉えるとき、さまざまな群集からなる世界も絶えず発酵しているとも考えられる。発酵は始まりも終わりもないこうした歴史観を表すメタファーとなり、テロスを目指す物語に基づく進歩史観とは一線を画す歴史のイメージを浮かび上がらせる。ある一つの時代というのは決して首尾一貫性をもって完結するものではなく、さまざまな時間や時代が内部で作用しあいながら変質している状態そのものなのだ。したがって、BMGにおいて、語りの時間はひたすら前進するにもかかわらず、何世代も前のカタストロフの記憶を消化し(きれ)ないまま新たなカタストロフを積み重ねる未来の世界にも納得がいく。

3. かたまり、ほぐれる —— 『山海巨人たち』におけるモノたちの群れ

それではBMGにおける群集表象はどのようなものか。世界は群集からなるというテーゼを証明するかのように、1924年に発表された本作品は人や動物や植物やモノや鉱物や自然界のあらゆる元素といったさまざまな群集が物語を動かしている。第一次世界大戦と思しき「世界大戦」以降の23世紀から27世紀に至るまでのヨーロッパを中心とする地球上の出来事、特に人類の自業自得とも言える戦いの歴史を600頁強のテキストに圧縮して語る小説で

ある²⁷。「匿名の年代記作者」²⁸が語り手となり、主に三人称を主語とする過去形で出来事が報告されることから、虚構のヒストリオグラフィーとして読むこともできるだろう。とはいえ、徹底的に時系列に沿って前進する語りではあるが、語りのなかの時間は端折られ引きのぼされる。地球規模のパースペクティブで捉えられる時の流れが読み手の時間感覚を狂わせるのみならず、破天荒でまとまりのない内容や独特の文体のせいで「扱いにくい (sperrig)」²⁹作品であることはまちがいない³⁰。一方、BMGにはデーブリーンの入念な資料・文献調査の賜物という側面もあり、作者がベルリンの図書館や博物館に足を運んで集めた当時の最先端の知や情報が反映されたテキストとなっている。領域横断的な知の集塊が作者の想像力と独自の語法や文体によって変質し、「受け継がれてきたヒューマンイズムの感情が消えて久しい」(BMG78)と述べられる未来世紀の、まさにポスト人間主義的な奇妙な世界を作り出している。BMGでは、このように物語とテキストの次元においてあらゆるものがマス化するその量的な広がりの中で、個と集団、人間社会と自然、有機物と無機物、事実と虚構などの境界が解消されることになる³¹。

デーブリーンは「〈山海巨人たち〉についての注釈」(*Bemerkungen zu »Berge Meere und Giganten«*, 1924)と題された自作解説のなかで、自分は個人的なものの敵であると宣言し、群集こそ自然な本来の叙事的登場人物だと述べているが³²、本小説の冒頭に添えられた「献

²⁷ 戦争などのカタルシスの歴史から BMG を読み解く論考として vgl. Scherpe, Klaus R.: *Krieg, Gewalt und Science Fiction. Alfred Döblins „Berge Meere und Giganten“*. In: Ders.: *Stadt – Krieg – Fremde. Literatur und Kultur nach den Katastrophen*. Tübingen (Francke) 2002, S. 99-127; Koch, Lars: *Krieg und Posthistoire in Alfred Döblins „Berge Meere und Giganten“*. In: Borissova, Natalia / Frank, Susi K. / Kraft, Andreas (Hg.): *Zwischen Apokalypse und Alltag. Kriegsnarrative des 20. und 21. Jahrhunderts*. Bielefeld (Transcript) 2009, S. 59-76; Honold, Alexander: *Exotisch entgrenzte Kriegslandschaften. Alfred Döblins Weg zum „Geonarrativ“ „Berge Meere und Giganten“*. In: Gess, Nicola (Hg.): *Literarischer Primitivismus*. Berlin 2013, S. 211-234.

²⁸ Sander, Gabriele: *Utopischer Roman „Berge Meere und Giganten“*. In: Becker, Sabina (Hg.): *Döblin-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. Stuttgart (Peter Lang) 2016, S. 83-92, hier S. 90.

²⁹ Ebd., S. 87.

³⁰ BMG は「このままいったら人間はどうなるのか」(SLW310)という作者の問いに基づいた思考実験であり、テクノロジーが極度に発展した時代の生-政治と自然と人間の関係が描かれることから文明批判の SF 小説として読まれてきた。BMG の成立と受容史については vgl. Sander, Gabriele: *Nachwort*. In: BMG766-79. 近年のエコクリティシズム、人新世、ポストヒューマンイズムとの文脈において本小説を再評価する研究を紹介するものとして vgl. Köhler, Jasmin: *Das Kannibalische. Eine Figur des Wissens vom Eigenen und Anderen um 1920*. (2023 年 3 月にフンボルト大学ベルリンに提出された未刊行の博士論文), S. 269-270, hier S. 260. 語りの時間のゆがみについては vgl. Willer, Stefan: *Planetarische Zukünfte. Kellermanns Der Tunnel und Döblins Berge Meere und Giganten*. In: Platt, Kristin / Schmitz, Monika (Hg.): *Zukunftsromane der Zwischenkriegszeit. Poetisch-politische Imaginationen*. Berlin / Boston (de Gruyter) 2022, S. 283-304, hier S. 283, 286-289.

³¹ Vgl. Bultmann, a.a.O., S. 145-148. プルトマンは *Textmassen* という言葉を用いて、BMG におけるテキストの集積が統一的な世界像を示すものではなく、マス化するテキストのなかであらゆるものの意味が解消されると述べている。

³² Vgl. SLW54.

辞」がすでに人間の枠を超えた集合的存在に光をあてるものとなっている。

分ごとに変化している。私がここで書いているこの瞬間、紙の上で、流れるインクのなかで、軋む白い紙の上にふりそそぐ屋間の光のなかで。紙がたわみ、羽ペンの下に皺が寄るように。羽ペンがしなりぴんと張るように。私の導きの手が左から右へ移動し、行の終わりにきたら左に戻る。私は指にペンを感じる。これが神経だ、血がどくどく流れている。(略) 私はそのなかの一個でしかなく、空間のちっぽけな一部である。私の机の上、白い布の上で三本の黄色いチューリップが萎れ、どの葉もたっぷりとしていて見ないわけにはいかない。隣には山査子に一蕊山査子の緑の葉。下の芝生にはパンジーに忘れな草にすみれが咲いている。五月だ。私は公園の木や花や草の数を数えたりはしなかった。どの葉に茎に根にも秒ごとに何かが起こっている。／そこで幾千もの名を持つものが働いているのだ。そこにあるのがそれなのだ。(BMG7f.)

「幾千もの名を持つもの (das Tausendnamige)」は、中性名詞であることから、人ではなく複数のものが一つのまとまりを形成していると考えられる。そこでは書き手の「私」も中性名詞の「一個 (ein Einzelnes)」となる。そして興味深いことに「幾千もの名を持つものが働いている」ことを表す動詞として *arbeiten* が用いられている。DUDENの *arbeiten* の項目には「活動している」「作用中である」ことを意味するとあり、「Der Wein, Most arbeitet (gärt)」 「Der Teig arbeitet (geht auf)」³³といった例文が与えられている。食品の発酵を表す場合にも *arbeiten* が用いられるとすれば、翻ってイメージは広がり、幾千もの名を持つものたちもまた発酵しているというふうにも考えることも可能だろう。指先を捉える書き手の視線は、身体の神経細胞という細部から室内のインテリアをなぞり、窓の外へと開かれていく。

動きに満たされた静けさ、私には聞こえないが、そこで何かが起こっていることはわかる。それがあれなのだ。幾千もの名を持つもの。とめどなくのたうち回りくるくる回り上がり下がり交わるもの。(BMG8)

「静けさ」を表す名詞 *Stille* から、デーブリーンを取り巻く物質世界が「動きに満たされた」均衡状態にあることが察せられる。音は聞こえないが、さまざまな存在物が互いに影響を及ぼしあうなかで穏やかな変化が絶えず続いている状態である。「幾千もの名を持つもの。とめどなくのたうち回りくるくる回り上がり下がり交わるもの (Das Tausendnamige. Sich unaufhörlich Wälzende Drehende Aufsteigende Zurückfallende sich Kreuzende)」に注目すれば、「幾千もの名を持つもの」のさまざまな営みが溶け合い、動作の分節化が解消される様子が、名

³³ DUDEN, a.a.O.

詞化された現在分詞を区切るコンマの省略によって視覚化されているといえる³⁴。「幾千もの名を持つもの」、そして「幾千もの存在 (d[as] Tausendwesen)」(BMG7) もすでに発酵する Masse であり、その内部でさまざまなことが起こっている。それは「物質の石のガスのなかで息づき、煙を吐き、ほぐれ、結びつき、消える」(BMG7)、その繰り返しである。書き手の「私」も「空間のちっぽけな一部」として、持続的に変化しながら均衡を保つ環境へと接続され、「この世界の片隅に存在する幾万のものと一緒に (mit Myriaden Dingen) この瞬間に収まる」(BMG8) ことになる。ここで書き手はもはや突出した個としては存在しない³⁵。

BMGでは「幾万のもの」、特に「モノ」³⁶の集まりがデーブリーンの群集表象の独自性を際立たせている。モノを通して世界の均衡が揺らいでほぐれる瞬間が捉えられ、未来小説として読まれるBMGの新たな側面を浮かび上がらせるからだ。生き物でもなく、精神に都合よく使われる象徴でもないモノは、目で見て手で触れることができる物質性 (Materialität) をそなえており、環境に応じて形が変わり変質することもあれば、場所の移動や持ち主の交代によって付与される役割や意味が変わることもある³⁷。デーブリーンはこうしたモノの特性を生かし、小説のなかのモノに小道具以上の機能を持たせている。「献辞」に登場するインテリアや文房具からも作者のモノに対するこだわりが見て取れるはずだ。

さらに第一章の冒頭では、世界大戦と呼ばれる戦争を生き延びたものたちがもはや生きてはおらず、彼らが残した建物や車や役所を引き継いだ次の世代も、その次の世代もすでに墓穴に落ちたあとの時代であることが語られる。ここでは「車」「建物」「工場」といったモノを介して世代間のつながりが表現されると同時に、これらのモノに「若い男たち」「若い女たち」「これらの男たちと女たちの子どもたち」(BMG13) が連なることによって人間集団もまた物質性を帯びることになる³⁸。デーブリーンが描く第一次世界大戦以降の虚構の世界では、移民の蜂起、ウラル戦争、権力闘争、人間が意図的に引き起こす環境破壊、巨大生物の襲撃、巨人たちの乱など、ひたすら戦いが繰り返されるが、こうした死者たちの集団はデーブリーンが軍医として経験した世界大戦の残像だと考えられる。

BMGは万能なテクノロジーを手にして思い上がる人間たちを恐怖に陥れる未来小説ではあるが、モノに目を向けることで、ひたすら前進する世界に抗いながら、破壊の記憶を照ら

³⁴ コンマの省略については、相馬尚之：万物混淆の叙事詩——デーブリーン『山と海と巨人』における怪物および巨人と列挙法、『Phantastopia』(東京大学大学院総合文化研究科表象文化論コース) 第2号、2023年182-198頁。ここでは187f頁を参照。

³⁵ 前掲書187頁。相馬によれば、作家がその身体を通じて世界と結びつき「幾千の名を持つもの」の働きを表出となる。

³⁶ 本論では本来の用途を超えた機能を持つ文学表象としての物を「モノ」とカタカナ表記する。

³⁷ モノやモノ表象をめぐる言説の推移については vgl. Scholz, Susanne / Vedder, Ulrike: Einleitung. In: Dieselben (Hg.): *Handbuch Literatur & Materielle Kultur*. Berlin / Boston (de Gruyter) 2018, S. 1-17.

³⁸ 群集としての人間集団とその物質性については vgl. Willer, a.a.O., S. 288.

し出そうとする歴史の天使の眼差しが浮かび上がる³⁹。BMGにおいてモノの群れについて考える際に、とりわけ興味深いのはアフリカからヨーロッパに流れてきたフルベ人の劇団が上演する芝居である。彼らの芝居はまとまりのある杵物語としてテキストに挿入されているが、なかでも略奪品や戦利品に埋もれて絶命する王の物語は、モノの群れと権力者の面白い関係を浮かび上がらせる。

王はふくよかな顔に黒い髭を生やしており、大きな耳たぶには、その中央に太くて白い銅の棒が貫通し、頭の上では帽子についた見事な孔雀とオウムの羽がゆらゆら揺れて、あらわになった女のような柔らかな胸元には重たい金銀の首飾り、銅の指輪に、魔除けの彫刻（略）——王のマンスは囲いの向こうに引っ込んだまま宮殿から出ようとしなかった。彼は豪華な王座に座ったままぶくぶく太っていった。（略）体の周りにぶら下げられた飾りは重なりあってどんどん密集していった（略）。／彼は、マンスはよりいっそう膨らんでいった。体を動かさず、自分の寝床や執務机にもなっていた籐椅子に重たい体をあずけて、そこから離れようとしなかった。首に巻いた帯に次から次へと新しい飾りをぶら下げていった。（略）堅牢に築かれた狭い王座の間には窓も扉も一つしかなく、ぎっしり詰め込まれた財産によってどんどん暗くなっていた。もはや小さな通路がかるうじて残っているだけだった。（BMG310）

王の顔つきや身体が克明に描かれ、武器や宝飾品や動物の身体の一部、討ち取った隣村の首長の首にいたるまで、彼が集めた戦利品や略奪品が列挙されている。対象に接近する語り手の視線によって一つ一つが焦点化されるので、個々のモノは、集積するアモルフなモノの山には回収されず、むしろその形態は差異化されて浮き彫りになる。王にとってこれらのモノは自身の権力を映し出す鏡であり、王座にしがみつくと彼の性格が、体を動かさない、椅子から離れない、というふうに身体的に表現される。「fetter und fetter」「dichter und dichter」「immer mehr schwoll er」と繰り返される比較級によって、モノのコレクションと脂肪の塊となった王の身体が空間のなかでひたすら嵩を増し、空間を奪い、動きを制限する様子がダイナミックに浮かび上がる。ある日、魔術師が持ってきた健康に効くとされる媚薬（Trank）を手に取ろうとして、ついに王は立ち上がる。

そこでマンスは王座の階段からよろけて落ちた。なんとか立ち上がった。豪華な飾りをぶら下げた重たい帯をはぎとろうとした。それはうまくいかなかった。片方の腕が大量の指輪やネックレスの集塊にひっかかってどうにもならなくなった。（略）足の踏み場

³⁹ 歴史の天使については vgl. Benjamin, Walter: Über den Begriff der Geschichte. In: *Gesammelte Schriften, Bd. I-2*. Tiedemann, Rolf / Schweppenhäuser, Hermann (Hg.). Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1974, S. 691-704, hier S. 697.

もなかった。ライオンの歯が彼の背の高い帽子を引きずりおとし、口を殴った。体を横にしてみたが、あまりにも太っていたので、通り抜けることができなかった。(略)ころげ落ちてきた動物の毛皮や尻尾の群れと闘った。鎌形の剣でそれらに打ってかかった。格闘した。次から次へと新しいのが落ちてきた。彼は押しのけていった。葉はそこにある、扉はもうすぐだ。彼は鎌形の剣を落とした。左手が首飾りに捉えられてしまった。外せない。頭にきた彼は悲鳴をあげながら、地団駄を踏んで前に突き進んだ。山積みになったもののあいだを頭からかき分けて進もうとした。その場でぐるりと回って向きを変えた。頭の上からキリンの尻尾の重たい群れがどさどさ落ちてきた。そこをなんとか抜け出すと、よろめいて乾燥バナナの山に突っ込んでしまった。目くらめっぽう手を振り回して、天井からぶら下がっていたライオンの歯と強力な象牙の飾りつきの紐をつかんでもぎ取った。そうしたら彼の頭を叩きつけるようにすべてが落ちてきて彼を圧迫した。バナナが彼の首を動かないように押さえつけて、叫び声をあげる顔を押し潰した。耳の横で柔らかいどろりとした粉が嵩をまし、鼻の穴に流れこみ、大きく開いた口のなかをいっぱいにした。それを呑み込んで呑み込んで、ぺっぺっと吐き出し、両手でそれを取り出そうとした。しかし、両手は膝の隣に入り込んで動かせなかった。両膝の感覚が麻痺していた。彼はさらにじたばたする魚のように頭を振ってもがいた。それから甘い粉状のものが頭の上を流れていった。顎の動きが止まった。眼に浮かぶ断末魔の苦しみも鎮まった。沼地に入るように足を潜りこませたはいいが、その粉状の果物に埋れて窒息してしまったのだ。数時間後、彼の女たちが笛を持ってそっと近づいたとき、ほじくり返された集塊に埋れている王を見つけたのだった。(BMG312f.)

モノで埋め尽くされた足の踏み場もない空間で、王はモノだけではなく自分の肉にも邪魔されて思うように動けない。王が動けば動くほど、次から次へとモノが反応し、どさっと落ちてくる。空間内に保たれていた均衡がほどかれ、モノたちもまた動き出し、王がモノに及ぼしていた力が王自身にはね返ってくるのだ。モノの群れのなかでこうした動きが連鎖するさまは、まさに共振そのものではないか。「沼 (Moor)」「どろりとした (sämig)」「粉状の (mehlig)」といった言葉が差異化されていた形あるモノの群れを「集塊 (Masse)」に変える。どろどろの粉と化したモノが嵩を増して王の体内に侵入することで、王とモノたちの境界が消滅する。つまり、所有者としての王と所有される存在としてのモノの、主体と客体の関係も失われていくのだ。とりわけ膨張する乾燥バナナはまさしくメタファーとしての発酵につながるイメージだろう。共振のなかで王の権力を結晶化していたモノたちの結束が解かれ、王の権力もろともモノに与えられていた意味も解体されたあげく、すべてが形なき集塊に回収されるのである。

王が集めたモノには暴力の犠牲になったものたちの記憶が保存されている。フルベ人が

伝えるマンスの物語は、権力に執着する王を戯画化するのみならず、モノたちが王の自滅を促し暴君に復讐を遂げるといった復讐劇にもなっている。王の権威を象徴するモノを介して死者たちの群れが可視化され、戦利品を引き回しながら地に倒れているひとびとを踏みにじって歩く勝者の凱進行進を断絶させるのだ⁴⁰。

デーブリーンはこのエピソードを書く際に、ゲオルク・シュヴァインフルトの『アフリカの中心で』（*Im Herzen von Afrika*, 1918）を参照し、王の名前のみならず、人物の風貌や装飾品など細部に至るまで、この本から多くのアイデアを得ていたということだ⁴¹。BMGで語られるフルベ人の芝居にも、デーブリーンが集めた情報や知が保存されているといえる。もっとも、この王の物語に当時の知が反映されてはいるが、それはデーブリーンの想像力と独自の文学技法によって変質しイメージとして膨らんだものである。テキストのなかでこうした当時の知も発酵しているのである⁴²。

ちなみにBMGでは、フルベ人たちは都市の周縁に芝居小屋を立てて、芝居をしながら自給自足のような生活をおくる存在として描かれる。「太陽が熱を放出するように」（BMG307）アフリカから欧州に人が流れ込み、原住民のかわいらしい歌や物語が「みなを心を溶かした」（BMG308）と伝えられる。ここでは「熱」や「溶かす」という言葉によって、西洋人に内面化されたテクノロジー崇拜や進歩思想といった価値観が解体されている。「芝居が繁茂するように増殖する」（BMG308）フルベ人は、武力を使った蜂起ではなく、芝居や歌といったソフトパワーで欧州の都市生活者たちの心を溶かしながら、西洋の文明社会に少しずつ影響力を拡大していく。彼らの芝居はこうした「開いた群集」⁴³の内部で作用する穏やかな変化の原動力を浮かび上がらせる。そして、やがて彼らのシンパが既存の政治権力を脅かす存在にもなっていくのである。

BMGでは身体を自由を奪われて塊と化する権力者がもう一人登場する。

⁴⁰ 戦利品と勝者の凱進行進については vgl. Benjamin, a. a. O., S. 696. 訳文はヴァルター・ベンヤミン『ボードレール 他五篇』（野村修編訳、岩波文庫）1994年 333頁を参照。

⁴¹ Vgl. BMG682 und 724f. このほか、デーブリーンが参照した文献については本書付録の文献リストと詳細な註が参考になる。

⁴² デーブリーンが渉猟した文献は地質学、鉱山学、気象学、海洋学、氷河学、進化論、旅行記、民族学など多岐にわたるといわれている。作者の文献コレクションと創作の関係について、またデーブリーンのアフリカとの取り組みについては vgl. Sander, Gabriele: “An die Grenzen des Wirklichen und Möglichen... “. *Studien zu Alfred Döblins Roman „Berge Meere und Giganten“*. 1988 (Peter Lang) S. 74-98; dies.: Die Afrika-Thematik in Alfred Döblins Roman „Berge Meere und Giganten“. In: Davies, Steffan / Schonfield, Ernest (Hg.): *Alfred Döblin. Paradigms of Modernism*. Berlin (de Gruyter) 2009, S. 229-244; Köhler, a.a.O., S. 269-270. ケーラーは「食べる」を手がかりに BMG におけるアフリカ移民の表象について論じ、さらに作者が大量の文献資料を渉猟して自作に取り込む行為を *einverleiben* というキータムを介して考察している。デーブリーンの著作における（ポスト）コロニアリズム的な要素については更なる検討が必要である。

⁴³ Vgl. Anm. 9.

彼は瞼と格闘した。角膜が乾き、瞼は、瞼は閉じることができなかった。ああ、目をつぶることができたらいいのに。彼は胴体を動かさないようにして、この小さな筋肉、瞼との戦いに集中した。一ミリずつ瞼をおろしたが、完全に閉じることができなかった。そのときだ、うまくいった、ついに何も見えなくなった。(略) そのとき霜に覆われて動かなくなった顔の上をゆっくりと伝う涙が凍り、瞼は凍りついた。二筋の薄い氷層が唇を覆うように広がり、開いた口のなかにおりてきた。氷層は舌を覆った。そして咽頭にはりついた。朝方、ジンボ派の男たちが装置を調べて動かした。そのとき、霧の中で、二代目執政官の体が鈍い音をたてて凍てつく大地に叩きつけられた。彼の衣服が弾け散った。耳を澄ましたジンボ派の男たちは野原の上に黒い塊が横たわっているのを見つけた。近づいてみると、じっと動かない動物のように地面で四つん這いになって硬直した人間の体だった。頭から金属の帯がぶら下がっていた。開いた口元からひどくゆっくりと血が滴り落ちていた。黒い水たまりが彼の周りにできていた。(BMG278f.)

ここでは、執政官の座を狙うジンボが発明した武器によって身体の自由を奪われていくマルドゥックの様子が一挙手一投足に伝えられている。マルドゥックの瞼の動きに密着する眼差しが際立つが、氷の層がそうした具象性を封じ込めていく。マンスを窒息させたどろどろの乾燥バナナのように、氷層がマルドゥックの口のなかに侵入し呼吸を奪い、その体は凝集する氷の層にとり込まれてたんなる「黒い塊 (eine schwarze Masse)」に変わる。BMGでは、膨張する森やモノや氷などによって明らかのように、さまざまな物質が集塊を作り、それが人の身体の自由を奪ってその権威を骨抜きするのだが、その際に温度や空間等の環境が重要なエッセンスとなるのは興味深いところである。

そしてマルドゥックもまた、マンスと同じく地に倒れたものたちの記憶を蒐集している。BMGでは、すでに述べたように、世界大戦、世界を火の海にするウラル戦争、人工的に引き起こされる環境破壊と気候変動、新種生物の襲撃、巨人の逆襲といったカタストロフによる破壊と再生の舞台となる地球の姿が語られており、こうした破壊の記憶の継承もこの作品のテーマとなっている。モノの集まりはそのためにも効果的な働きをしている。

美しい広間のような部屋をマルドゥックは使っていた。マルケがあつらえたものだった。左右の壁には床から天井まで覆う巨大な絵が飾られている。一方は色とりどりの集塊、角材に針金に機械の部品であり、それらはまるでおさがきかないかのように立体的に壁から飛び出している。反対側には洪水に瓦礫の山、沈んでいく動物と人間。部屋の中央には骨と頭蓋のピラミッド。(BMG163)

初代ベルリンの執政官マルケからマルドゥックが引き継いだ執務室には、先代が集めた骨や

頭蓋のピラミッドや「色とりどりの集塊 (farbige Massen)」、戦争絵画や戦争の瓦礫から作られたオブジェのような作品が飾られている。これらはウラル戦争の記憶を継承するものである。小説の終盤では破壊の歴史の記憶の継承と忘却をめぐる登場人物たちの発言が目立ち、さらには戦いの記憶を忘却から救うための「石碑 (Steinzeichen)」(BMG630) が至るところに建てられる。「彼らが忘れないのであれば、そんなものはどうだってよくなるのだが」(BMG216) という接続法II式で発せられるマルドゥクの言葉は集合的記憶の継承や想起の文化について思考するうえでも示唆に富む。だからこそデーブリーンは臭いを充満させるのだ。地底都市の廃墟から「腐敗のガス」(BMG614ff.) が漂う。艦隊を率いてアイスランドに派遣されたキリンは破壊に加担したことを恥じ入り、罪の意識に苛まれながら「わたしは腐臭を浴びて死ぬ、殺してくれ」(BMG616) と訴えるのである。

おわりに

Masse の語源につらなるパン生地を介して群集は発酵に接続される。泡立ち、膨張、変化を生じさせるその特性から、発酵は世界を変革する働きのメタファーとして受け入れられてきた。そしてデーブリーンの提示する共振はこの世に存在するさまざまな群れをチューニングさせる繊細な動きである。いずれもデーブリーンの群集を環境や空間との関係において捉える際に有効な概念であり、それによって作者独自の物質的かつ動的な群集の多様性が浮き彫りになった。BMGには、膨大な量の人間と物資が投入され多くの犠牲を生んだ第一次世界大戦の余韻が通奏低音のように鳴り響いている。テキストと物語のレベルであらゆるものが群れをなして発酵し続けており、それが目に見えない「死者の群れ」⁴⁴を可視化させる。破壊の記憶は地球の表面に蔓延る群集のなかで今もなお発酵し、温度や臭いを通して今を生きるわれわれの生理に訴えかけるのである。

* 本稿は JSPS 科研費 JP20K12988 の研究成果の一部である。

⁴⁴ 不可視の死者の群れについては本叢書所収の古矢論文に詳しい。

第一次世界大戦と「死者たちの群集」表象

——戦友意識と戦死者祭祀

古矢 晋一

1. はじめに

歴史学者ジョージ・L・モッセは『英霊』の中で、「大量死の経験」が戦間期ヨーロッパの政治を決定付けたと述べ、第一次世界大戦がもたらした史上初の「大量死との遭遇」の広範な影響について論じている¹。モッセによれば、第一次世界大戦の両陣営あわせておよそ1300万人の戦死者は、1790年から1914年までの戦死者の2倍に上るとされる²。その結果、とりわけ敗戦国ドイツでは兵士たちの戦死に何らかの意味と神聖さを見出そうとする「戦争体験の神話」³が戦間期に発展し、戦死者の追悼と祭祀をめぐる様々な論争が起きた。

「大量死」はドイツ語では「Massentod」であり、Masseという単語が含まれている。「大量死」とは当然「大量の死者たち」を意味するが、視点を変えれば「死者たちの群集 (Masse der Toten)」の在り方がここで問題になっているとは言えないだろうか。「死者たちの群集」とは、まさに1920年代のドイツ、オーストリアで群集という現象に関心を抱き、戦後の1960年に『群集と権力』を出版したエリアス・カネッティの言葉である。

本論は日本独文学会秋季研究発表会（2023年10月14日、京都府立大学下鴨キャンパス）のシンポジウムI「〈群集〉を再訪する——ただしパトスなしに。両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討」の発表原稿を大幅に加筆修正したものである。本論はJSPS 科研費JP18K12340 およびJP21K00439の研究成果の一部である。

¹ George L. Mosse: *Fallen Soldiers. Reshaping the Memory of the World Wars*. New York / Oxford (Oxford University Press) 1990, p. 3. 以下の訳書も参照した。ジョージ・L・モッセ（宮武実知子訳）：『英霊——世界大戦の記憶の再構築』（ちくま学芸文庫）2022 および George L. Mosse: *Gefallen für das Vaterland. Nationales Heldentum und namenloses Sterben. Aus dem Amerikanischen von Udo Rennert*. Stuttgart (Klett-Cotta) 1993. 以下、既訳があるものは参照したうえで、引用は基本的に執筆者が訳したが、紙幅の関係上、参照した全ての訳書と頁数を挙げてはいるわけではない。

² Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 3. 戦死者の数は資料によって幅がある。

³ Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 7. また他方でこの「戦争体験の神話」が戦間期に「ドイツ政治の残忍化」をもたらしたというモッセのテーゼには近年批判もある。Robert Gerwarth: *The Vanquished. Why the First World War Failed to End*. New York (Farrar, Straus and Giroux) 2016, p. 12（ローベルト・ゲルヴァルト（小原淳訳）：『敗北者たち——第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか 1917-1923』（みすず書房）2019、28-29頁）参照。「戦争体験の神話」をめぐるモッセ以降の議論については、『英霊』の上記邦訳の今井宏昌による解説（349-359頁）も参照。本論が扱う「戦友意識」もまた「戦争体験の神話」の中核的要素とされるが、必ずしも「ドイツ政治の残忍化」にのみ寄与したわけではない。戦友意識の問題については本論の第4章を参照。

本論はモッセの戦没兵士の追悼に関する研究と並んで、「死者たちの群集」についてのカネッティの考察を一つの参照枠としつつ、戦間期における「大量死 (Massentod)」と戦死者祭祀の議論を改めて Masse をめぐる言説の一つとして捉え直す⁴。具体的に取り上げる作品は、戦場での体験をもとに数々の戦争関連の体験記やエッセイ、政治評論を 1920 年代に執筆したエルンスト・ユンガーが、1928 年に第一次世界大戦の戦死者のために編集した『忘れえぬ人々』という追悼論集である。さらにこの論集においてユンガーが戦没兵士たちとどのような関係を結ぼうとしていたのかを考えるにあたって、1921 年にウィーンで出版されたフロイトの『集団心理学と自我分析』をもう一つの補助線として参照する。フロイトは「集団 (Masse)」の一つの事例として軍隊を取り上げ、兵士たちを結びつける「戦友意識 (Kameradschaft)」の問題についても触れているが、ユンガーもまた戦没兵士の追悼に際して「戦友意識」という言葉に言及している。

デモや暴動を引き起こす実在の群集だけでなく、集団としての不可視の戦死者たちもまた戦間期ドイツの社会と文化に決定的な影響を及ぼしていたことは、戦死者祭祀をめぐるモッセの研究からも理解できるだろう。本論は、『忘れえぬ人々』における戦没兵士たちとの戦友関係を論じることで、戦死者たちがいかなる意味での群集を構成していたのか、すなわち「死者たちの群集」がどのような位相のもとに現れていたのか、その一つの事例について考察する。

ユンガーにおける群集という主題は、今まで主に二つの文脈において論じられてきたと言える。一つが 1932 年の『労働者——支配と形態』における群集の問題である。ユンガー自身が『労働者』の中で、群集に代わる「有機的構成」という新たな形成体をめぐる議論を展開した。もう一つが、1920 年代前半のユンガーの戦争関連の作品における群集表象である。クラウス・テーヴェライトが 1920 年代のいわゆる義勇軍文学を扱った『男たちの妄想』で論じたように、ユンガーの戦争関連のテクストにおける個人とその対立物である群集の様々な形象が問題となってきた⁵。これに対して本論は、20 年代の戦争文学と 30 年代初頭

⁴ そもそも第一次世界大戦自体がその規模や犠牲者の数だけでなく、物量戦における個人性の喪失などの点でも兵士たちにとって「群集体験 (Massenerlebnis)」と呼ばれうるものであった。Vgl. Regine Zeller: „Einer von Millionen Gleichen“ Masse und Individuum im Zeitroman der Weimarer Republik. Heidelberg (Universitätsverlag Winter) 2011, S. 47f. ハンナ・アーレントは『全体主義の起原』の中で、第一次世界大戦は「全ての個人間の差異が消失するあらゆる群集活動の最も強力なもの」として体験されたと述べている。Hannah Arendt: Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft. Antisemitismus, Imperialismus, Totalitarismus. München (Piper) 2023, S. 766 (ハンナ・アーレント (大久保和郎・大島かおり訳): 全体主義の起原 3——全体主義 (みすず書房) 2017, 50 頁) .

⁵ Vgl. Klaus Theweleit: Männerphantasien. Vollständige und um ein Nachwort erweiterte Neuauflage. 3. Aufl. Berlin (Matthes & Seitz) 2020 (クラウス・テーヴェライト (田村和彦訳): 男たちの妄想 I・II (法政大学出版局) 1999, 2004) . ユンガーの初期の戦争作品における群集表象については、Eva Dempewolf: Blut und Tinte. Eine Interpretation der verschiedenen Fassungen von Ernst Jüngers Kriegstagebüchern vor dem politischen Hintergrund der Jahre 1920 bis 1980. Würzburg (Königshausen & Neumann) 1992, S. 66-69; Zeller, „Einer von Millionen Gleichen“,

の『労働者』における群集の問題を意識しつつ、その間にユンガーが発表してきた多数の政治的評論のうち、ユンガーの関連著作のうちでは取り上げられることの少ない戦没兵士の追悼を主題とした編著『忘れえぬ人々』に群集表象という観点から新たな光を当てる試みである。

あらかじめ結論を簡単に先取りすると、少なくとも『忘れえぬ人々』で追悼される戦没兵士たちは、決して匿名で不定形の群集でもなければ、荒々しい好戦的な死者たちの軍隊でもなく、あくまでも人格を伴った個別的な存在として現れている。にもかかわらず、後に確認するように、その追悼の対象となる「戦死者たち」はほぼ常に複数形で表現されており、本論はこの戦死者たちの集団性がどのような質を帯びたものなのかを明らかにする。

2. 第一次世界大戦の戦死者たちと『忘れえぬ人々』

カネッティは『群集と権力』において、「不可視の群集 (Die unsichtbaren Massen)」という分類を行い、その一つの具体例として死者たちを論じている。「不可視の死者たち」を「人類の最も古い表象」⁶であると述べるカネッティは、民俗学や文化人類学の資料を踏まえながら、古今東西の民族や集団における死者たちの表象のもつ影響について考察している。ここで重要な点は、死者たちがあくまでも集団として表象されていることである。肉体のない亡霊であれ、死者たちは夥しい数で集まり、緊密状態を保ちながら、彼岸や異世界に集まって行動していると考えられている。「人間は彼ら〔死者たち〕にとりつかれてきた」と述べるカネッティは、「生きている者たちへの死者たちの影響」を神話や民話を手掛かりに考察しているが、『群集と権力』ではあくまでもアフリカやアラスカの民族の伝承、あるいは北欧神話における死者たちの軍勢の館であるヴァルハラなどの事例が参照されているにとどまっている⁷。後に触れるように、カネッティは独立したヒトラー論の中で、「死者たちの群集」にとりつかれた権力者ヒトラーについても分析しているが、少なくとも『群集と権力』ではあくまでも死者をめぐる文化人類学的な考察が中心になっている。

この「不可視の群集」をめぐる、例えばアドルノはカネッティとの1962年の対談の中で、カネッティの思考における「想像的なもの、すでに表象世界へ移行したもののある種の

S. 47-93; 稲葉瑛志: 前線兵士の知覚の変容——ヴァイマル初期エルンスト・ユンガーの群集イメージ——[日本独文学会京都支部『Germanistik Kyoto』第16号、2015、43-60頁]などを参照。

⁶ Elias Canetti: *Masse und Macht*. München / Wien (Carl Hanser Verlag) 1994, S. 46 (エリアス・カネッティ (岩田行一訳): 群衆と権力・上 (法政大学出版局) 2022、45頁)。

⁷ Canetti, *Masse und Macht*, S. 46. 「不可視の群集」としての死者たちをめぐるカネッティの議論については、平野嘉彦: 獣たちの伝説——東欧のドイツ語文学地図 (みすず書房) 2001、125-143頁、田中純: 政治の美学——権力と表象 (東京大学出版会) 2008、301-307頁などを参照。

優位」⁸を批判的に指摘している。しかし「死者たちの群集」もまた初めから「想像的なもの、すでに表象世界へ移行したもの」であるがゆえに、あるいは死者と生き残った者とのその非対称的な関係のゆえに、死者たちはいかようにも形を変えて現実の政治と社会に影響を与えることができるとも言えるだろう。ここで問題となるのは、「死者たちの群集」という「表象」がいかにかに現実社会にフィードバックして、特定の時代と地域に影響を及ぼすのか、あるいは逆に特定の個人や集団がこうした表象をいかにかに利用して権力を確立し、維持するのか、ということだ。

再び戦間期ドイツの時代に目を向けると、第一次世界大戦は人類が初めて「組織化された大量死」(モッセ)⁹に直面した戦争であった。第一次世界大戦ではまだ民間人の大量殺戮は行われなかったが、戦場で多くの戦死者をどのように追悼し記憶すべきか、その死をどのように意味付けるかという問題は、右派と左派の区別を超えて、まさに敗戦国である戦間期ドイツを規定した政治的、社会的、文化的な要請であり続けたと言えるだろう¹⁰。「死者たちの群集」がそもそも近代の合理的思考では初めから存在しないことは自明であるが、戦友だけでなく、家族や友人の誰かを戦場で亡くした人間が多数いたことを考えれば、戦死者たちは単なる統計上の数字としてではなく、自分たちの背後にいる圧倒的な質感を持った存在として感じられていたのではないだろうか。

モッセは『英霊』の中で、「ドイツの作家エルンスト・ユンガーのような男たちは、確かに自分たちの戦争の記憶に誠実であったが、彼らの著作は、戦いを正当化する愛国的な規範の一つとなった」¹¹と述べている。ユンガーの1920年代後半の政治評論を「追悼論」という観点から編集し、翻訳した川合全弘は、「追悼論は戦間期ヨーロッパ精神史の隠れた主題を成すのではなかろうか」¹²という問題提起を行っている。

⁸ Elias Canetti: Aufsätze. Reden. Gespräche. München / Wien (Carl Hanser Verlag) 2005, S. 145 (エリアス・カネッティ (岩田行一訳) : 断ち切られた未来——評論と対話 (法政大学出版局) 1981、108頁)。

⁹ Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 3.

¹⁰ 両大戦間期のドイツにおける戦死者の追悼と慰霊をめぐる様々な議論についてはモッセの著作以外に、vgl. Ulrich Linse: »Saatfrüchte sollen nicht vermahlen werden!« Zur Resymbolisierung des Soldatentods. In: *Kriegserlebnis. Der Erste Weltkrieg in der literarischen Gestaltung und symbolischen Deutung der Nationen*. Hrsg. von Klaus Vondung. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1980, S. 262-274; Sabine Behrenbeck: *Zwischen Trauer und Heroisierung. Vom Umgang mit Kriegstod und Niederlage nach 1918*. In: *Kriegsende 1918. Ereignis, Wirkung, Nachwirkung. Im Auftrag des Militärgeschichtlichen Forschungsamtes*. Hrsg. von Jörg Duppler und Gerhard P. Groß. München (R. Oldenbourg Verlag) 1999, S. 315-339. ドイツ、ヨーロッパにおける戦死者祭祀の特徴としては、キリスト教のモチーフと自然の利用が密接に結びついていた。Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 70-125. またモッセ『英霊』の謝辞に名前が挙がっているコゼレックの戦争記念碑関連のテキストは次の一書にまとめられている。Reinhart Koselleck: *Geronnene Lava. Texte zu politischem Totenkult und Erinnerung*. Hrsg. von Manfred Hettling, Hubert Locher und Adriana Markantonatos. Berlin (Suhrkamp) 2023.

¹¹ Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 8.

¹² エルンスト・ユンガー (川合全弘編訳) : ユンガー政治評論選 (月曜社) 2016、「第一部解題」204頁。

モッセはユンガーの戦争文学にもたびたび言及しながら、「戦友共同体は、より良い新生ドイツが成長する細胞であった。ドイツへの信仰が、戦没者と生存者をひとつにした」¹³と指摘した。本論では、「戦没者と生存者をひとつにした」という「戦友共同体」の在り方について、モッセが触れてはいないユンガー編集の『忘れえぬ人々』をもとに検証する。第一次世界大戦終結から10年後の1928年に出版された『忘れえぬ人々』は、ドイツ・オーストリアの戦死者およびそれに関連する44名を追悼する文集である。本論ではユンガーが担当した前書きと後書きを主に参照するが、ユンガーの担当部分は邦訳があるとはいえ、まずはユンガーの関連著作の中であまり知られているとは言えないこの本の内容と位置付けについて簡単に説明する必要があるだろう¹⁴。

水彩画と多数の写真を含むこの豪華な大型版の本の中で追悼される44名は多かれ少なかれ当時の名の知られた戦没者であり、ユンガーもまたアメリカからドイツに移住し、志願兵として戦死した神学者カスパー・ルネ・グレゴリーについて追悼の伝記的エッセイを執筆している。追悼の対象となる44名のうちには、マクシミリアン・フォン・シュペーやマンフレート・フォン・リヒトホーフエンのような高名な軍人やパイロットだけでなく、学者のヘリングラートや詩人のトラークル、画家のフランツ・マルクやアウグスト・マッケの名前も見られる。後にナチのイデオロギーに基づいた最初のブッククラブを創設するヴィルヘルム・アンダーマンの出版社¹⁵から出版された『忘れえぬ人々』には、エルンスト・ユンガーおよび弟のフリードリヒ・ゲオルクを筆頭にいわゆる保守革命に関連する26名の執筆者

¹³ Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 80. モッセはユンガーの戦争作品について、プリュムの研究 (Karl Prümm: *Die Literatur des Soldatischen Nationalismus der 20er Jahre (1918-1933). Gruppenideologie und Epochenproblematik 1・2*. Kronberg Taunus (Scriptor) 1974) を踏まえながら、1920年の『鋼鉄の嵐の中で』が個人的な戦争体験記であるのに対して、1922年の『内的体験としての戦争』は「戦争の集団性、つまり戦友意識」を強調し、「個人的な体験から戦友間で共有する共同体験へと書き直した」と分析している。Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 25, pp. 79. ユンガーの初期作品についての近年の研究は後にも触れるが、本論はユンガーの戦争文学の詳細な分析には立ち入れない。

¹⁴ 本論は初版である *Die Unvergessenen*. Hrsg. von Ernst Jünger. Berlin / Leipzig (Wilhelm Andermann Verlag) 1928 から直接引用し、ユンガーの担当部分については川合全弘による上記の訳および「前書き」と「後書き」が再録された Ernst Jünger: *Politische Publizistik. 1919-1933. Herausgegeben, kommentiert und mit einem Nachwort von Sven Olaf Berggötz*. Stuttgart (Klett-Cotta) 2001, S. 383-397, S. 754-756 (Kommentar) を参照した。本書は出版後すぐにフォス新聞などに書評が掲載されたとはいえ、ほぼ同時代の反響はなかった。Vgl. Heimo Schwilk: *Ernst Jünger. Ein Jahrhundertleben. Die Biographie. Aktualisierte und erweiterte Neuausgabe*. Stuttgart (Klett-Cotta) 2014, S. 327. なお『忘れえぬ人々』は同年1928年にミュンヘンのユスティン・モーザー出版社 (Justin Moser Verlag) から出版されている。モーザー社版には献辞の下にドイツ軍の犠牲者の統計上の数字が記載され、さらに目次の前に戦傷病者と遺族のために設立された『忘れえぬ人々』基金についての公告も追加されている。またそれぞれの版には掲載されている図版に若干の異同がある。

¹⁵ この出版社については、Klaus G. Saur: *Verlage im Nationalsozialismus*. In: *Verlage im »Dritten Reich«*. Hrsg. von Klaus G. Saur. Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 2013, S. 13 および竹岡健一: *ブッククラブと民族主義* (九州大学出版会) 2017, 170頁参照。なおアンダーマン社は印税を払わず、ユンガーがポケットマネーから他の寄稿者の原稿料を立て替えたという。Vgl. Jünger, *Politische Publizistik*, S. 755 (Kommentar).

が寄稿しているが、その中にはかつてバウハウスで教鞭をとっていたロータール・シュライヤーのような芸術家も含まれている¹⁶。

ユンガーが1930年に編集し、ユンガー自身の有名なテキスト「総動員」が収録されている『戦争と戦士』に比べると、『忘れえぬ人々』はあまり同時代の反響がなかったとはいえ、本の造りとしてはきわめて豪華であり、総数400頁近いこの重厚な本自体がまさに慰霊碑を象っているかのようである。ユンガーは前書きの冒頭で次のように書いている。

石造りの記念碑、大理石とブロンズの碑銘が、国がその死者たちを顕彰しようとする印と証としていたるところに建てられている。しかしこの顕彰への意志も心からの尊敬の念がそれを温もりのあるものにしなければ、どのような尊厳にもかかわらず冷たいものにとどまる。¹⁷

ここで「顕彰 (Ehrung)」に対比される「尊敬の念 (Verehrung)」は、ユンガーにおいてはあくまでも個人としての戦没者に向けられるものだが、『忘れえぬ人々』には追悼される一人一人の写真や肖像画、イラストに加えて、軍人墓地や戦争記念碑の写真もまた多数掲載されていることを考えると、この追悼文集自体がやはり集団的な戦死者祭祀をめぐる文脈で理解されるべき作品であると言えるだろう。

『忘れえぬ人々』には64枚の写真や水彩画などが挿入されているように、この本はユンガーがこれ以降に序文を寄せた『世界大戦の相貌』や『危険な瞬間』、『変化した世界』などの多数の写真に掲載した著作の先駆けを成すとみなせる¹⁸。この時期のユンガーが多様なメディアの理解者であったことはたびたび指摘されているが、メディアの単数形である「メディアウム」に生者と死者を媒介する「霊媒」の意味があることを考えるとき、書物としての『忘れえぬ人々』は見えない死者たちを可視化する一つのメディア実践であったと言えるかもしれない。

¹⁶ 執筆陣と追悼される戦没者についての詳しい情報は、vgl. Jünger, Politische Publizistik, S. 755 (Kommentar); Helmuth Kiesel: Ernst Jünger. Die Biographie. München (Siedler) 2007, S. 368f.; Schwilk, Ernst Jünger, S. 326f.; Hubert van den Berg: Lothar Schreyers Beiträge in *Die Unvergessenen*. Hinweis auf eine historische Verknüpfung von klassischer Avantgarde und konservativer Revolution. In: Ernst Jünger – eine Bilanz. Hrsg. von Natalia Żarska, Gerald Diesener und Wojciech Kunicki. Leipzig (Leipziger Universitätsverlag) 2010, S. 178-199.

¹⁷ Jünger, Vorwort. In: *Die Unvergessenen*, S. 9. 以下、強調は原文に基づく。

¹⁸ ユンガーと写真の関係については、vgl. Brigitte Werneburg: Ernst Jünger, Walter Benjamin und die Photographie. Zur Entwicklung einer Medienästhetik in der Weimarer Republik. In: Ernst Jünger im 20. Jahrhundert. Hrsg. von Hans-Harald Müller und Harro Segeberg. München (Wilhelm Fink Verlag) 1995, S. 39-57; Harro Segeberg: Regressive Modernisierung. Kriegserlebnis und Moderne-Kritik in Ernst Jüngers Frühwerk. In: Vom Wert der Arbeit. Zur literarischen Konstitution des Wertkomplexes ›Arbeit‹ in der deutschen Literatur (1770-1930). Hrsg. von Harro Segeberg. Tübingen (Niemeyer) 1991, S. 337-378, hier S. 365.

それではユンガーはこの本の中で戦死者たちとどのような関係を結ぼうとしていたのであろうか。ユンガーによれば、記念碑の台座に刻まれた戦死者たちの名前の一つを目にするとき、「親密であると同時に疎遠な感情」に襲われ、次のような問いが思い浮かぶという。「〈君は誰であったのか。君はどのように生きてきたのか。〉というのも、私たちが求めているものは、個人的な関係、より温もりのある結びつき (die wärmere Bindung) だからである (略)」¹⁹。群集の言説との関係でとりわけ注目したいのが、この「温もりのある結びつき」という言葉である。なぜなら「結びつき (Bindung)」はまたフロイトの『集団心理学と自我分析』の一つの鍵概念でもあるからだ。フロイトは、個人が集団 (Masse) の中で一体化したと感じるとき、そこでは個々人を結びつける「接着剤 (Bindemittel)」のようなものが存在すると推論する²⁰。フロイトによれば、人と人とを結びつける「接着剤」とは広い意味での愛という感情であり、精神分析学の概念でいえばリビードである。リビードとは性的衝動を意味する情動理論の用語だが、フロイトは「愛の関係」をより中立的な表現として「感情の結びつき (Gefühlsbindung)」とも言い換えている²¹。ユンガーにおける死者たちとの「感情の結びつき」がどのようなものであったのかについて考察するうえで、次にフロイトの集団理論を参照する。

3. フロイト『集団心理学と自我分析』における「集団 (Masse)」としての軍隊

近年、政治哲学者のシャンタル・ムフなどによるフロイトの『集団心理学と自我分析』の読み直しでは、集団形成における「情動的な結びつき」が再び注目されており²²、本論もこうした情動をめぐる議論を視野に入れつつ、フロイトのテキストを当時のより具体的な文脈へと差し戻して検討する。ここでフロイトを参照することは決して恣意的な判断ではなく、1921年に出版された『集団心理学と自我分析』の成立背景もまた、何よりも第一次世

¹⁹ Jünger, Vorwort. In: Die Unvergessenen, S. 9.

²⁰ Sigmund Freud: Massenpsychologie und Ich-Analyse (1921). In: Ders.: Studienausgabe. Band IX. Fragen der Gesellschaft. Ursprünge der Religion. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 2000, S. 68. 訳出に当たっては主にフロイト (中山元訳): 集団心理学と自我分析、『フロイト、無意識について語る』(光文社古典新訳文庫) 2021、168-336頁を参照した。

²¹ Freud, Massenpsychologie und Ich-Analyse, S. 86. 精神分析学において Bindung はしばしば「拘束」と訳されるが、本論ではより一般的な表現である「結びつき」という訳語を採用する。

²² Chantal Mouffe: On the Political. London and New York (Routledge) 2005, p. 21-29 (シャンタル・ムフ (酒井隆史監訳・篠原雅武訳): 政治的なものについて——闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築 (明石書店) 2008、40-50頁) 参照。ただしここでムフは「集合的な同一化」を論じるにあたってフロイトとカネッティを同時に参照しているが、両者の違いについても注意する必要があるだろう。カネッティはフロイトを批判し、指導者のいない群集についても論じている。フロイトの集団心理学に関する近年の議論をめぐっては、宮崎裕助: 情動の退隱——フロイトと現代ポピュリズムの問い [エクリヲ編集部『ECRIT-O』vol.13、2021、177-199頁]などを参照。

界大戦とその敗戦に強く刻印されているからだ。そこでフロイトはル・ボンの『群集心理』を批判しつつ、Masse の代表的なモデルとして「軍隊」と「教会」の二つを挙げているが、「軍隊」の分析は明らかに第一次世界大戦のドイツ・オーストリアの事例が意識されている。

フロイトはデモや暴動のような一時的で不定形な群集ではなく、明確に階層化され、指導者を持った人工的集団を取り上げているため、ここではフロイトの Masse を「集団」と訳す。フロイトによれば、集団の中の「感情の結びつき」は二つの方向を向くとされる。一つが、ある特定の指導者、すなわち「軍隊」であれば隊長や上官、「教会」であればキリストや司祭への結びつきであり、もう一つが集団の構成員同士の結びつきである。フロイトが一時的な群集ではなく、高度に組織化され、階層化された軍隊と教会を具体例とした理由は、指導者への「ほれ込み (Verliebtheit)」と集団の構成員同士の「同一化 (Identifizierung)」という二つの「リビドの結びつき (libidinöse Bindungen)」を精神分析の観点から論じるのに適していたからであった。それによってフロイトは軍隊と教会という「高度に組織化され持続的で人為的な集団」を集団心理学の普遍妥当的なモデルとして提示しようとした²³。

フロイトの理論においてはヒエラルヒーの中での垂直的關係が構成員同士の水平的關係よりも重要となる。その前提として、教会であればキリストや司祭、軍隊であれば司令官という指導的存在が「集団のすべての構成員を平等の愛でもって愛する」という「幻想」が必要となる²⁴。フロイトによれば、軍隊において「(略)上官は自分の兵士たち全員を平等に愛する父親であり、それゆえにこそ彼ら兵士たちは互いに戦友なのである」²⁵。フロイトは、一人の指導者を持つ集団とは「共通の対象をその自我理想の位置に置き、その結果、その自我が同一視した個人の総数」²⁶であると述べ、軍隊を例に次のように説明している。

明らかなのは、兵士は自分の上官、つまり軍の指導者を理想とみなす一方、他方で同じ兵士たちと同一化し、この自我の共通性 (Ichgemeinschaft) から相互の助け合いと物資の分け合いのための戦友意識 (Kameradschaft) の義務が派生することである。²⁷

各人が一つの共通の自我理想を介して他のメンバーと同一視し合う集団という図式が、ここでは軍隊を例に考察されている。そもそも上官が下士官を愛情深く扱う軍隊などというものは明らかに非現実的であり、今までも様々に批判されてきた。テーヴェライトはフロイ

²³ Freud, Massenpsychologie und Ich-Analyse, S. 88. フロイトの集団心理学の背景については、海老根剛：群集・革命・権力——1920年代のドイツとオーストリアにおける群集心理学と群集論 [『ドイツ文学』第130号、2006、120-139頁]、130-135頁などを参照。

²⁴ Freud, Massenpsychologie und Ich-Analyse, S. 88f.

²⁵ Ebd., S. 89.

²⁶ Ebd., S. 108.

²⁷ Ebd., S. 125.

トが論じたような軍隊のモデルは実際には存在しなかったと論難し²⁸、カネッティもまたフロイトが現実には軍隊を体験せずに考察した点を指摘している²⁹。しかしフロイトによれば、第一次世界大戦のドイツの軍隊を崩壊させた戦争神経症の原因は、上官が部下の兵士を愛情深く扱わなかった「プロイセンの軍国主義」³⁰にこそあるというのである。

フロイトの集団理論は現実の軍隊の分析としては非常に多くの問題を含んでいるが、このように軍隊を Masse として理解するフロイトを参照すると、ユンガーの『忘れえぬ人々』はどのように捉えることができるのだろうか。ユンガーは少なくとも戦死者たちを明示的に Masse と呼ぶことはないが、戦死者たちとの結びつきがまた「感情の結びつき」を基盤にしていることは明白である。この点でフロイトが軍隊を集団として論じるに際して言及した「戦友意識」という言葉に注目したい。ヴァイマル共和国の反民主主義的思想を論じたクルト・ゾントハイマーは、第一次世界大戦の戦争体験の核心には「戦友意識」があると指摘しているが、ユンガーもまた『忘れえぬ人々』の中で「戦友意識」の概念に触れているからだ。次に『忘れえぬ人々』においてこの「戦友意識」がどのような役割を担っているのかを検討する。

4. 戦死者たちとの「戦友意識」——『忘れえぬ人々』

ゾントハイマーはフランツ・シャウヴェッカーなどの当時の戦争文学を参照しながら、戦友意識の体験を「共同体の体験」とみなしている³¹。モッセも第一次世界大戦の塹壕共同体の中で軍隊の男らしさ、すなわちある種の「男性同盟」を基盤として発展した戦友意識が戦後の「戦争体験の神話」の中心的な要素となり、多くの復員兵にとって「何か根源的な理想を再び取り戻す政治的な力となった」³²と述べている。こうした戦友意識は敵・味方の二分法を前提とした排他的な集団意識であると同時に、個人が疎外された匿名的な近代社会を克服する「共同体」への憧憬とも表裏一体であったと言えるだろう³³。

²⁸ Vgl. Theweleit, *Männerphantasien*, S. 728.

²⁹ Vgl. Elias Canetti: *Die Fackel im Ohr. Lebensgeschichte 1921-1931*. München / Wien (Carl Hanser Verlag) 1993, S. 142 (エリアス・カネッティ (岩田行一訳): 耳の中の炬火——伝記 1921-1931 (法政大学出版局) 1985、189 頁) .

³⁰ Freud, *Massenpsychologie und Ich-Analyse*, S. 89.

³¹ Vgl. Kurt Sontheimer: *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918-1933*. 2. Aufl. München (dtv) 1983, S. 98f. (クルト・ゾントハイマー (河島幸夫・脇圭平訳): ワイマル共和国の政治思想——ドイツ・ナショナリズムの反民主主義思想 (ミネルヴァ書房) 1976、95 頁) .

³² Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 167.

³³ このような共同体への憧憬は、世紀転換期から広がったドイツ青年運動にも見いだされる。ドイツ青年運動における群集表象については以下の拙論を参照。Shinichi Furuya: *Das Bild der Masse in der Jugendbewegung – Am Beispiel von Gustav Wyneken*. In: *Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz*

しかしこのようなイデオロギーに満ちた戦友意識は実際の前線の体験とはかけ離れたものであり、本来の戦場では常に戦死や負傷による除隊などが原因で兵士たちが入れ替わることから、マティアス・シェーニングが述べるように、戦友関係とは「原則的に一時的な社会形式」³⁴として理解するのが妥当である。またヴァイマル共和国時代の戦争文学における群集表象を論じたツェラーは『鋼鉄の嵐の中で』を例に取りながら、ユンガーにとっての戦友意識は結局のところ部隊の兵士全体に向けられたものというよりは、同じ将校同士の関係に限定されたものであったと指摘している³⁵。

この点で『忘れえぬ人々』は、その対象が戦死者とはいえ、ユンガーが一時的ではなく、永続的で包括的な共同体モデルとして戦友意識を想定している作品と言えるかもしれない。『忘れえぬ人々』の前書きにおいてユンガーは、生き残った者と戦死者との結びつきを強調し、いかに戦死者たちが戦争を生き残った者たちの中で生き続けているかを繰り返し述べる。

(略) 私たちは戦死者たちを戦友と呼んだ。彼らは私たちの中心から自己犠牲の道へと歩んだ。それゆえ彼らはこれから生まれる者たちよりも私たちに近いのであり、彼らは私たちと血縁の者である。偉大な母であるドイツ (die große Mutter Deutschland) が私たちを兄弟姉妹 (Geschwister) のようにまだ直接結び付けている。そう、血の兄弟関係 (Blutbrüderschaft) が私たちを結びつけるのだ。³⁶

ここに見出される戦友関係は、「男らしさ」を前面に出した戦場での攻撃的な集団意識というよりは、「偉大な母」や「兄弟姉妹」とあるように、むしろ温かく包み込む家族のような関係として考えられていると言えるだろう。ここでもまた「結びつける (verbinden)」という言葉が繰り返されている。「血の兄弟関係が私たちを結びつけるのだ」という表現が端的に

und Konvergenz. Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo. Hrsg. von Yoshiyuki Muroi im Auftrag der Japanischen Gesellschaft für Germanistik e. V. und in Zusammenarbeit mit dem Redaktionskomitee des Dokumentationsbandes der Asiatischen Germanistentagung 2019. Tokyo / München (Iudicium) 2020, S. 315-320.

³⁴ Matthias Schöning: *Versprengte Gemeinschaft. Kriegsroman und intellektuelle Mobilmachung in Deutschland 1914-1933*. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 2009, S. 217. ユンガーもまた 1923 年の散文作品『シュトゥルム』の冒頭で、「戦友共同体」においては「人間関係の奇妙な果敢なさと悲しさ」が現れていると書いている。Vgl. Ernst Jünger: *Sturm*. In: Ders.: *Sämtliche Werke 18. Erzählende Schriften I. Erzählungen*. Stuttgart (Klett-Cotta) 2015, S. 13. 「追悼」という観点からユンガーの戦争作品における戦場、戦死の場面を解釈した論考として、川合全弘：追悼としての政治——エルンスト・ユンガーの戦争体験解釈について——(上) [京都産業大学法学会編『産大法学』第 43 巻、3/4 号、2010、169-199 頁] 参照。

³⁵ Vgl. Zeller, „*Einer von Millionen Gleichen*“, S. 85-88. ユンガーの初期戦争作品における戦友意識の限定性については、vgl. Thomas Kühne: *Kameradschaft. Die Soldaten des nationalsozialistischen Krieges und das 20. Jahrhundert*. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 2006, S. 43.

³⁶ Jünger, *Vorwort*. In: *Die Unvergessenen*, S. 9f.

示しているのは、戦友関係が家族のメタファーとして捉えられているということだ³⁷。

「戦友意識」の変遷を論じたトーマス・キューネは、「第一次世界大戦の兵士たちの戦友意識、前線共同体」とナチの「民族共同体の原則」との連続性と断絶性を分析しながら、戦間期ドイツにおける戦友意識の言説は、戦闘的で排他的な側面と同時に、時には母親によって包み込まれるような「温かさ (Wärme)」と「安心感 (Geborgenheit)」も特徴とする矛盾をはらんだものであったと指摘している³⁸。この「温かさ」と「安心感・庇護」という特徴は、戦死者たちと「より温もりのある結びつき」を求めようとする『忘れえぬ人々』におけるユンガーの態度にも当てはまると言えるだろう³⁹。

さらに「偉大な母であるドイツが私たちをまだ兄弟姉妹のように直接結び付けている」というユンガーの表現からも、集団心理学において父親を理想として構成員同士が同一視し合うフロイトの理論との違いは明確である。しかし『忘れえぬ人々』におけるユンガーの戦友意識にとって決定的に重要なのは、生きている戦友同士の関係ではなく、戦死者との絆である。『忘れえぬ人々』だけでなく、後の「総動員」や『労働者』の初版にも「死者たちは我々のもとに生き続けている」という言い回しが表現を変えて頻出するが、戦死者たちはユンガーの戦友意識においてどのように現れているのだろうか。『忘れえぬ人々』の前書きでは明確に「戦友意識」という言葉が「無名兵士」との関連で使われている箇所がある。

無名兵士。兵士は本来決して完全に無名であったことはない。なぜなら兵士であること (Soldatentum) の概念と戦友意識 (Kameradschaft) の概念は分かちがたく結びついているからである。兵士は一人孤独に大海で溺れたり、砂漠に飲み込まれたりする冒険家とは違う死に方をする。兵士は仲間の中で (im Kreis)、自分のものではない他の何かのために死ぬのである。⁴⁰

³⁷ 「血の兄弟関係」やそれに類する言葉はこの時代のユンガーの政治評論に多数出てくるが、本論では詳しく立ち入らない。Vgl. Daniel Morat: Von der Tat zur Gelassenheit. Konservatives Denken bei Martin Heidegger, Ernst Jünger und Friedrich Georg Jünger. 1920-1960. 2. Aufl. Göttingen (Wallstein Verlag) 2008, S. 65f.

³⁸ Vgl. Thomas Kühne: »...aus diesem Krieg werden nicht nur harte Männer heimkehren« Kriegskameradschaft und Männlichkeit im 20. Jahrhundert. In: Männergeschichte – Geschlechtergeschichte. Männlichkeit im Wandel der Moderne. Hrsg. von Thomas Kühne. Frankfurt / New York (Campus Verlag) 1996, S. 174-192, hier S. 177f. (トーマス・キューネ「戦友意識と男らしさ」、トーマス・キューネ編 (星乃治彦訳): 男の歴史——市民社会と〈男らしさ〉の神話 (柏書房) 1997, 177-194 頁)。キューネはレマルクの『西部戦線異状なし』なども例に挙げている。

³⁹ しかしユンガーの場合、この「温もり」はまた戦場での「炎」の体験とも否応なく通底しているだろう。ユンガーにおける「炎」の意味については、vgl. Wolfgang Schivelbusch: Die Kultur der Niederlage. Der amerikanische Süden 1865, Frankreich 1871, Deutschland 1918. 2. Aufl. Berlin (Alexander Fest Verlag) 2001, S. 277, 431 (ヴォルフガング・シヴェルブシュ (福本義憲・高本教之・白木和美訳): 敗北の文化——敗戦トラウマ・回復・再生 (法政大学出版局) 2007, 268 頁)。

⁴⁰ Jünger, Vorwort. In: Die Unvergessenen, S. 11.

一人の身元不明の兵士の遺体を戦没者の代表として象徴的に埋葬する公的式典が、とりわけ第一次世界大戦後のフランスとイギリスで発展した⁴¹。ユンガー自身、フランスとイギリスにおける「無名兵士」をめぐる戦没者追悼とは距離を置く発言をたびたびしているが⁴²、本論の文脈において重要なのは、ユンガーが戦死者を「無名」、すなわち匿名の死者とはみなしていない点である。『忘れえぬ人々』で追悼される44名が地位や名のある人々であることはこの「無名兵士」に対するいわばアンチテーゼであり、ヘルムート・キーゼルはここに現代戦争の匿名性に対するユンガーの抵抗を読み取っている⁴³。ユンガーは「英雄は群集 (Masse) には属さない」と述べ、戦死者に対するドイツ人の尊敬の念は「常に全く特定の人、特別な人、独自の人——その長所と短所も含めて——に向けられる」と続けている⁴⁴。

さらに戦死者は一人孤独に死ぬのではなく、「仲間の中で」、すなわち戦友たちの中で命を落とすわけだが、ここでの「戦友意識」において兵士たちの「数」が問題になっているわけでないことは明らかであろう。それではユンガーにとって戦死者たちとの「戦友意識」はどのような集団性の質を帯びているのだろうか。『忘れえぬ人々』の後書きの冒頭でユンガーは、追悼の対象となった44名を「苦もなく増やすことのできるわずかの選ばれた例」⁴⁵と呼び、次のように述べる。「生命の数学はその独自の法則を持っている。その数学において全体は部分の総和を超えるのを常とする (略)」⁴⁶。この量的に計測不可能な「部分の総和を超える全体」とは、1932年の『労働者』における「ゲシュタルト」の定義へと繋がるものだが、『忘れえぬ人々』では明らかに単なる数の合計としての群集 (Masse) とは区別されるものとして理解されている。ユンガーによれば、ドイツの天空には「より高い、輝く圏域 (Kreis)」があり、「この輝きは全体の、ドイツの理念の、永遠的なものに安らう魂の現実の印」であるとされ、次のように続く。

⁴¹ Mosse, *Fallen Soldiers*, p. 94-98.

⁴² Vgl. Jünger, *Nationalistischer Brief* (1926). In: *Politische Publizistik*, S. 260-264, 755 (Kommentar). ユンガーの無名兵士崇拜批判については、糸瀬龍：戦争論から「秘密のドイツ」へ——エルンスト・ユンガー『総動員』における無名兵士崇拜批判について——〔首都大学東京人文科学研究科人文学報編集委員会『人文学報。ドイツ語圏文化論』第514-14号、2018、1-18頁〕などを参照。

⁴³ Vgl. Kiesel, Ernst Jünger, S. 370. マルトゥスの言い方を借りれば、『忘れえぬ人々』は「「無名兵士」崇拜に対抗する、個を志向した想起文化」を目指している。Steffen Martus: *Ernst Jünger*. Stuttgart und Weimar (Verlag J. B. Metzler) 2001, S. 64. しかし「忘れえぬ人々」として「誰を」想起するのか、という点でユンガーたちがきわめて選択的であることにも注意が必要である。

⁴⁴ Jünger, Vorwort. In: *Die Unvergessenen*, S. 11.

⁴⁵ Jünger, Nachwort. In: *Die Unvergessenen*, S. 387.

⁴⁶ Ebd. ユンガーが挙げる具体例によれば、結婚とは二人の男女以上のもの、友情とは二人の人間以上のもの、国民 (Nation) とは人口調査の結果以上ものとされるが、こうした例に倣えば「戦友意識」もまた単なる兵士の集まり以上のものと理解できるだろう。

私たちは、この灼熱が群集 (Massen) を溶かして群集以上の何か、「個人」の、原子の機械的な関連以上の何かを生み出すことができるのをまた知っている。⁴⁷

ここで言われる「群集」や「個人」は文脈上、生きている人間を指してはいる。しかしまたこの「群集以上の何か」を「部分の総和を超える全体」とみなすならば、それは同時にユンガーにとっての戦死者の在り方とも関係していると言えるのではないだろうか。ユンガーは、読者がこの論集を通じて「一つの全体」⁴⁸に語りかけられるという感情を抱いてほしいという願いを表明している。『忘れえぬ人々』で追悼される44名が「苦もなく増やすことのできるわずかの選ばれた例」であるならば、その人数が問題なのではなく、「部分の総和を超える全体」としての戦死者たちとの結びつきこそがユンガーにとって重要であったと言えるだろう。後の『労働者』における「ゲシュタルト」の定義を参照すると、全体的なものの中でも個人が消滅することはなく、個人においても形態は維持される⁴⁹。

しかし戦死者たちとの「戦友意識」がまだ現実のものとなっていないことは、ユンガーが最後に読者に呼びかける次の文章からも明らかである。ユンガーは後書きの最後で読者に対して、この本で追悼される44名の「忘れえぬ人々」と「近しく結びついていると感じる態度」を要求している。

存在と世界観のきわめて多様な領域がこうした人々の姿 (die Gestalten) を通じて表現されている。このような時代にもかかわらず、こうした多様な人たち全員と同じように近しく結びついていると感じる態度が可能である、もしくは少なくとも望ましいということを示唆することに〔この本を通じて——引用者補足〕ひょっとして成功したかもしれない。⁵⁰

こうした戦死者たちと「近しく結びついていると感じる態度」を「戦友意識」と言い換えるならば、ユンガーはまさに『忘れえぬ人々』という本を通して読者に戦没兵士との「戦友意識」を持つように促しているとも言えるであろう。その際に人々を結びつける参照項となるのが、またしてもドイツという「偉大な母親」である。

⁴⁷ Ebd., S. 389.

⁴⁸ Ebd., S. 387.

⁴⁹ Vgl. Ernst Jünger: *Der Arbeiter. Herrschaft und Gestalt*. Hamburg (Hanseatische Verlagsanstalt) 1932, S. 31-45. ユンガーのゲシュタルト概念については、川合全弘による訳書 (エルンスト・ユンガー (川合全弘訳): *労働者——支配と形態* (月曜社) 2013) および前田良三: *可視性をめぐる闘争——戦間期ドイツの美的文化批判とメディア* (三元社) 2013、79-96 頁などを参照。

⁵⁰ Jünger, *Nachwort*. In: *Die Unvergessenen*, S. 390. 「Verschiedene」は通常「故人たち」を意味するが、「存在と世界観のきわめて多様な領域」という言葉を意識し、邦訳にも従って「多様な人たち」と訳した。

誰をも隔てなく、未っ子をも同じように大事にする偉大な母親 (die große Mutter) をドイツの中に見出す者にとっては少なくとも、この態度が唯一威厳のあるもののように思われる。⁵¹

ここでもまた追悼する生者と戦没兵士とを結びつけ、戦死者たちと「近しく結びついていると感じる態度」を可能にする紐帯的な存在として「母親」が登場する。『忘れえぬ人々』における「戦友意識」とは、「父親」である指導者への愛や服従を通じた結びつきでもなければ、共通の階級や出自による絆でもなく、むしろ母親が息子たちを庇護し、包み込むような結びつきが特徴であると言えるであろう。『忘れえぬ人々』は戦死者との戦友意識の共有を読者に促す実践なのである。

5. 戦死者祭祀の行方

最後に『忘れえぬ人々』における戦死者の在り方を改めて本論で参照した議論と比較しながらまとめたい。『忘れえぬ人々』における戦死者との戦友意識は必ずしも攻撃的で野蛮なものではなかったが、しかしそれはユンガーの追悼の態度が通俗的で極端なナショナリズムと無縁であったということではない。それどころかモッセも言うように、ユンガーのような作家の著作が「戦いを正当化する愛国的な規範」の形成に寄与したことは否定できず、川合全弘も「死者の追悼を、生者による自省と理想追及の契機とすることは、ユンガーの追悼論に終始一貫する姿勢である」と述べながらも、生を排除しようとする「均衡の喪失」も同時に指摘している⁵²。

モッセは『英霊』のもととなる論考の中で、直接ユンガーに触れた個所ではないが、戦友意識における戦死者の意味について次のように分析している。

実際、前線の戦友意識の誓いは一般的に戦死者祭祀に基づいている。戦死者たちは生きている者たちの戦友意識の不可欠な構成要素となり、彼らは生き残った者たちの中で生き続けることになるが、生き残った者たちは同様に自分たちも後に英雄の列に加わ

⁵¹ Ebd. しかしユンガーによる 1929 年の編著『帝国をめぐる闘争』の序文では、兵士たちの血によって受胎する「母なる大地 (Mutterboden)」(本来は「肥沃な土」の意) が明確にナショナリズムと結びつけられている。このナショナリズムは「どの世紀にも新しい形姿を産み出す母性的存在のための安全な庇護者」であり、「私たちは戦闘的な方法で生殖する術を知っている男たちがまだ存在することを見た」。Ernst Jünger: Vorwort. In: Der Kampf um das Reich. Hrsg. von Ernst Jünger. Zweite, vermehrte Aufl. Essen (Wilhelm Kamp), S. 9. ここでの「母性的存在」と「戦闘による生殖」の関係については、vgl. Theweleit, Männerphantasien, S. 634f.

⁵² ユンガー: ユンガー政治評論選、「第一部解題」210 頁。

ることを期待できた。⁵³

ここでの重要な指摘は、戦友意識とは本来戦場の生きている兵士の間だけで完結するのではなく、むしろ初めから戦死者を「不可欠の構成要素」として組み込んでいるという点である。実際に戦場を生き残り続けたユンガーもまた「たとえ最も慎ましい仕方であれ、とにかく生き続けたいという願いから自由な人間がいるだろうか」⁵⁴と述べている。戦死に無意味さではなく、神聖さや永遠性などの何らかの意義を見いだそうとする限り、戦友意識は将来の戦争を前提とするこの戦死者祭祀のサイクルに不可避免的に巻き込まれていると言えるだろう。『忘れえぬ人々』の献辞には、「ドイツの未来のために勝利し、亡くなった人々に」⁵⁵とある。ここでの「ドイツ」が何を指すのかは議論があるだろうが、ユンガーにとっての戦死者があくまでも「ドイツの未来のために」亡くなった兵士たちに限定されていることは明らかだ。

戦死者たちとどのように向きあうかという点では、『忘れえぬ人々』における追悼の姿勢を同時代のナチズムの戦死者祭祀と比較する必要があるだろう⁵⁶。ナチズムが戦死者や殉難者を讃える儀式を重要なプロパガンダとして位置付けたことは知られているが⁵⁷、それは言

⁵³ George L. Mosse: Soldatenfriedhöfe und nationale Wiedergeburt. Der Gefallenenkult in Deutschland. In: Kriegserlebnis. Der Erste Weltkrieg in der literarischen Gestaltung und symbolischen Deutung der Nationen. Hrsg. von Klaus Vondung. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1980, S. 247.

⁵⁴ Jünger, Vorwort. In: Die Unvergessenen, S. 10. この文章の直前は次のように書かれている。「しかし私たちはどうすれば一番良く尊敬の念を表現できるだろうか。おそらく、私たち自身が尊敬されたいと思う仕方だ」。なおカネッティは「生き残ること (Überleben)」を権力の中心的な特徴とみなしているが、そうしたカネッティの権力論からすれば、戦場を生き延び続けたユンガーはまさに権力者としての「生き残る者」を体現していたと言えるかもしれない。ほぼ同時代を生きたユンガーとカネッティの間には、知られている限り直接の交流や影響関係はなかったが、カネッティはドイツ文学者のヘルムート・ゲーベルに宛てた1989年のある手紙の中で、自分はユンガーの『労働者』を読んだことはなく、ユンガーの著作にまじめに取り組んだこともないと述べている。Vgl. Elias Canetti: Ich erwarte von Ihnen viel. Briefe 1932-1994. Hrsg. von Swen Hanuschek und Kristian Wachinger. Frankfurt am Main (Fischer) 2020, S. 748f. 「死」という観点からカネッティとユンガーを比較した論考として、vgl. Sebastian Kleinschmidt: Probiertestein des Todes. Autorschaft bei Elias Canetti und Ernst Jünger. In: Autorschaft Zeit. Hrsg. von Günter Figal und Georg Knapp. Jünger-Studien Band 4. Tübingen (Attempo Verlag) 2010, S. 55-72.

⁵⁵ Jünger, Die Unvergessenen, S. 5.

⁵⁶ 本論ではユンガーとナチズムの関係については立ち入れない。これについては、川合全弘によるユンガーの関連する政治評論の翻訳および「急進ナショナリストのナチズム観」と題された解題などを参照。ユンガー：ユンガー政治評論選、「第二部ナチズム観」、235-296頁。

⁵⁷ ナチズムの戦死者崇拜については、Sabine Behrenbeck: Der Kult um die toten Helden. Nationalsozialistische Mythen, Riten und Symbole. Vierow bei Greifswald (SH-Verlag) 1996; 池田浩士：虚構のナチズム——「第三帝国」と表現文化 (人文書院) 2004、ナチズムの祭祀全般については、Klaus Vondung: Magie und Manipulation. Ideologischer Kult und politische Religion des Nationalsozialismus. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1971 (クラウス・フォンドゥング (池田昭訳)：ナチズムと祝祭——国家社会主義のイデオロギーの祭儀と政治的宗教 (未来社) 1988)などを参照。

い換えれば、ヒトラーとナチが権力を獲得し、維持する中で、生きている人間の群集と同時に「死者たちの群集」を必要とし、利用したということだ。追悼論集としての『忘れえぬ人々』がナチズムの死者崇拜とは異なるとはいえ、しかし交差する点があることもまた事実である。本論が注目するその具体的な交差点こそ、アルベルト・レオ・シュラーゲターの追悼と崇拜である。

『忘れえぬ人々』にはフリードリヒ・ゲオルク・ユンガーによるシュラーゲターについての追悼エッセイも含まれている。シュラーゲターは第一次世界大戦に従軍して生き延びたが、戦後は義勇軍活動を通じて1923年のルール闘争に加わり、武力行使を伴う「積極的抵抗」を行った結果、フランス軍によって処刑された人物である⁵⁸。シュラーゲターと初期のナチズムとの関わりについては議論があるが、その処刑による死がナチスなどの右派、民族主義者によって殉教死として祭り上げられ、「シュラーゲター崇拜」を引き起こした⁵⁹。フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーもまた、シュラーゲターの義勇軍活動とルール闘争への参加を第一次世界大戦の延長、すなわち「内戦」への参加と捉え、その死を第一次世界大戦の戦死と並べている⁶⁰。

フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーによるシュラーゲターの追悼エッセイにおいても、兵士たる息子たちが「結び付けられている」「偉大な母親」としてのドイツが登場する。

ドイツは私たちが結び付けられている偉大な母親 (die große Mutter) である。そしてどこであれ、この母親が攻撃を受けているところこそ、私たちが忠実な息子としてまた兵士として駆けつけなければならない前線 (Front) なのである。⁶¹

⁵⁸ フランス・ベルギー軍のルール地方占領に対するドイツ側の抵抗の諸相については、vgl. Gerd Krüger: »Aktiver« und passiver Widerstand im Ruhrkampf 1923. In: Besatzung. Funktion und Gestalt militärischer Fremdherrschaft von der Antike bis zum 20. Jahrhundert. Hrsg. von Günther Kronenbitter, Markus Pöhlmann und Dierk Walter. Paderborn (Schöningh) 2006, S. 119-130. フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーは、シュラーゲターとその仲間が当局の呼びかける「消極的抵抗運動 („passive Resistenz“)」を「ゲルマン的な攻撃意志」にそぐわないと考えたと述べている。Vgl. Friedrich Georg Jünger, Albert Leo Schlageter. In: Die Unvergessenen, S. 306.

⁵⁹ ただしヴァイマル共和国におけるシュラーゲターの死の政治的利用はいわゆる右派だけに限らなかった。シュラーゲターとその崇拜については、Stefan Zwicker: »Nationale Märtyrer«: Albert Leo Schlageter und Julius Fučík. Heldenkult, Propaganda und Erinnerungskultur. Paderborn (Schöningh) 2006 S. 25-148; 池田浩士：虚構のナチズム、37-75 頁、今井宏昌：暴力の経験史——第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験 1918～1923 (法律文化社) 2016、189-226 頁などを参照。

⁶⁰ Vgl. Friedrich Georg Jünger, Albert Leo Schlageter. In: Die Unvergessenen, S. 305. ここで付言すれば、『忘れえぬ人々』の執筆時には、1922年6月24日のラーテナウ暗殺に兄のエルンスト・ヴェルナーとともに関わったハンス＝ゲルト・テーヒョウもいる。Vgl. Martin Sabrow: Der Rathenaumord und die deutsche Gegenrevolution. Göttingen (Wallstein) 2022, S. 117-125. その後釈放されたテーヒョウは、『忘れえぬ人々』の中でワンダーフォーゲル運動のハンス・プロイヤーについての追悼エッセイを執筆している。

⁶¹ Friedrich Georg Jünger, Albert Leo Schlageter. In: Die Unvergessenen, S. 303. ユンガー兄弟の戦間期における交流と活動については、vgl. Morat, Von der Tat zur Gelassenheit, S. 51-79.

ここでの「偉大な母親」としての「ドイツ」は、兄エルンストの「前書き」と「後書き」にみられるような息子たちを庇護する存在というよりは、むしろ逆に息子たちが兵士として守護しなければならない「前線」である。「苦楽を共にする共同体から生じるあの戦友意識への彼の感覚は、指導者と指導される者の間の解消できない絆を作り出した」と言われるように、シュラーゲターにおいても理想化された戦友意識が強調される⁶²。「ドイツ」という「偉大な母親」をめぐるこの役割の反転はまた、シュラーゲターの死と行動がドイツの「未来」の基盤となることへと繋がってゆく。

彼の血は砂の中へ流れ去ったが、彼の行動はまばゆいばかりの輝きの中で復活する。彼に基づかないドイツはもはや考えられない。彼はあらゆる未来の要石になったのであり、心からの祈りが彼を取り囲み、敬わないどんな時代も軽蔑すべきものに思われるに違いない。⁶³

こうしたシュラーゲターの神格化と追悼は、確かにナチをはじめとする陣営のシュラーゲター崇拜とも重なるだろう。フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーも、第一次世界大戦の本来の戦死者ではないシュラーゲターを「忘れえぬ人々」の一人として自らの陣営に引き入れようとしている。追悼の対象として「誰を」想起するのか、という点ではナチズムとの並行性を指摘できるだろう。モッセはシュラーゲターとホルスト・ヴェッセルの例を挙げながら、第一次世界大戦の戦死者祭祀とナチの殉難者の祭祀との連続性を指摘し、ナチによる祭祀は運動の殉難者たちを第一次世界大戦の戦死者たちの「クローン」として扱っていると喝破した⁶⁴。そうした意味でナチズムにおいて運動に殉じたとみなされた人物は、たとえ固有名で呼ばれたとしても交換可能で増殖する複製である。

しかしすでに見たように、『忘れえぬ人々』における「ゲシュタルト」としての戦死者たちは単独では現れないにもかかわらず、すなわち「戦死者たちの群れ (Schar) において」という言い方に見られるように⁶⁵、ほぼ必ず複数形で表現されているにもかかわらず、個別性を保持し、交換可能な匿名的集団としては表象されていない。この点について、最後にもう一度カネッティの「死者たちの群集」の議論を参照しよう。カネッティは1971年に発表したヒトラー論「ヒトラー、シュペーアによる」という評論の中で、元軍需大臣シュペーアの

⁶² Friedrich Georg Jünger, Albert Leo Schlageter. In: Die Unvergessenen, S. 304.

⁶³ Ebd., S. 311. Vgl. Zwicker, »Nationale Märtyrer«: Albert Leo Schlageter und Julius Fučík, S. 105f. 兄エルンストも1929年の編著『帝国をめぐる闘争』の序文で、暴力を厭わないナショナリストとしてのシュラーゲターの名前を「最初のシンボル」と呼んでいる。Vgl. Ernst Jünger, Vorwort. In: Der Kampf um das Reich, S. 8.

⁶⁴ Mosse, Fallen Soldiers, p. 183.

⁶⁵ Jünger, Vorwort. In: Die Unvergessenen, S. 13.

『回想録』に基づきながら、「死者たちの群集」にとりつかれたヒトラーについて触れている。ヒトラーはベルリンの都市計画に関する 1936 年のシュペーアとの会話の中で、120 メートルの巨大な凱旋門を立て、そこに第一次世界大戦の戦死者 180 万人の名前を彫り刻む計画を披露している⁶⁶。このヒトラーの凱旋門の構想は 1925 年のヴァイマル共和国時代に遡るものであるが⁶⁷、カネッティが論じるヒトラーは、一人一人の死者たちを個別の人間として追悼するのではなく、戦死者祭祀の儀式を通じて、死者たちを一か所に集中させ、無数の「死者たちの群集」の上に自らの権力を築き上げた独裁者である。「第一次世界大戦の死者たちがいなければ、ヒトラーは決して存在しなかつただろう」⁶⁸とカネッティは述べているが、それはヒトラーが崇拜と祭祀という形をとりながらも、「死者たちの群集」をいかに自らの味方につけ、利用したかを意味している。カネッティによれば、「死者たちの群集に対する感情はヒトラーにおいて決定的」であり、それが「彼の本来の群集である」⁶⁹。ヒトラーにとっては戦死者たちの圧倒的な「数」が問題なのであり、この無数の戦没兵士たちは生き残ったヒトラーの「名前」に従属する⁷⁰。この点で、少なくとも『忘れえぬ人々』における戦死者への向き合い方、すなわち記念碑の台座に刻まれた名前の一つ一つを目にした際に戦死者たちとの「個人的な関係、より温もりのある結びつき」を求めたエルンスト・ユンガーの態度は、こうしたヒトラーとナチによる戦死者祭祀とは重なりつつも一線を画すものであると言えるのではないだろうか⁷¹。

⁶⁶ Vgl. Elias Canetti: Hitler, nach Speer. In: Ders.: Die Stimmen von Marrakesch. Aufzeichnungen nach einer Reise. Das Gewissen der Worte. Essays. München / Wien (Carl Hanser Verlag) 1995, S. 267f. (カネッティ: 断ち切られた未来, 22-24 頁). シュペーアの『回想録』における該当する記述は、Albert Speer: Erinnerungen. Berlin (Ullstein) 2005 (1969), S. 88. なお近年の研究によって、シュペーアの『回想録』の信憑性は根本的に疑問視されている。シュペーアに依拠したカネッティのヒトラー論の位置付けと解釈については稿を改めて扱う予定である。

⁶⁷ Vgl. Canetti, Hitler, nach Speer, S. 267.

⁶⁸ Ebd., S. 268. シヴェルブシュは「生き残った前線兵士・ファシストたち」の「死の祭祀」は、前線の戦死者たちとの関連なしには理解できないと指摘し、カネッティのこのエッセイを参照している。Vgl. Schivelbusch, Die Kultur der Niederlage, S. 279, 433.

⁶⁹ Canetti, Hitler, nach Speer, S. 268. ヒトラーにとっての「群集・大衆 (Masse)」の意味をめぐっては無数の研究が存在するが、本論が参照したヒトラーの『わが闘争』における群集表象の分析として、Zeller, „Einer von Millionen Gleichen“, S. 169-180.

⁷⁰ Canetti, Hitler, nach Speer, S. 268.

⁷¹ 本論はあくまでも両大戦間期に関する議論に限定しているが、ユンガーは 1995 年の最晩年のあるインタビューでオルテガの『大衆の反逆』に触れながら、「群集・大衆 (Masse)」に対比される「個 (das Individuum)」について次のように語っている。「大衆 (Massen) の意味についての彼 [オルテガ] のテーゼに私は自分の根本的な考えを対置します。つまり私にとって問題点 (der neuralgische Punkt) は個 (das Individuum)、個人 (der Einzelne) であって、大衆 (die Masse) ではありません。エネルギー、力は大衆のアモルフな要素においてよりも、個の中に集中します。必要なカリスマを持つ個であれば、大衆に影響を与え、大衆を導くことができます」。Ernst Jünger mit Antonio Gnoli und Franco Volpi: Die kommenden Titanen. Gespräche. Deutsch von Peter Weiß. Wien und Leipzig (Karolinger) 2002, S. 75. 個人と大衆の素朴な二元論に立脚しているとはい

本論は第一次世界大戦の戦死者たちが戦間期ドイツの言説においてどのような位相のもとに現れているのか、その一端をユンガー編集の『忘れえぬ人々』をもとに考察した。その結果明らかになったのは、戦間期ドイツにおいては、生きている人間たちの群集と同時に、「死者たちの群集」とも形容すべき第一次世界大戦の戦死者たちが圧倒的な存在感をもって浮上していたことと同時に、その戦死者たちとの向き合い方において、死者たちもまた個別性と集団性の間を揺れ動きながら異なる現れ方をしていたということである。

え、ここに「必要なカリスマを持つ個」へのユンガーの持続する関心を看取できるだろうが、それはあくまでも「群集・大衆 (Masse)」との対比においてなのである。

ヘルマン・ブロッホにおける「群集」という未解決の問い

早川 文人

はじめに

19世紀末ウィーンに生を受けたヘルマン・ブロッホ (Hermann Broch, 1886-1951) は同時代の多くの作家と同様に、20世紀に顕在化した群集現象について関心を寄せ考察し、多様なジャンルのテキストにおいてそれらを書き記した。残されたテキスト群における群集表象の記述を思想面から紐解くと、中心的価値の崩壊が進んだ「価値真空 (Wert-Vakuum)」¹の状態にある、世俗化した現代社会の徴しの一つとして歴史哲学的にブロッホが捉えている姿が浮かび上がるだろう²。それらの中でもブロッホの群集思想の結晶体として本来は中心に据えられる計画であった『群集狂気論 (Massenwahntheorie)』(1939-1948執筆)³は、膨大な資料を含む未完の遺稿となってしまった⁴。完成の日の目を見ず体系化された思想に至らなかったがゆえに、第2次世界大戦後の群衆論／群集論の枠組でブロッホの『群集狂気論』が言及されるのはごく限定的である。現在では、Paul Michael Lützel をはじめとするブロッホ研究者の文献学的作業によって、この未完の群集論の成立過程から構想までをある程度は

本稿は、2023年10月14日(土)日本独文学会秋季研究発表会(京都府立大学下鴨キャンパスA会場104教室)シンポジウムI:「〈群集〉を再訪する——ただレパトスなしに。両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討」において報告した「未解決の問いとしての群集——H・ブロッホの群集思想と小説美学」に基づき、その発表原稿を大幅に加筆修正したものである。本稿で使用したテキストは以下の通り。

Hermann Broch: Kommentierte Werkausgabe 13 Bände. Hrsg. von Paul Michael Lützel. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1974-1981. この版からテキストを引用または参照する際は、KWと略記し巻数と頁数のみを示す。加えて以下の版も適宜参照した。Hermann Broch: Bergroman. Kritische Ausgabe in vier Bänden. Hrsg. von Frank Kress und Hans Albert Maier. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1969. ブロッホの伝記事項に関しては以下の文献を参照した。Paul Michael Lützel: Hermann Broch. Eine Biographie. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1985. この文献を引用する場合は、HBBと略記し頁数のみを記す。

¹ Vgl. KW9/1, S. 137.

² Vgl. Michael Kessler, Paul Michael Lützel (Hrsg.): Hermann-Broch-Handbuch. Berlin/Boston (De Gruyter) 2016, S. 433-460. この文献を引用する場合は、HBHと略記し頁数のみを記す。

³ Vgl. KW12, S. 101-564.

⁴ 近年、民主主義の後退という問題と関連してブロッホが『群集狂気論』で構想していた群集の民主化の問題が注目されている。Vgl. Patrick Eiden-Offe: Das Reich der Demokratie. Hermann Brochs „Der Tod des Vergil“. München (Wilhelm Fink) 2011; E. Brett Sterling: Hermann Broch and Mass Hysteria: Theory and Representation in the Age of Extremes. New York (Camden House) 2022; Sarah MacGaughey, Elisa Rist, Daniel Weidner, Doren Wohlleben (Hrsg.): Massenwahntheorie und Friedenspoetik. Hermann Broch und die bedrohte Demokratie des 20. Jahrhunderts. Berlin/Boston (De Gruyter) 2023.

窺い知ることができる⁵。とはいえブロッホの群集思想は、ル・ボンなどの古典的群集心理学をはじめ、精神分析学、価値論など同時代の学問や思想と絡み合っ成り立っているうえ、一部断片的なものに留まっているので、読み解くには一筋縄でいかない厄介な代物である⁶。そのようなブロッホの群集思想に見られる集団心理学的側面を示すものの一つとして、フロイトの個人心理学の影響⁷を強く受けた、集団における個人の振る舞いを注視するブロッホの態度についてはこれまでも指摘されている⁸。しかし、その文学理論、概念的理解と文学的表象とは隔たりがあるようにも見受けられ、群集思想と文学テキストに現れた群衆／群集表象との連動について検討し、現代に連なる群衆／群集の様態を説明する課題は依然として残されている。本稿では、ブロッホが晩年記した『群集狂気論』を参照しつつも、近年 E. Brett Sterling が取った手法である⁹、個々の文学テキストにおいて群衆／群集の問題を精査する立場に依拠し、成立順に文学テキストを追いながら、特に幅広い語義を持つドイツ語 *Masse* の使用法に注意を払い、その語にまつわる描写に着目し分析することによって、ブロッホの「群集」表象の種々の特徴を見ながら、ブロッホの文学テキストと問題圏におけるそれら表象群の位置価を確認したい¹⁰。

1. 「群集」との遭遇——『街路』

1918年にブロッホがウィーンで労働者の集団に遭遇した体験を契機に執筆したフランツ・ブライ (Franz Blei, 1871-1942) 宛公開書簡『街路』(Die Straße, 1918)¹¹は、ブロッホの群集論について論じられる際によく引き合いに出される。このテキストは、1918年11月3日に伊墺休戦協定の締結により戦争が終結して間もない、同年11月12日、ウィーンの議事堂前でカール・ザイツ (Karl Seitz, 1869-1950) が臨時国民議会の議長として共和国を宣言した直後、ウィーンで発生したデモ行進にブロッホが遭遇したことが契機となって書かれた¹²。

⁵ Vgl. Lützel 2021, S. 82-127.

⁶ Vgl. ebd.

⁷ Vgl. Paul Michael Lützel: Hermann Broch und die Menschenrechte. Anti-Versklavung als Ethos der Welt. Berlin/Boston (De Gruyter) 2021, S. 82-127.

⁸ 孟真理：群衆のなかの個人——ヘルマン・ブロッホの群集論、「ドイツ文学」130巻、2006年、140-153頁参照。

⁹ Vgl. Sterling 2022.

¹⁰ ドイツ語 *Masse* の語源については、本叢書の前書きを参照のこと。本稿では、ドイツ語 *Masse* には基本的には「群集」という訳語を当てている。そこには *Masse* の語義が孕む集団性と集塊的性格が意識されているので、「」をつけて「群集」とする。ただ「群集」という言葉では包含できないほど *Masse* の集塊性の意に重心が置かれている文脈では、「集塊」と訳出する。

¹¹ 『街路』は1918年12月20日出版の文芸誌『救急車』(Die Rettung)に掲載にされ、注釈版では第13巻第1分冊の書簡集に収録されている。Vgl. KW13/1, S. 30-35.

¹² カフェ・ヘレンホーフにいたブロッホは、ウィーン21区フロリッツドルフから中心部へ移動する労働者たちに遭遇した。Vgl. HBB, S. 73-75.

『街路』の記述をブロッホが実体験を思想へと転換する起点と見做し、後のブロッホの群集思想と重ねて見ると、たしかにその萌芽が認められる。ブロッホはここで、デモ行進する労働者の集団を「偽の共同体 (die falsche Gemeinschaft)」(KW13/1, S. 31.) で「共通の形而上の真理感情 (das gemeinsame metaphysische Wahrheitsgefühl)」(Ebd.) を持たない現代の「群集 (Masse)」と評価を下し、この箇所は群衆／群集が論じられる際によく引用されてきた。しかし、ここにはシンプルな群衆／群集嫌悪の文脈では回収しきれない広汎なイメージも読み取れるのではないか。本稿では「共同体」の真偽の是非のバイアスとそこに沸き立つパトスから離れて改めてテキストを確認したい¹³。

『街路』で、その後のブロッホの「群集」表象の先触れとしてまず着目したいのは、「三千人が『ライン河の哨兵 (Die Wacht Rhein)』を歌えば、マルセイエーズと同じく心が揺さぶられる」(KW13/1, S. 30-31.) とのブロッホの告白に見受けられるような個人が己が身を置く集団との間に惹起する心理的作用についての事例だ。このような集団心理学的視点はたしかにブロッホの群集論に継承されていくのだが、ここでは Sterling も感情の共有可能な媒体として合唱や歌声に着目しているように、各個人の声帯から発せられる音声から成る複合体としての咆哮や叫び、あるいは合唱が、「群集」表象の特性を担う事態に注目する¹⁴。というのも、ブロッホの文学作品では、人間の集団を表象する際には、「歌」「声」「唸り」「叫び」などがライトモチーフのように多用されていくからだ。

さらにブロッホが描く人間の集団表象の特徴の一つに、身体部位による提喩法が挙げられる。『街路』においてもやはり、政治を「口、鼻、髭、腹」といった部位の「巨大な集合体 (Massenaggregat)」(KW13/1, S. 30-31.)¹⁵ と表現しているように、個々人がその姿を失いつつ集団・塊の構成要素となり、ヒトとモノとの境界線も曖昧となるような容易には把握しがたい「群集」を表象する際の特徴がすでに認められる。このようなブロッホの物的身体の提喩法の作法は、眼前に展開する人間の集団的ありようの背後にあるものを視野に組み入れようとする姿勢であり、それは物体、モノというプリズムを通して投影された人間や社会を文学作品に描き出す傾向としても理解できる。以上のように、『街路』では若きブロッホの群集理解が示されているだけでなく、「群集」表象の原像を捉えようとするその眼差しと後のブロッホの文学テキスト群で展開される筆致との重なりも見出せるだろう。

¹³ 職業作家になる前、紡績工場の経営者の一人であった頃のブロッホが、『街路』において遭遇した集団を「懐疑的、ゆえにユダヤ的! (skeptisch und damit jüdisch!)」といった表現を用いて、読者を意識したやや挑発的な表現を用いて形容している箇所もあるので、一層注意を払う必要があるだろう。Vgl. KW13/1, S. 30-31. このような労働者の集団をブロッホはのちに「代替共同体 (Ersatzgemeinschaft)」(KW12, S. 280.) と呼んでいる。

¹⁴ Vgl. Sterling 2022, S. 50-57.

¹⁵ Aggregat は「集合体・凝集体」「(いくつかの機械が集まって一組になった) 連結機械」など。小学館独和大辞典第二版 Aggregat 参照。

2. 集団／集塊としての「群集 (Masse)」——『夢遊の人々』

『街路』においてブロッホの人間集団の理解と「群集」表象への眼差しを確認した。そのおよそ 10 年後に書かれた『夢遊の人々』(Die Schlafwandler, 1928-1931) 3 部作では、Masse が歴史哲学的認識と連動し、語用に広がりに変奏が見られるようになる。この長編小説で展開される Masse は、もちろん「兵士の集団」(KW1, S. 390.) や「死者の群れ」(KW1, S. 714.) を、つまり集団を表現する際にも使用されている。ここでは、ドイツ語 Masse が内包する複数の意味、それらの意味の揺れ動きと重なり合いが意識的に使用されている箇所に着目し、特に「塊」と「集団」の間における意味の振幅と重畳を確認したい。以下の引用部は、第一部の主要人物ヨアヒム・フォン・パーゼノーがベルリンの街で一人の男を追う場面である。

しかしいまや、彼の想念は彼を取り囲む雑踏 (Gewühl) のごとく入り乱れて、混乱してしまった。たとえ、そこに思考を差し向けようとする目的となる地点が彼の眼前に浮かんでいるとしても、その目的の地点は、彼の前に行く柔らかい男の背中のようにゆらゆらと定まらず、滲んだようにぼやけていて、繰り返して隠れてしまうのだった。もし彼がルツェーナの正当な持ち主を奪ったのだとしたら、今彼がルツェーナを強盗のように隠し続けているのは事実かもしれない。彼は姿勢を保とうと試み、身を硬直させ、まっすぐと背筋を伸ばして、民間人を見ないようにした。男爵夫人が言っていたように、彼の周りの人間たちの雑踏は、顔と背中が溢れた商売に勤しむ人々の雑踏は、どうしても捉えることが出来ない、輪郭が定かでない、滑っていくような、柔らかい群集のように思われた。(KW1, S. 56-57.)

ヨアヒムは、「姿勢を保とうと試み、身を硬直させ、まっすぐと背筋を伸ばして」軍人らしい姿勢を取ることで、情婦ルツェーナが住む一般市民の世界から身を引き離そうとする場面が象徴的に描かれている。上記の引用箇所では、男の背中「柔らかい (weich)」というように触知覚的に表現され、さらに「ゆらゆらと定まらず (schwankend)」と「滲んだようにぼやけている (verfließend)」という語を媒介することで、その風景との境目が定まらない「群集」へ融解していく時空が捕捉されると同時に、それを捉えようとするヨアヒムの視線もまた揺れ動き、焦点が定まらぬ様が表象されている。さらに引用部の最後の一文では、「柔らかい」という形容詞が Masse を修飾することで、「男の背中」が Masse へと変容していく過程が巧みに表現されている。「男の背中」を取り囲む「人間の雑踏 (das Gewühl der Menschen)」と混然一体となり、それは捕捉不可能な「輪郭が定かでない、滑っていくような、柔らかい群集 (eine verschwimmende, gleitende, weiche Masse)」になる。ここでの登場人物ヨアヒムの視点を通して、Masse は集団であると同時に集団内における個別性が背後に退いた「塊」「集

塊」として、さらに「輪郭が定かでない (verschwimmend)」「滑っていくような (gleitend)」「柔らかい (weich)」という形容詞で修飾された不定形な状態にあることが示されている。さらに Masse はまたこの箇所では、身体の一部である「顔」と「背中」で提喩的に人間の群がり、ベルリンの街路にいる人間の集団が徐々に物体化、モノと化して表現されている点も指摘しておく必要がある。上記引用部の柔らかい、輪郭を伴わないアモルフな「群集」は、さらに以下の引用部に接続されている。

良からぬ輩の臭いが鼻をついた。ヨアヒムは、ベルトラントがルツェーナを連れてきたのか、それともルツェーナを通してベルトラントのところに来たのか、時として覚束なかった。そしてついに彼は驚愕の中で気がついたのだった。もはや輪郭が定かではない、滲んだようにぼやけている生の集塊 (der verschwimmenden und verfließenden Masse des Lebens) を把握することができず、ますます速く、ますます深く狂った妄想の中に滑り込んでいき、すべてが不確かなものになっていた、ということに。(KW1, S. 128.)

想いを寄せるルツェーナとベルトラントとの二人の関係に悩み錯乱しているヨアヒムが描かれる場面では、先の引用箇所と同じく、Masse を形容する語には *verschwimmend* という現在分詞が用いられているが、さらにここでは「滲んだようにぼやけている (*verfließend*)」という語が Masse に修飾し、しかもその Masse には「生 (Leben)」という名詞が 2 格で固く結びつけられている。繰り返し登場する *verfließend* という語には、「(時が) 流れ去る、経過する」という意味が備わっている点も見落としてはならないであろう。*verschwimmend* という語には「泳ぐ (*schwimmen*)」という語が含まれているように、水流の動性、流動性が語の背景に透けて見える。そのような *fließen* や *schwimmen* の推移のイメージは、*ver-*という前綴りと接合し、不鮮明になり、消え去り、喪失していくイメージに重なり、変奏される。これらの語用は、時の移ろいを想起させ、形而上的世界との親和性を指摘できよう。このような *verschwimmend* と *verfließend* に修飾された「生の集塊」は、人間の生の集合体であり、人間集団の生全体と照応する。しかし、それゆえにもはやそれは容易に認識できるものではなく——先のベルリンの路上の場面で描かれたように「群集」の住人と化したヨアヒムにとってはなおさら——「不確かなもの」になるのである。

この不確かさは、物語全体の主題と深く関わるものであり、『夢遊の人々』第 1 部に目を向けると、そのタイトルには「1888 年——パーゼノーあるいはロマン主義」と付されている。この 1888 年は、ヴィルヘルム 2 世がプロイセン王、ドイツ皇帝に即位した年である。彼が帝国主義を推し進めた結果、第 1 次世界大戦を招くことになった。その頃、ベルリンの人口は急速に増加し、さらに工業化が進み鉄道網が拡大され、まさに人流と物流の拠点にもなっていた。先の引用部では、モノとヒトが溢れるだけでなく、周囲のモノが人間としての

自律性を侵犯し、不確かなヒトとなる個体を群集化させるベルリンの中で、ヨアヒムの「生」もまた舳い綱を失い漂白する存在となっていく様子が描かれた。続けて『夢遊の人々』第2部「1903年——エッシュあるいはアナーキー」の主要人物であるアウグスト・エッシュが街で見かけた少女の場面を確認してみよう。

少女が今、身を屈めて黒い麦わら帽子を膝頭に向けたとき、その姿は極めて人間とはかけ離れた集塊 (Masse) で奇形児のようであったが、それにもかかわらずある種の、いわば機械的な即物性 (Sachlichkeit) を備えていた。(KW1, S. 218.)

エッシュが目にした救世軍の少女は、身体性が剥ぎ取られたモノ、オブジェと化していた。その姿はエッシュの欲情を駆り立てるようなものではなく、フェティシズムの文脈とは切り離されている。エッシュの視線においてヒトがモノと化した塊が捉えられているのであるが、突如としてヒト=モノとして現れた少女は、エッシュを取り巻く関係性において現れた異物であると同時に彼と世界との関係性を露わにするオブジェとして在る。ここでは、このようなモノ化したヒトと人間との新たな、変容した関係性が示されている。慣れ親しんだケルンから離れたマンハイムの生活で「同胞への架け橋が壊れてしまった」(KW1, S. 218.)と疎外感を感じたエッシュがモノの世界の呪縛を受ける場面であり、人間関係、ヒトとヒトとの繋がりがモノに脅かされ、支配された世界、つまり第3部で描かれる「即物性」の時代の予兆とも受け取れよう。その世界の扉を開くのが Masse の語であり、この語が引き鉄となってモノ化した世界が発現しているのだ。ケルンに戻ったエッシュが情婦ヘンティエンとの肉体関係において立ち現れる「集塊」と「集団」を揺れ動く Masse においてもそれが示されている。

エッシュは、ヘンティエンの頭を両手で抱え抱きしめた。まるで彼女の頭の中で硬直して、彼のものにならなかった思考を絞り出そうとするかのように。エッシュの口は、まるまるとした頬と狭い額の美しくもない重ったるい平らな部分を辿った。そこは感応もなく微動だにしないままだった。マルティンが群集 (Masse) のために犠牲になりながらも彼を救わぬままでの群集、その群集のように微動だにせず感応がなかったのだった。(KW1, S. 286.)

上記の引用箇所では、ストライキの指導者マルティンが犠牲になりながらも彼を救出に動かない「群集」をヘンティエンの不感症的な身体反応、つまり動きがない身体の「塊」として喩えられている。さらにこのような Masse における「集塊」と「集団」をめぐる振幅・重畳運動は、エッシュとヘンティエンの性的関係において再び現れる。

先週もその前の週も、ヘンティエンは鈍い動きのない状態でエッシュを受け入れていたからだ。この短くも硬直した身の悶えはごく軽微なものであったとしても、慣れ親しんだものの集塊 (Masse) が今やある場所で、微細だがいまだ汚されぬ場所で止揚されたのであった。それはまるで未来と希望のシグナルのようだった。(KW1, S. 302.)

ヘンティエンのぎこちない微かな身悶えが「慣れ親しんだものの集塊 (die Masse des Gewohnten)」、寄せ集めとして表現されている。いわば形骸化した反復運動と化した習慣の残滓として、身体反応すらも「集塊」すなわちモノに引き渡されている。このように『夢遊の人々』第2部においては、「動きが乏しく (unbeweglich)」て「感応がない (stumpf)」「群集 (Masse)」のイメージもまた形作られていくのだ。

このような「群集」のイメージは第3部69節でエッシュとパーゼノー少佐が遭遇する暴動の場面に接続されていく。二人は刑務所に近づくと、得体の知れない「奇妙な断続的な唸り声 (ein merkwürdig stoßweises Summen)」(KW1, S. 605.) を耳にし、不快に感じている。やがてそれは——屠殺場から聞こえる動物の咆哮によって中断されながらも——「腹へった、腹へった (Hunger, Hunger)」(Ebd.) と空腹を訴えかける囚人たちの声だったことがわかる。これは空腹という共通の理由のもと発生した同期的現象とも言えるだろう¹⁶。囚人たちの合唱は家畜が殺される際の鳴き声によって中断を交えながら続いていく。このような人間と動物の咆哮は、災厄を予感させる通奏低音となる。そして刑務所の前には人々が続々と集まっている。その集団には「群れ (Schar)」(KW1, S. 605.) の語が当てられて形容されている。集団の声と畜群の断末魔はとてつもない惨事、暴動の勃発を読者に想起させるが、しかしその予想はあっさりと裏切られる。さして叙述がないままにパーゼノー少佐が暴動を鎮静化してしまうのだ。そして刑務所の前の「群集」は次のように描かれる。

そして、人々の動きはしだいに小さくなり、影が濃くなり、完全に消え去り、門の前で静かに待つ黒い集塊 (eine lautlose wartende schwarze Masse) となった。(KW1, S. 607.)

集団が「静かに待つ黒い集塊」と形容されているように Masse には著しく動性が欠如している。人間の集団の文脈では、のちに『群集狂気論』でブロッホは、ル・ボンやフロイトの議論を引き受けて、集団の行動を方向づける存在として指導者の「リーダーシップ (Führerschaft)」を重視していた¹⁷。『夢遊の人々』でも人間の「群集」には指導者を欠いて

¹⁶ ここでは動作が連動する意で同期を用いている。「同期」概念については本叢書の海老根論文を参照のこと。

¹⁷ ブロッホは1939年と1941年に『群集狂気論』第2部第4章「朦朧状態とリーダーシップ (Dämmerzustand und Führerschaft)」を書いている。Vgl. KW12, S. 297-330。指導者は「群集の目標を形象化し、群集の散漫な欲求をこの目標に集中させることができる」(KW12, S. 299.) 人物とした。

いるので、「群集」は動性或持続性を欠いた「集塊」に過ぎなくなる。それは暴発せずに、すぐに沈静化する一過性の存在にすぎないのだ。

3. 発作と咆哮、そしてすぐに冷め止む「群集」——『未知量』

3章では、小説『未知量』(Die Unbekannte Größe, 1933)を確認する¹⁸。この小説は、1933年9月17日から10月6日までベルリンの「フォス新聞」(Vossische Zeitung, 1911-1934)に掲載され、1933年12月にフィッシャー社から出版された¹⁹。『夢遊の人々』で、ブロッホはMasseがヒトとモノとの境界を揺れ動く様を巧みに小説の描写に取り込んでいた一方、『未知量』では集団心理、つまり集団内部の個人の心の動きにも目を向けている²⁰。

ここでは、主人公リヒャルトの弟オットーが母親カタリーネを連れて、友人カールのサッカーの試合を見ている場面に注目する。兄とは対照的に非合理的な行動をとる人物として描かれるオットーは母親の言葉に耳を貸さず、試合に興奮する周囲の熱狂に包まれていく。対戦相手から受けるカールへの激しいプレイを見て、驚いた母親がオットーに話しかけるも気づかない。

しかしオットーはもはや話を聞いていなかった。母親は驚愕し、オットーが踊り始め、それに加えて絶えず「フシンスキー」と叫ぶのをただ見つめるだけしかできなかった。しかし、狂気の沙汰を演じていたのはオットーだけではなく、観客の大半も同じような発作に襲われていた。一方、フィールドの選手たちも連動して動きが活発になっていた。発作はますます激しくなり、最後には「ゴール！ゴール！」という訳のわからぬ言葉がかるうじて聞き取れる咆哮になった。その後、あらゆる熱狂は驚くほど早く静まった。(KW2, S. 88.)

¹⁸ ブロッホは『未知量』の原稿料で多くの収入を得たが、のちに小説に否定的な態度をとっている。Vgl. Manfred Durzak: Hermann Broch: Der Dichter und seine Zeit. Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz (Kohlhammer) 1968, S. 199f.

¹⁹ Vgl. HBH, S. 115.

²⁰ 小説のあらましを簡単に説明しておく。主人公である数学者・物理学者リヒャルト・ヒークは、数学と自然科学の力を信じ、学位論文に取り組んでいる。世俗的な母と弟オットーを軽んじていたリヒャルトは、信仰心が篤い妹ズザンネに親近感を抱いている。リヒャルトは愛や性愛といった予測不可能なものを脅威と感じ遠ざけている。また指導教官ヴァイトブレヒト教授の老いにも不安を感じている。リヒャルトにとって天文台での仕事や数学は、明確な解が得られるので楽しさを感じている。そんなリヒャルトは、プールで学生エルナ・マグヌスの水着姿を見たことを契機に性に目覚める。そして助手イルゼ・ニートハルムと恋に落ちる。リヒャルトは弟オットーが町の池で溺死したとき、抽象的合理的世界から突然、非合理的なものを含む現実世界に放り出されたと感じる。稼業半に数学研究に勤しんでいたこともあるブロッホ自身が主人公リヒャルトに多分に反映された小説である。ただ内容的にはやや大味で、文体にも特徴を欠いている。Vgl. HBH, S.116f.

サッカーの観客は熱狂し、「発作 (Paroxismus)」に襲われる。ただしこの「発作」はさらなる身体的な動作や過激な行動には発展せずに、すぐに「喚き声、咆哮 (Geheul)」に変容する。ブロッホの文学テキストにおける人間集団の「群集」表象におけるすぐに冷め止む特徴もこの箇所にも指摘できよう。『街路』の「ライン河の哨兵」を歌うことで一体化していく集団のように、「フシンスキー」の名を叫び、「ゴール」と連呼するオットーが他の観客に同期し熱狂する点も同様だ²¹。ただし、オットーが他の観客と発作的に動作が連動する、集団心理のメカニズムに筆が費やされているわけではない。この場面の叙述の厚みに欠けている点を批判できるが、ここではすぐに沈静化する「群集」にブロッホの特徴を見出し強調するに留まり先に進む²²。

4. モノに支配された世界、あるいは描かれぬ暴徒たち——『贖罪』

4章ではモノとヒトとの関わりに視点を戻し、「群集」表象を分析する。1932年に執筆され、1934年にスイス・チューリッヒで上演された戯曲『贖罪』(Die Entsöhnung)は、ブロッホの紡績工場の経営者としての経験が強く反映された作品である。いわゆる古典演劇のような二人の主人公の闘争に導かれる筋書きではなく、主題は経済問題であり、形骸的で非人間的なシステムへの批判が展開されている²³。舞台は、1930年前後のドイツの産業界で、株式市場の暴落という金融崩壊に直面しながらも必死に生き延びようとする企業間の、そして雇用者と被雇用者との対立を描いている。登場人物たちがいずれも悲壮感と絶望感に支配されているこの戯曲では、経営側と労働者側、そのどちらにも肩入れされて描かれていない点が大きな特色である²⁴。

²¹ ブロッホは『群集狂気論』でこの現象を次のように説明している。「一般の人々も集団になると、ある種の不安感や劣等感によって自らの合理的規範を放棄し、あらゆる群集狂気の現象によって証明できる陶酔状態 (Rauschzuständen) を追い求めるようになってしまう」(KW12, S. 279.)

²² オットーという人物には、後のブロッホが『山の小説』(『魅了』)で試みたような、個人が集団化・群集化するプロセスの原像として指摘することもできよう。

²³ Vgl. HBH, S. 217f.

²⁴ 戯曲のあらましは以下の通りである。経営不振の会社フィルスマンは、競合企業ドゥーリッヒとの競争力を維持するために、3工場のうちの1つを閉鎖し、多数の労働者を解雇し、賃金カットの実施を検討せざるを得なかった。フィルスマンの労働者たちは不安に悩まされている。一方雇用者側も、特に老齢の創業者で副社長であるフリードリヒ・ヨハン・フィルスマンとその息子ヘルベルトは、稼業と生活が崩壊していく様子を絶望的な思いで見守っている。労働者の怒りと不安の矛先は、フィルスマンの現場総責任者エルンスト・ヒュグリに向けられる。ヒュグリはコスト削減と生産性向上を図り、新しい機械を導入したが、その結果多数の労働者が解雇される羽目になった。ヒュグリは、労働者との間に信頼関係を築こうとする一方で、会社の意志を実行するのも彼自身であったので、両者の間に立たされる。労働者はヒュグリを敵と定め、レイオフや賃金カットの責任を迫及する。レイオフの犠牲者グスタフ・ヴォーリツキは、ヒュグリと共謀して、どの労働者を解雇するかを決めた人物であると思い込んで労働者評議会議長ゲオルク・リヒナーを殺害した。結果、労働者間の緊張は高まった。殺人の目撃者はなく、犯人の正体や動機をめぐる

「群集」表象という問題から鑑みれば、戯曲という性格上、観客は舞台上で演じられる集団を目にし、大抵、その演者の多さ、あるいは多数性を意識させられる。ここでは舞台上の「群集」のブロッホの演出指示に注目する。以下の引用部は、第3幕における労働者の集団がヒュグリの家に投石をする場面である。

正面ステージ。工場の壁、街灯。(殺人現場)。労働者たち、ほとんどが若者で、中には女性もいる。彼らは決して舞台全体を埋め尽くしているわけではない。右側には気恥ずかしそうに座っているグループ、立っているグループ、地面に座り込むグループ、それぞれが近くにいる。左側では、ヴォーリツキの母親が一人でしゃがんでいる。この場面は、控えめで、影のように、マリオネットのように演じられなければならない、すべての動作は無音であり、人が舞台を横切るときも、音を立ててはならない。(KW7, S. 209.)

工場の前の集団は数グループいる。ブロッホはその集団の役者たちに「控えめに、影のように、マリオネットのように演じなければならない、全ての動作は無音で」なければならないと指示している。このようなト書きからも暴動に走る、荒々しい暴力的な場面は舞台上では避けられていることが理解できよう。この他の場面でも、会社側の人間であるヒュグリを襲うべく群がる労働者たちを演じる役者への指示には、声量を抑え、さらに集団の人数も20人以下といったものもある²⁵。ここでもやはり人間集団の直接的な描写が極力控えられている。『贖罪』で描かれる集団は、『夢遊の人々』の「静かに待つ黒い群集」と同じく、その動性の乏しさを特徴として指摘できよう。

しかし、『夢遊の人々』や『未知量』とは異なり、この戯曲には暴徒化した労働者の集団の投石が原因でヒュグリの息子は命を落とすというエピソードによって、人間の集団が暴発し暴徒と化す場面がある。ただしその暴徒は、第3幕第2場の「大衆の唸り声 (Volksgemurmel)」(KW7, S. 211.) や「絡み合った声 (Stimmengewirr)」(KW7, S. 212.) 「叫び (Rufe)」(Ebd.) 「けたたましい声 (eine schrille Stimme)」(Ebd.) といった声や叫びで表現さ

憶測が労働者の恐怖と怒りを増大させた。賃金カットの噂と警察による集会禁止令が、労働者たちをさらなる行動に駆り立てる。第3幕では、労働者たちはリヒナーが殺害された工場の外に群れ始める。労働者たちはヒュグリの家に投石をする。窓の外から投げ込まれた石が生まれたばかりのヒュグリの息子に直撃する。結果、息子は命を落とす。そしてエピローグ「死者たちの嘆き」によって舞台は閉じる。Lützelersは「新即物主義 (Neue Sachlichkeit)」の戯曲の特徴を持ちながらも、その範疇に収まらない戯曲と評価している。(Vgl. HBH, S. 217f.) その他『贖罪』の先行研究として以下の Ernst Schürer の論文を参照した。Ernst Schürer: Brochs „Die Entsühnung“ und das Drama der Neuen Sachlichkeit. In: Modern Austrian Literature, 1980, Band. 13, Nr. 4, S. 77-98; Ernst Schürer: „Erneuerung des Theaters?: Broch's Ideas on Drama in Context“. In: Hermann Broch. Visionary in Exile. The 2001 Yale Symposium. Hrsg. v. Paul Michael Lützelers u. a. Rochester (Camden House) 2003, S. 21-36.

²⁵ Vgl. KW7, S. 211.

れ、集団の姿は舞台では示されず、音声によってのみ表象されているのだ²⁶。つまり暴徒の表象は、声の大きさ、空気の振動によって空間上の存在が伝えられ、直接的な描写は避けられている。荒ぶる人間の集団を表象する際に、ブロッホは「声」を媒体として重宝しているのも彼の文学テキストの共通項として挙げられよう。

本編 3 幕では、「群集」表象については、いわば地上の労働者の集団が描かれてきたが、エピローグ「死者の嘆き (Totenklage)」²⁷では、抽象化された世界において「群集」が描かれる。例えば、第 2 場の女たちの合唱では、薄暗い場所で抽象的な服を身に纏っている女性たちが登場する²⁸。本編が金融市場原理という、いわばモノの原理に支配された家父長的男性社会が描かれた一方、エピローグの第 2 場では、そのような社会で虐げられた女性たちが、固有性から離れた世界で、鐘の音とともに合唱し、物語は締めくくられる。ここには後述する『ウェルギリウスの死』第 4 章で試みられている、地上の人間の集団内部の個から形而上的世界の集団への変容と合一という志向が確認できる。

ただし、このような抽象的なエピローグは、1934 年の上演の際にも、ブロッホの死後に放送劇²⁹として脚色された際にもカットされていた。たしかに先の 3 幕とエピローグとの内容的なつながりは薄く、エピローグでは抽象的世界が展開されるので観客や聴者にとってその内容の理解は容易ではない。特にエピローグの女性たちの合唱は、全体を締めくくる場面であるだけに、やや唐突感があることは否めない。しかし、その一方で、ブロッホの文学観、創作理念を鑑みた場合、このエピローグの抽象劇こそ、戯曲『贖罪』を単なる自然主義的演劇の枠組を越えた戯曲たらしめるはずだった。ブロッホの意図するところでは、この合唱場面は自然主義的な現実世界の枠組を越え出た非合理的なものの表出を目指している。つまり合唱を媒介として、この戯曲がブロッホの術語で言うところの「ソフォクレス層 (sophokleische Schicht)」³⁰に達することが期待されている。物語の展開に直接介入せずに、その一部でありながらも注釈を加えるソフォクレス演劇における合唱の機能をブロッホは意識していたので、「ソフォクレス層」と名付けたのであろう。エピローグの「死者の嘆き」における合唱は、一つの集団的な人格として戯曲の筋を担い注釈を与え、それらを超越した「ソフォクレス層」へと誘う「抽象主義様式」となることを目指した³¹。それゆえにこのエ

²⁶ ブロッホの暴動場面の描写を避ける態度については、暴動が各地で起きていた時代背景を視野に入れて考察する必要もあろう。

²⁷ Vgl. KW7, S. 226-234.

²⁸ Vgl. KW7, S. 228.

²⁹ Vgl. Hermann Broch: Die Entsöhnung. Schauspiel, in der Hörspielfassung und mit einer Einleitung von Ernst Schönwiese. Zürich (Rhein-Verlag) 1961.

³⁰ ブロッホは、ソフォクレスが提示した合唱を巧みに取り込んで現世を超越した演劇世界の境地を「ソフォクレス層」と呼んでいる。

³¹ ソフォクレスにおける合唱の機能についてのブロッホの見解は以下の文献の記述を参照のこと。Vgl. HBH, S. 222-223. またブロッホの「建築学的自然主義 (architekturierter Naturalismus)」(KW7, S. 405.) とい

ピローグは戯曲『贖罪』において重要な位置を占める。

ブロッホの「群集」表象において、「集団」と「集塊」の振幅・重畳の力学だけでなく、地上の世界と形而上的世界を切り結ぶ垂直関係も組み込まれている点が特徴的である。ゆえにこの『贖罪』は、『夢遊の人々』と『ウェルギリウスの死』を架橋する重要な作品として位置付けられる。

5. 群集パノラマ、モノの群れ——『ウェルギリウスの死』

ウィーンのラジオ放送局 RAVAG 放送用に執筆した『ウェルギリウスの帰郷』(Die Heimkehr des Vergil, 1937)³²では、獣性を孕んだ人間集団の外面的描写が特徴的であり、それゆえに群集嫌悪のパトスが前景化されている。しかし、この放送劇のために書かれた短編は、やがて長編小説『ウェルギリウスの死』として完成することになる。その過程で、ブロッホは 1938 年 3 月の亡命前のナチスによる捕縛という経験に加え、アメリカ亡命後に『群集狂気論』の執筆のために、改めて精神分析、集団心理に関する学問的知識を吸収していった³³。1936 年 1 月に初稿『魅了』が成立し、その後も亡命地アメリカで改稿を重ねたが未完に終わった小説『山の小説』と、1945 年同地で出版した『ウェルギリウスの死』、これら二つの作品では本来あった作品構想に基づいて小説が執筆されている。両者それぞれに課された「群集」表象の課題が期せずしてうまく振り分けられたことが、『ウェルギリウスの死』の成功をもたらしたと言えよう。その一方で、『山の小説』に課せられた集団心理の解明という課題が小説を蹉跎に導いた、との推測も成り立つが、その根拠は後で示すことにして、まずここでは「群集」表象と向かい合う。

『ウェルギリウスの死』は、前段階にあった短編『ウェルギリウスの帰郷』に比して、冒頭で描かれるアウグストゥスの船団が港に着く場面を中心に、人間の集団と同時にモノの描写が広がり、いわば「群集」のパノラマがより壮大に展開されている。しかし、描写の分量だけでなく、『夢遊の人々』そして『贖罪』でも試みられた「群集」の表象領域をより多層的に、具体的に言えば、意味の振幅・重畳のみならず、地上と彼岸の「群集」の変容過程が物語の展開とそれを支える文体、一文一文における統語法と相俟って示されている点で、美学的側面でも数段階高次のレベルに達している。

う術語から説明を試みるならば、その作意においては、現実的なものに留まる「自然主義的基礎」を支柱にしながらも、そこから現実の背後、現実の先にある世界、「ソフォクレス層」、言い換えれば「夢の如く高められた現実 (Sphäre der traumhaft erhöhten Realität)」(KW9/2, S. 105.) に誘われることを意図している。この「ソフォクレス層」では「自然主義は抽象主義様式に変化する (der Naturalismus ins Abstrakt-Stilistische umschlagen)」(KW 7, S. 405.) とブロッホは説明する。

³² 1937 年の初め頃成立。注釈版では下記の巻に収録されている。Vgl. KW6, S. 248-259.

³³ Vgl. HBH, S. 433-436.

まず『ウエルギリウスの死』でも、Masse が多数のモノとヒトとの間、そして人間集団と集塊との間の振幅運動が文体に組み込まれた形で展開され、文の中で巧みに推移変容していく場面を確認する。以下の引用部の一文内で、船群というモノの群れから、巨大な空間を占める「群獣 (Massentier)」³⁴と評される人間が群れ集う場面に移行している。

四方に停泊している小舟、帆船、漁船、タルタナ、輸送船の間を危険なく航行するための慎重な操縦を始めた。進めば進むほど自由水路は狭くなり、船群は周囲に密集し、マストやロープやリーフを張った帆の絡まり合いは密度を増し、その硬さは死を、休息にある生を意味しているように、奇妙に暗鬱な交錯しもつれ合った根となった。油のように黒く輝く海面から、その根が、動かぬ夕映の大空に向かって陰鬱に伸びていた。木と麻布でできた黒い蜘蛛の巣は、不気味に下の水面に影を映して、あちこちの甲板の上で歓迎の声を上げている松明の荒々しい明滅によって不気味に上方に閃き、港の広場の照明の輝きによって不気味に照らされている。港の家々では、屋根裏部屋まで窓が次々と照らされ、列柱の下にある酒場の隣では、松明を持った兵士の列が、兜を輝かせながら広場を横切って並んでいた。船着き場から街までの道を確保しなければならなかったらしい兵士たちだった。栈橋の税関小屋やその倉庫が松明に照らされ、そこは人体でぎっしり埋まったきらびやかな巨大な空間だった。激しくかつ荒々しい期待を宿した巨大な容器には、石畳の上を滑り、引きずり、踏みしめ、足摺りをする何十万もの足が生みだすざわめきに満ちていた、たぎり煮えかえる巨大な闘技場には、高くなるかと思えば低くなる焦燥の黒い羽音が、荒れ狂う焦燥が漲っていた。(KW4, S. 20-21.)³⁵

「船群」というモノから人間の集団へという「群集」表象が一文の中で推移していく。ここでも人間の集団は、「叫喚、叫び声 (Geschrei, Rufe)」あるいは「歓声 (Gejohle)」「唸り声 (Geheul, Gebrüll)」あるいは Summen というブンブンいう「羽音」によって表象されている。「黒い羽音 (schwarzen Summen)」は、ヒトが羽虫の如く集る様子がバイオミミクリーの共感覚表現で

³⁴ この箇所を含め、Massentier は小説内で 2 回使用されている。Vgl. KW4, S. 21 u. 30. 本稿では合成語は分析の対象から外したが、ブロッホは Masse の合成語を意識的に用いている点を指摘しておく。例えば、Massengeschrei の他には——ここではあえて Masse を含む合成語を生硬に訳し分けてみるが——「人塊 (Menschenmassen)」(KW4, S. 22.)、「極大群集 (Riesenmassen)」(KW4, S. 343.)、「一般国民 (Volksmassen)」(KW4, S. 396.)などが挙げられる。小説冒頭に Masse の語が集中して使用されているが、その理由の一つには、「群集」に對置される存在として詩人ウエルギリウスが描かれていたからであろう。ただし、ウエルギリウスと「群集」との対立性は、物語の進展とともに変化を見せる。第 3 部の後半では、詩人は「私たちを運んでくれた群集 (Masse) に、そして始原の腐葉土 (Humus) に回帰しなければならない」(KW4, S. 397.) という認識を得る。

³⁵ 『ウエルギリウスの死』の訳出に際しては既訳を参照したが、変更を加えている。川村二郎訳：ウエルギリウスの死 (世界の文学 13)、集英社、1977 年。

示され、その音量とスケールは合成語「群集叫喚 (Massengeschrei)」(KW4, S. 22.) に集約されていく。紙幅の関係上ここでは詳述できないが、『ウェルギリウスの死』では、嗅覚を媒介した溢れるモノの群れ・塊を認識する箇所³⁶があるように、統語法を巧みに利用した、モノの群れ・塊からヒトの集団への変容、変奏を非可逆的な推移とともに表象しきった点は、文学テキストの「群集」表象の一つの臨界点と見做せよう。というのも、小説第4章「エーテル——下降」では、冥界へと突き進むウェルギリウスの内的独白、混濁していく意識の奔流のなかで、集団と一体化していくプロセスが描かれていたが、それを叙述内容で示すだけでなく、一語一語の言葉の意味の連なり、連なりが醸成する音律が下支えとなった文体が、例えば《時》とのつながりを読者に意識させることによってまた、形而上的世界の表出に成功しているからだ。

『ウェルギリウスの死』第4章は、『贖罪』のエピローグ「死者の嘆き」での集団人格の合唱で試みられた「群集」表象や作品における役割と重なるものであり、本稿の冒頭で触れた公開書簡『街路』において「共通の形而上学的真理感情を共有する共同体」の文学的表象の一つが示されているのではないか。ただ戯曲『贖罪』では、本編とエピローグにおけるその地上と形而上的世界へ繋ぐ表象の試みは受容面での障害となっただけでなく、バランスを欠いていたため作品構造的にも見直す余地はあった。一方、『ウェルギリウスの死』第4章では、集団の中にある個がアモルフな集合体と合一する存在としてウェルギリウスが描写されただけでなく、同時にそれを支える文レベルの統語作法によって、つまり、一文内に内在する個々の語彙が読解に従い現出する時の問題という形而上的解釈も可能とする衣装を纏わせたことによって、いわばアナゴジカルな「群集」表象を実現している。ブロッホが想定する「共通の形而上学的真理感情を共有する共同体」は、彼が生きた地上の世界にはもはや存在せず、「死者たちの群れ」、彼岸の「群集」にその憧憬を託したのであった。

6. 集団心理の実験小説として見る『魅了』(『山の小説』)³⁷

6章では、ブロッホの小説構想に基づいた最後の作品として『魅了』(Die Verzauberung,

³⁶ Vgl. KW4, S. 35.

³⁷ 1935年7月12日から1936年1月16日にかけて第1稿『魅了』は執筆された。『魅了』は『呪縛』とも翻訳されている。当初ブロッホは、3部作として構想しており、編集者ダニエル・ブロディ (Daniel Brody, 1883-1969) にその第1部のタイトルは『デメーター』(Demeter) であると説明している。ブロッホは1937年11月に友人ルート・ノルデン (Ruth Norden, 1906-1977) に小説が進まず、新たに『ウェルギリウスの帰郷』の執筆を始めたと告白している。1938年3月13~31日まで勾留されたブロッホは、『魅了』とその改稿原稿を友人に託した。1948年第2稿の改稿に再度着手するも3章までで中断してしまう。Vgl. HBH, S. 128-130. なお訳出するに際し、原文と対応する箇所については、下記の訳書を参照した。古井由吉訳：誘惑者 (世界文学全集 56)、筑摩書房、1967年。

1936) を取り上げる³⁸。まず通称『山の小説』(Bergroman) の初稿に位置づけられる『魅了』のために 1940 年に書かれた自註を参照してみる。

「客観的表現」によって、集団心理的現象に生気を与えることができるのは間違いないだろう。旗手の行列やサッカーの試合での歓声、バルコニーからヒトラーの奇声が響く帝国首相官邸前の群集を描くこともできるし、ポグロムの惨状を生々しく描写することもできる。しかし、これらの描写はすべて、たとえ歴史的背景があったとしても、ある程度は空論で、集団心理がもたらす運動の存在を言及しているにすぎず、その実際の働きや効果については何も述べていない。もしこのことを知りたければ、個々の魂に問いかけなければならない。なぜ、どのような形で、集団心理的行動と呼ばれるそれ自体理解しがたい出来事の餌食になるのか、実際、その中に含まれる理解し難さが、このような問いかけを必要とするのだ。集団心理の中では、個々の人間は最も不器用な嘘であっても真実として受け取る用意があり、非常に冷静で自己批判的な人間でさえも最も幻想的な事象に心を奪われ、長い間時間の深淵で考えられてきた、いにしへの傾向が現れ、あらゆる合理性の中で神話的思考が始まる——こうした不可解さの餌食となる個々の魂だけが、これについて情報を与えることができるのだ。(KW3, S. 383.)

この引用箇所ではブロッホによれば、「客観的表現 (objektive Darstellungen)」は、「群集」を描くことはできるが、「集団心理の実際の働きや効果」については何も示さないと述べている。つまり、ブロッホは『魅了』という小説に、「群集」に対してのアプローチを変更する必要があるとの認識から、「群集」はいかにしてその内部から描きうるのか、という課題を自らに与えた。実際、ブロッホは『夢遊の人々』や『未知量』あるいは『ウェルギリウスの死』において、基本的には、「群集」現象を外部の視点から叙述するに留まっていた。そこで『魅了』では「群集」の中にいる個人、つまりこの小説の語り手である田舎医師という形姿を借りて、上述した課題の実践として集団内部の視点から物語世界の叙述を試みたのだった。

しかし、このようなブロッホが設定した田舎医師という語り手は、もはや絶対的な語り手ではなく、「群集」内部に存在し、時には彼らあるいは指導者からも影響を受けて考えや立場を変化させる、いわば読者にとって頼りない存在となる。言い換えれば、『魅了』の田舎医師は、集団の指導者の思想が、語り手という本来侵さざる境界を越えて染み込んでいく、ライフサイエンスの用語を借用すれば組織の中に異質なものが入ってきて増殖していく

³⁸ ブロッホは最晩年に出版社の依頼を受け、過去の短編小説をつなぎ加筆し、長編小説として『罪なき人々』(Die Schuldlosen, 1950) を出版している。この小説も匿名性が担保された「群集」の中にいる個人など、「群集」という視点からの論述ももちろん可能ではあるが、ブロッホの創作構想にもともと入っていなかった点や紙幅都合などを総合的に鑑み、本稿では取り上げない。

「浸潤 (Infiltration)」される語り手というように説明できよう。田舎医師は無自覚に抱く感情や振る舞いを「奇妙なこと (etwas Merkwürdiges)」(KW3, S. 243.) と記し、異質なものとして認識している。例えば、田舎医師は隣人の代理業者ヴェチーに対して、「奇妙なことに (es war merkwürdig)、またも私はこの実直で勤勉な小男に我慢ならない感情が実は芽生えたのだった」(KW3, S. 184-5.) と告白し、また忌み嫌っているマリウスの配下で若者を集めて民兵を組織するヴェンツェルとすれ違った際には、「奇妙なことが起きた。古参兵のように私も軍隊的に敬礼したのだ」(KW3, S. 243.) と独白しているように、無自覚に敬礼をしてしまう。「浸潤」には「本来その組織固有のものでない細胞が、組織の中に出現すること」という意味を持つと同時に、薬剤を投与して治療する意味もある³⁹。ここでは、「浸潤」の語に、心に傷を持つ個人 (田舎医師) が集団の中で癒されていく姿を重ねることもできよう。『魅了』は、読者が「浸潤」される語り手の、その視線や心の動きを通して、集団心理の機能を知ることができるように構築された物語なのである。

先に引用した自註の中でブロッホは、集団内部の人間には、「いにしへの傾向 (archaische Tendenzen)」が立ち現れ、あらゆる合理性の中で神話的思考に回帰すると述べていた。このあたりはアドルノ／ホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』⁴⁰のテーゼを補助線に、合理主義批判を読み取れる箇所であるが、本稿では、多数派の社会集団では生きられない個人がある集団に属すと、たとえ「不器用な嘘であっても真実として」生きられるという非理性的な人間の社会性の側面を看破している点に、ブロッホの「群集心理」、つまりは集団の影響下にいる個人の精神的作用の特性を析出する。

『魅了』の主要人物たち、過去に恋人を亡くし、一人クブロン村に移り住んできた田舎医師あるいは流れ者の煽動者マリウス・ラティもしくは夫を殺されたギションもまたそれぞれの「真実」を頼りに生きているのである。三者三様の「真実」に依るさまを通じて、ブロッホは集団の持つ「癒し」の機能も『魅了』に書き込んでいる。このような「癒し (Heilung)」の機能には、ブロッホのフロイト集団心理学の影響・痕跡を看取できる。次章ではフロイトの用いた術語「歪んだ癒し (Schiefheilung)」に注目する。

7. 「歪んだ癒し」——『集団心理学と自我分析』を補助線に

フロイトは、『集団心理学と自我分析』⁴¹ 6章「暗示とリビード」の冒頭で「個人が集団

³⁹ ブリタニカ国際大百科事典「浸潤」の項目を参照。

⁴⁰ ホルクハイマー、アドルノ (徳永恂訳)：啓蒙の弁証法 哲学的断想、岩波文庫、2007年参照。

⁴¹ Sigmund Freud: Studienausgabe Bd. IX Fragen der Gesellschaft Ursprünge der Religion. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 2000. 以下、引用する際には、SAと略記し、巻数と頁数のみを記す。訳出する際には、以下の既訳を参照したが、Schiefheilungをはじめ訳語については適宜修正した。藤野寛訳：集団心理学と自我分析 (フロイト全集)、岩波書店、17巻、2006年収録。

の中に身を置くと、その影響を受け、心の活動という点でしばしば深刻な変化を経験する」と述べている。この有名なテーゼは、『魅了』の煽動者マリウスとその女性信者で儀式殺人の犠牲者となるイルムガルトの関係における「ほれ込みと催眠状態 (Verliebtheit und Hypnose)」だけでなく、語り手である田舎医師の行動・発言にも反映を読み取れよう。このように『魅了』には、『集団心理学と自我分析』の受容の痕跡がいくつか見受けられ、ここではフロイトが用いた術語「歪んだ癒し」を補助線として小説を読み解くことを試みる⁴²。このフロイトの術語は著作中以下の箇所でのみ用いられている。

神経症は〔ヒトを〕非社会的にして、神経症者を習慣的な集団形成からの除け者にする(略)。神経症は、惚れ込みと同じように集団に対して壊滅的な影響を及ぼす、と言えるかもしれない。それを裏付けるように、集団形成への強い後押しが生じているところでは、神経症が背後に退き、少なくとも一定期間は姿を消すという事実が見られる。(略)神秘的・宗教的な、あるいは哲学的・神秘的なセクトや共同体へと結びつけるあらゆるものの中に、多様な神経症に対する歪んだ癒しの表出の看取も難しくない。これらすべてが、直接的な性的追求と目標が制止された性的追求との対立に関連している。(SA 9, S. 132-133.)

神経症者がある特定の集団の中に入ると回復の傾向を見せる。フロイトはこのような集団形成における神経症者の治癒効果を認めながらも、「歪んだ (schief)」ものとした。都会社会に馴染めない一般的な「習慣的な集団形成」からの除け者であり、執拗に女性を拒絶する煽動者マリウスは、「直接的な性的追求と目標が制止された性的追求との対立」を抱えた人物として描かれている。彼はクプロン村に居場所を見つけ、自身の「妄想システム (Wahnsystem)」(KW12, S. 336.)を稼働させ、周囲に展開し、村という集団社会を自らの秩序に組み入れてしまう。『魅了』はクプロン村の集団で支配的となったマリウスの秩序化された妄想に次々に取り込まれていく物語とも言えるだろう。

一言付け加えるならば、自己完結した集団の内部で「真実」の承認を得て「歪んだ癒し」が実現されるには、異物の排除が必要不可欠であり、この治癒機能は排除と結託してのみ実践される。それゆえに「歪んだ癒し」の二重性、「治癒」と表裏一体の迫害構造をブロッホはさらに『魅了』に書き足そうとしたのではないか。というのも、ブロッホ曰く『山の小説』の改稿は削ること、抽象化がその作業の中心と述べていたにも関わらず、集団内部の被迫害者、

⁴² Schiefheilung に関しては下記の論考を参照した。Vgl. Markus Brunner: Von stummen und lärmenden Massen. Zu einigen Widersprüchen in Freuds Massenpsychologie und Ich-Analyse. In: Markus Brunner, Hans-Dieter König, Julia König, Jan Lohl (Hrsg.): Sozialpsychologie der Massenbildung 100 Jahre Sigmund Freuds „Massenpsychologie und Ich-Analyse“ Wiesbaden (Springer VS) 2022, S. 87-108.

迫害されるマイノリティである代理業者ヴェチーの具体的な叙述が増えていったからだ⁴³。

終わりに

本稿では、ブロッホのテキストに現れた「群集」表象を主要な作品の成立順に確認した。それらに見られた特徴のいくつかは、1918年のエッセイにその萌芽がすでに認められる。ブロッホの文学的営為には、他の20世紀の作家と同様に「群集」という現象を追い、表象しようとする苦慮していた姿が窺える。身体の一部で人間の集団を表象しようとする隠喩作法はややバナルな印象を受けるが、それはそれで一貫していた。上述した「ソフォクレス層」をはじめ、ブロッホの一連の術語——「拡大自然主義 (erweiterter Naturalismus)」⁴⁴「建築学的自然主義」「抒情詩的なもの (das Lyrische)」⁴⁵あるいは「晩年様式 (Altersstil)」⁴⁶——などには、現実の形相を突き抜けたその先にある「プラトンのイデー (Platonische Idee)」⁴⁷を見据え、捉えようとする共通項を見出せよう。「群集」もまた、ブロッホの小説に欠くことのできない因子であり、ブロッホの創作の中心部に深く関わり、いわば創作原理の跳躍板として機能していた。ブロッホの小説における「群集 (Masse)」という語が表象する可動領域は、決して人間の集団心理についての思想と切り離されている訳ではないが、そこを越境した広がりを見せている⁴⁸。

ブロッホが文学テキストで試みた「群集」表象は、普遍的科学の法則を求めるフロイトとは異なり、歴史哲学と形而上的性格が刻印される。『夢遊の人々』の救世軍の少女や『贖罪』第1エピソード「男たちの世界」では、モノで溢れた世界が即物主義的戯画的に描かれ、人間もまた「極めて人間とはかけ離れた集塊」のマリオネットの群れとして表象されていた。またブロッホが描く人間の集団としての「群集」は、概して黒っぽいアモルフな動性を欠いた一過性の現象に過ぎないという特徴を見出せるであろう。というのもそれらの作品では、「群集」と共に「指導者」は描かれていなかったからだ。ブロッホの『群集狂気論』では明確に述べられていたように、「指導者」が「群集」に動きを与えるのであり、指導者が不在の『夢遊の人々』や『未知量』における「群集」には動性が伴わないことも必然となる⁴⁹。

⁴³ 『魅了』のヴェチー像については以下の拙稿を参照。早川文人：H・ブロッホ『魅了』における代理人像と1930年代オーストリア、「ドイツ語文化圏研究」19号、2023年、1-25頁参照。

⁴⁴ Vgl. KW9/2, S. 105f.

⁴⁵ Vgl. KW10/1, S. 234f.

⁴⁶ Vgl. KW9/2, S. 228.

⁴⁷ Vgl. KW10/1, S. 46-52.

⁴⁸ ブロッホの『群集狂気論』は、自身が「歴史的人間学 (eine historische Anthropologie)」あるいは「人間学的歴史構造学 (eine anthropologische Strukturenlehre)」と呼ぶように集団心理学の理論書の枠組を大きく越え出たものになっている。Vgl. KW12, S. 103.

⁴⁹ 『ウェルギリウスの死』の「群集」表象においても「群集」と「指導者」の関係はもちろん成立する。

またブロッホの「群集」表象には、唸り声や叫び、あるいは歌声といった声を活用していたことも、その特徴として挙げられよう。これはブロッホが人間の集団の描写を極力避けていた点を鑑みれば、その存在を指し示すが不可視の音声は、まさに人格化されない諸知覚の塊あるいは獣性を露出させるのにも適したメディアであった。声に関して補足すれば、『贖罪』では、唸り声などは概して地上に留まる「群集」を、歌は個が名なき存在として「群集」と一になる状態を表象するのに用いられ、その使用法に峻別があった。合唱や歌というメディアを通して理念を共有するという考えは、公開書簡『街路』でも示されていた⁵⁰。

ブロッホの「群集」表象の特徴を一言でまとめてみるならば、そこにアナゴジカルな形而上的解釈を発現させる意図と、単数性と複数性を収斂させる *Masse* の語を媒介して、主体とモノとの自明とされていた関係性あるいは権力関係を不成立なものとして相対化して露わにした点に特徴があると言えよう。例えば、『夢遊の人々』の救世軍の少女や『贖罪』のエピローグの男性たち(=マリオネット)では、モノ(=ヒト)と人間との物象化した社会的関係性が批判的に捉えられていた。これは、特に1920~30年代の在即物主義の作品群における「群集」表象と比較検討をすることで、よりその特徴と性質が明らかになると思われるが今後の課題としたい。

『ウェルギリウスの死』では、モノを含む自他の関係性が立ち上がる前の原場面に帰趨させ、モノの描写すなわち認識となることを示し、ついにはモノとしての言葉の問題、モノ(=言葉)と人間の変容させ、両者の関係を同列に引き上げ、あるいは逆転させてしまうという問題圏まで浮上させている⁵¹。『ウェルギリウスの死』の文体レベルでの試みが時の問題を現出させ形而上世界を指し示すことによって、「群集」表象の多面体を実現したことは、ブロッホ美学の頂点に達したと評しても良いだろう。

ただしブロッホはそこに留まらず、集団心理のメカニズムの解明という課題を自らに課し、『魅了』のように集団とその指導者から浸潤される不確かな語り手を用意して、その達成を試みた。言い換えれば、『ウェルギリウスの死』の文体における統語作法から、『魅了』においては、傷痕と浸潤性という性格によって規定される語り手の語りを通して、「群集」へのアプローチが変更されているのだ。結果として、後者のプロジェクトは完成には至らず、『群集狂気論』のために『魅了』の改稿は——その構想は更新されてはいたもの

例えば、「指導者なく彷徨う畜群 (führerlos umherirrenden Herde)」(KW4, S. 343.) という箇所はその理論的反映を指摘できよう。

⁵⁰ この点について一言付け加えるならば、歌や合唱が共同体形成に効果的かつ有用だという考えは、古来からある。特に20世紀に入り、声のメディアは各党派団体でも積極的に活用されていた点も考慮に入れるべきであろう。

⁵¹ このような問題圏はホーフマンスタールの『手紙』(Ein Brief, 1902)で示されたモノとの遭遇体験の系譜に位置付けられよう。『ウェルギリウスの死』における三人称内的独白形式に委ねられた文体は、意識の反映という主観性の枠組の中に留まるものであり、その中で主客を逆転するようなモノとの新たな関係性を構築、表象しているかどうかは改めて議論される余地があろう。

の——最晩年まで滞っていた点を鑑みると、普遍的科学の法則として集団心理のメカニズムを、ブロッホが常に視野に置く形而上的世界に呼応した「群集」を一つの文学作品に落とし込もうとした点にそもそも齟齬があり、歪みが生じたとも言えよう。いずれにせよ両者とも完成の日の目を見なかったので、ブロッホにおいて集団心理の解明、あるいは「群集」の理解は、未解決の問いのまま残された。しかし、少なくとも『魅了』はフロイト的群集における「歪んだ癒し」の文学的受容のプロトタイプとして、新たな小説世界を予感させるものであったと評価できるのではないか。

* 本稿は JSPS 科研費 JP18K00473 および JP23K00438 の研究成果の一部である。

同期の詩学

マルティン・ケッセル『ブレッヒャー氏の失敗』における群集と集団性の表象

海老根 剛

1. はじめに

本論文の主題は、マルティン・ケッセルが1932年に発表した小説『ブレッヒャー氏の失敗』(*Herrn Brechers Fiasko*)にみられる群集および集団性の表象の考察を通して、新即物主義の都市小説における群集の主題を考える新たな視点を探ることである。

1920年代前半から1930年代初頭にかけて隆盛した新即物主義の小説については、その際立った特徴のひとつとして、複雑な内面を具えた個人(Individuum)の運命を描くのではなく、類型(Typus)として把握された登場人物の行動を分析的に叙述するという点がしばしば指摘される。新即物主義の時世小説(Zeitroman)では、一人の人物の運命をその心理も含めて首尾一貫して追跡し、物語ることは目指されておらず、登場人物の「人生のごく短い一部分だけ」が叙述される¹。しかも「そのさい登場人物たちは個人としてではなく、社会的類型として理解され、それら類型の生活状況や意識や運命は、ある社会集団にとって典型的なもの」として扱われる²。こうした登場人物の扱いは、ある特定の職業なり社会階層の全体を、その成員に共通する典型的特徴を具えた一人の人物によって代表させるという意味での類型化の手法とは異なっている。クラカウアーは、1930年に出版された『会社員』(*Die Angestellten*)において、同時代のベルリンに現れた会社員たちのうちに規範的類型(Normaltypus)を見だし、それを個人を規格化し画一化する社会の圧力の産物として論じた³。このクラカウアーの分析に従うなら、新即物主義の小説における登場人物の扱いは、単なる人物造形の一手法にとどまらず、眼前の社会的現実を分析するための方法であったとみなすことができる。

この観点に立つならば、新即物主義の小説は群集化した個人の生活を主題にしていると言えることができる。たとえば、新即物主義の小説における群集表象を群集心理学的観点から

¹ Sabina Becker: Neue Sachlichkeit im Roman. In: Dies. u. Christoph Weiß (Hrsg.): Neue Sachlichkeit im Roman. Neue Interpretationen zum Roman der Weimarer Republik. Stuttgart Weimar (J. B. Metzler) 1995, S. 12.

² Ebd.

³ Siegfried Kracauer: Die Angestellten. Aus dem neuesten Deutschland. In: Ders.: Werke Band 1, Frankfurt a. M. (Suhrkamp), 2006, S. 265. 以下では、原則として、タイトルをDAと略記し頁数を本文中に記載する。なおdie Angestelltenはしばしば「サラリーマン」と訳されてきたが、実際には男性だけでなく女性も数多く含まれるため、本論では「会社員」という訳語で統一する。

考察したレギーネ・ツェラーは、新即物主義の代表的な「会社員小説」(Angestelltenroman)の登場人物たちの特徴を、「群集 (Masse) を形成していながら、みずからはそのように感じていない」者たちだという点に見だし、会社員小説の中心的な主題を、大都市生活がもたらす群集化の圧力に抗して個人であろうとする主人公の挫折のうちに認めている⁴。またケッセルの『ブレッヒャー氏の失敗』を作品論的に考察したベルンハルト・シュピースも、いつでも交換可能な機能的存在——つまり群集——に過ぎないみずからの現実を否認する「会社員イデオロギー」の批判に、同作の主題があるとみなしている⁵。

他方、より近年の研究では、いま言及した先行研究をも含む従来の研究のアプローチを批判的に再検討する試みもなされている。20世紀初頭から1933年までの会社員をめぐる言説を詳細に検討し、会社員を主題とする小説と映画の歴史的展開を通覧したザビーネ・ビーブルは、会社員小説を論じた従来の研究がクラカウアーに代表される同時代の文化批判的な会社員分析を無批判に受け入れ、それを作品解釈の解説格子として用いてきたことを批判している。そこではクラカウアーらの文化批判的言説自体が属する歴史的な文脈が無視され、そうした言説によって提示された問題設定と価値づけの地平のなかでのみ解釈が積み重ねられてきた。その結果、それら同時代の言説とは異なる視点から作品を読み直す試みが妨げられてしまったのである⁶。ビーブルはまた、同様の理由から、当時の文化批判的言説と文学作品が同時代の会社員という存在の理解をめぐる競合関係にあったこともまた見逃されたと指摘している⁷。同じく「会社員小説」を新たな角度から読み直す試みとして、イネス・ラウファーの研究を挙げることができる。ラウファーは、会社員小説の登場人物たちが住む住居に注目し、「新しい居住」(Neues Wohnen)をめぐる当時の言説や実践に照らして登場人物たちの行動を分析することで、新即物主義の都市小説における登場人物の造形に新たな角度から分析を加えている。ラウファーによれば、それらの小説に描かれる1920年代の居住空間は、ベンヤミンが分析してみせたような19世紀の市民階級の室内とは異なり、内面性や親密性と結びついた定住の空間ではなかった。それは機能化された仮住まいの空間であり、流動的な大都市の生活と結びついた新しい主体性の構築の舞台として機能したという⁸。この読解に従うなら、新即物主義の小説は会社員という存在の理解において、彼らを群集とみなした文化批判的言説と実際に競合関係にあったことになる。

⁴ Regine Zeller: „Einer von Millionen Gleichen“. Masse und Individuum im Zeitroman der Weimarer Republik. Heidelberg (Universitätsverlag Winter) 2011, S. 159, S. 168.

⁵ Bernhard Spies: Die Angestellten, die Großstadt und einige „Interna des Bewußtseins“. Martin Kessels Roman „Herrn Brechers Fiasko“. In: Becker. u. Weiß (Hrsg.): Neue Sachlichkeit im Roman, S. 241.

⁶ Sabine Biebl: Betriebsgeräusch Normalität. Angestelltendiskurs und Gesellschaft um 1930. Berlin (Kadmos) 2013, S. 15-17.

⁷ Ebd., S. 18

⁸ Ines Lauffer: Poetik des Privatraums. Der architektonische Wohndiskurs in den Romanen der Neuen Sachlichkeit. Bielefeld (transcript) 2011, S. 20-22.

本論ではこうした比較的近年の研究の知見も参照しつつ、ケッセルの『ブレッヒャー氏の失敗』を考察する。最初にまず 1920 年代半ばに生じた主導的な群集表象の変容を確認し、次にクラカウアーの『会社員』を群集を論じた当時の言説の一部をなすものとして位置づける。そのうえで、ケッセルの小説の一場面に注目し、そこに見いだされる特異な集団性の表象を考察してみたい。

2. 1920 年代中期における群集表象の変容

新即物主義の都市文学に関して群集という主題を論じる場合、1920 年代中期のドイツ語圏で進行した群集をめぐる言説の変容——群集の主導的な表象の変化——を確認しておく必要がある。著者はすでに別の論文において、この変化を「革命的-忘我的群集」から「技術的-機能的群集」への移行として論じたことがある⁹。その要点を簡潔にまとめると、以下の通りである。ヴァイマル共和国時代の初期においては、ドイツ革命の日々に出現した群集の体験が群集をめぐる言説の根底にあり、文学作品やエッセイにおいても、デモや蜂起によって街頭や広場を埋め尽くし、ストライキによって工場の操業を中断する群集、つまりその行動によって社会秩序を揺さぶる存在としての群集が、主題化されることが多かった。そうした群集の体験は、自己と他者の差異を消し去り、諸個人を高次の集団へと統一する点で陶酔的な性格を具えていた。それに対して、1920 年代半ばになると、大都市文化とマスメディアの経験を背景として、まったく異なるタイプの群集のイメージが文学作品や社会分析において主題化されるようになる。それらの言説で提示されるのは、多数の他人たちからなる大都市生活を可能にする技術的な諸システム（公共交通、マスメディア、消費経済、文化産業など）と親和的な群集であり、技術的合理性によって特徴づけられる群集である。以下では、いくつか具体例を参照して、上記二つの群集表象の違いを示しておきたい。

1929 年に出版されたブローダー・クリスティアンゼンの小著『我らの時代の顔』(*Das Gesicht unserer Zeit*) は、新即物主義文学を論じる文献において、新即物主義についての同時代の考察としてしばしば参照される。この本でクリスティアンゼンは、主要な生活感情を表す 4 つの様式の変遷という観点から同時代の社会の動向を論じている。ここで言う 4 つの様式とは、(1) V (=Vergangenheit 過去) 様式、(2) G (=Gestern 昨日) 様式、(3) H (=Heute 今日) 様式、(4) M (=Morgen 明日) 様式を指しているが、クリスティアンゼンの議論の中心を占めるのは G 様式と H 様式の違いである。これは表現主義と新即物主義の違いに対応している。クリスティアンゼンは、それら二つの様式の違いを次のように要約する。

⁹ Takeshi Ebine: Der Wandel von Kollektivbildern in der Weimarer Republik. Eine Imaginationsgeschichte der Masse und ihre Revision. In: Yoshiyuki Muroi (Hrsg.): Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. München (Iudicium) 2021, S. 321-327.

G と H、表現主義と新即物主義は、主題と対主題のように正反対である。G は単なる約束であったが、H は能力と実績 (Leistung) を過度に強調する。G は現実と疎遠であったが、H は誇張のない (nüchtern) 具体的な現実を要求する。G は非合理的だったが、H は過度に合理的 (überraional) である。G はありとあらゆる深い問題の重みを担わされていたが、H はみずからを単純明快な (unproblematisch) ものとして提示する。G は大いに悲壮的 (pathetisch) だったが、偽物になりがちであった。H は悲壮さを欠いているが、徹底した本物性を要求する。G は出発 (Aufbruch) の混沌だったが、H は几帳面なまでに明快な秩序を保っている。G はありとあらゆる個人的なもの (das Persönliche) の特性を求めたが、H は非個人的な (unpersönlich) 同形性を評価する。G は超人を求めたが、H は群集人間 (Masse Mensch) を欲する。¹⁰

この一節でクリスティアンゼンは、新即物主義を特徴づける諸価値 (能力と実績、合理性、現実性、単純さ、本物性、秩序性、非個人性) の系列の最後に、それが求める人間像として「群集人間」を位置づけている。ここでクリスティアンゼンは、共和国中期以降の言説に特徴的な「技術的-機能的群集」のコンセプトを素描していると言ってよい。

いま引用した個所でクリスティアンゼンが新即物主義のスローガンのひとつとして *Masse Mensch* という言葉を掲げていることは、ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説の展開という観点からみると、非常に興味深い。というのも、この言葉は共和国初期に革命的群集を印象的な仕方で描き出した作品のタイトルを想起させずにはおかないからである。1919年にエルンスト・トラーが執筆した後期表現主義的戯曲『群集-人間』(*Masse-Mensch*) がそれである。この作品でトラーは、クリスティアンゼンが提示するのとはまったく異なる群集のイメージを描き出していた。

たとえば、トラーは『群集-人間』の第五景でヒロイックであると同時に不気味な群集の姿を描き出している。場面は大きなホールで、市民階級出身の女性活動家と「無名の者」(der Namenlose) と呼ばれる謎の人物が、群集の前であるべき革命の形をめぐる論争する。すでに第三景でも二人は論争しており、女性活動家がストライキを主張したのに対して、「無名の者」はそれでは不十分だと主張し、蜂起を求めたのだった。結局、群集は無名の者を支持し、叛乱を開始する。第五景では蜂起の失敗が明らかになり、労働者たちが軍隊によって殺戮されているという知らせが次々に届く。女性指導者は武力闘争をやめるように主張するが、「私が群集だ」と語る「無名の者」は「群集は生きねばならぬ」と主張し、あくまでも行動を貫徹するよう要求する。群集が無名の者の「生きねばならぬ」という言葉を復唱することで支持を表明したとき、ホールがいつの間にか敵に包囲されていることが明らかに

¹⁰ Broder Christiansen: *Das Gesicht unserer Zeit. Baden (Felsen) 1929*, S. 37-38.

なる。恐怖に襲われた群集は出口へ殺到するが、逃げのびる望みのないことがわかり、死の予感に静まり返る。このとき「死ぬのだ！」(Sterben!)というひとつの叫びがホールに響き渡る。すると誰かが「インターナショナル」を歌い始める。この歌声は、パニックに陥りかけていた労働者を革命的群集へと再統合する匿名の声として機能する。瞬く間に他の者たちもこの歌声に加わり、ホールは「インターナショナル」の大合唱に包まれるのである。ここで生じる陶酔は群集が革命の主体として立ち上がる瞬間を印づけるが、それはまた包圍する軍隊の銃撃によって死が訪れる瞬間でもある¹¹。この場面の群集の表現に特徴的なのは、群集が多数の匿名の声からなるひとつの声によって表象されることであり、そこでは個人を見分けることはもはや不可能である。個人は完全に群集に統合されている。加えて、この群集は悲壮であると同時に死に突き進む不合理的な衝動によっても突き動かされており、クリスティアンゼンの分類に従うなら、G様式を体現していると言えるだろう。

ヴァイマル共和国初期には、小説でも革命的群集が主題化された。たとえば、ヘルミニア・ツウア・ミュレンの1922年の長編小説『光』の一場面を取り上げてみよう。主人公の炭鉱労働者アンドレアスが解雇された後、同僚の労働者たちは居酒屋に集まり、やり場のない怒りを抱え、押し黙っている。すると、どこからともなくひとつの声が響く。ここでも匿名の声が、『群集-人間』の場合と同様に、群集形成の契機となる。

そのとき広間の片隅からひとつの言葉が放たれ、雷光を閃かせて着弾し、無力さと臆病さと悲しみを粉碎した。

その言葉はバリバリと音を立てて鋭く鳴り響きながら部屋に行き渡った。ストライキ！ もはや無防備な者たち、鈍い絶望にとらわれた者たちがそこに集まって座っているのではなかった。彼らの手は彼らの前で光り輝く武器を握り、それを離さなかった。

(略)

アンドレアス・メルツの驚きに満ちた眼は、再び奇跡を見たのだった。物の見方や性格や年齢の違いによって切り離されていた一人ひとりから、群集が生まれたのだ。解消することもバラバラにすることもできない一者、分割不能な奇妙な新しい元素(Element)が生まれたのである。¹²

ここでも革命的群集は、諸個人の差異と隔たりを一気に解消するラディカルな同質化によって成立するものとして描かれている。そして、その群集形成は、それまで搾取の客体だった労働者たちが主体化する契機として理解されている。ここには共和国初期の群集表象の

¹¹ Ernst Toller: Masse-Mensch. Ein Stück aus der sozialen Revolution des 20. Jahrhunderts. Potsdam (Gustav Kiepenheuer) 1928, S. 49-59.

¹² Hermynia Zur Mühlen: Licht. Konstanz (See-Verlag) 1922, S. 110. 強調引用者。

特徴をはっきり認めることができる¹³。

こうした革命的群集の表象に代わって、およそ 1924 年ごろを境として新しいタイプの群集表象が前景化し、主導的な役割を果たすようになる。先にこの新しい群集の表象を「技術的-機能的群集」として特徴づけたが、それはこの群集が大都市の技術的・機能的なシステムに媒介された存在として把握されるからである。当時の都市小説においてこうした群集の表象をもっとも鮮やかに提示してみせたのは、アルフレート・デーブリーンの『ベルリン・アレクサンダー広場』（1929 年）だった。たとえば、そこには次のような群集のイメージが見いだされる。

男たち、女たち、子供たちがいる。子供たちはたいてい女に手を引かれている。(略) 東へ向かう人々の顔は西、南そして北に向かう人々の顔とまったく違わない。彼らはおたがいの役割を交換する。そういうわけで、いま広場を横切ってアッシンガーに向かって歩いていく人々は、一時間後には空っぽになった〔閉店した〕ハーン・デパートのまえにいてもありうるのだし、同様にブルネン通りから来てヤノヴィツブリュッケに向かう人々は、反対方向から来る人々とまじり合う。(略) 彼らは、バスや市電のなかで席に座っている人々と同様に一様である (gleichmäßig)。乗り物の中の人々はみな異なる姿勢で腰かけている (略)。彼らの内部でなにが起こっているのか、誰にそれを突き止めることができるだろう。途方もなく巨大な一章だ。(略) 彼らのことは、ごく単純に、20 ペニヒ支払った私人 (Privatperson) として扱っておけばよいのだ。(略) そして彼らはいま、50 キロから 100 キロのあいだの重さのある身体を伴って、銘々の服を着て、鞆と荷物と鍵と帽子と入歯とヘルニア帯を携えて、アレクサンダー広場を横切っていく。(略) 彼らは異なる政治志向の新聞を読み、内耳によってバランスを保っている。(略) 彼らのなかには苦痛を感じている人もいれば感じていない人もいる、考えている人もいれば考えていない人もいる、幸せであったり幸せでなかったりする、幸せでも不幸せでもなかったりする。¹⁴

ここでは広場を行き交う多数の人々が、大都市の技術的・機能的システム（都市交通のシステム）との関係において、そのシステムの利用者としてのみ記述されている。ひとりとして名前によって他から区別される者はおらず、彼らの内面を表現するかも知れぬ表情も完全に消し去られている。彼らは交通の参加者という機能において一様であり、平準化され、匿

¹³ 革命的群集のより詳細な分析は次を参照のこと。Takeshi Ebine: Ekstasis. Zum Massendiskurs in der Weimarer Republik. In: Neue Beiträge zur Germanistik (Band 3), Japanische Gesellschaft für Germanistik, 2004, S. 164-182.

¹⁴ Alfred Döblin: Berlin Alexanderplatz. Die Geschichte vom Franz Biberkopf. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1965, S. 168-169. 強調は引用者による。

名的な群集を形成している。しかし、興味深いことに、たとえ群集化しているとしても、彼らのあいだの差異は消滅していない。共和国初期の革命的群集のように、諸個人のあいだの差異と隔たりをラディカルに同質化することで高次の集合的主体が形成されるわけではないのである。彼らはそれぞれ異なる方向に異なるスピードで移動し、それぞれ異なる服装を身にまとい、異なる身体的特徴を持ち、異なる新聞を読み、異なる苦痛と幸福感を感じている。たしかにそうした差異は存在するのだが、ここではそれがいかなる違いも生み出さない。技術的-機能的群集の特徴は、ラディカルな同質化ではなく、そうした差異の陳腐化にある¹⁵。技術的-機能的群集は、デモや蜂起によって都市の交通を遮断する革命的群集とは対照的に、交通の秩序を攪乱することはない。たとえそうした群集が雑然とした印象を与えることがあるとしても、その印象は異なる目的地に向かう多数の人間を統御する合理的・技術的秩序の効果であるにすぎない。

3. 〈交通〉というトポスと視点の問題

すでに指摘したように、いま参照したデーブリーンの小説の一節では、都市の公共空間の描写が交通のシステムの記述に取って代わられている。大都市で生活する人々の振舞いは、人々の動きを秩序づける機能的なシステムとの関係において把握されるのである。このような現実への眼差しは、デーブリーンにのみ見られるものではなかった。ヘルムート・レーテーンがかつて指摘したように、新即物主義の隆盛期の文学的・思想的言説では、「交通」(Verkehr) が社会的現実の「知覚モデル」となったのだ¹⁶。すなわち、大都市生活、ひいては「社会的なもの」の領野の全体が、狭義の交通システム(交通機関)をそのモデルとするような、機能的かつ合理的なシステムとして知覚され、記述されることになったのである。レーテーンの示唆を受けて「交通」というトポスの歴史的展開を詳細にあとづけたヨハネス・ロスコテーンは、ヴァイマル共和国時代の中期には、全般的な加速とモビリティの上昇によって特徴づけられる日常生活様式の変容を考察するにあたって、「交通という技術的-社会的領野が新即物主義の主導的言説になった」と指摘している¹⁷。「文化理論家と文学者たちは近代の観察にあたって、大都市の流通=循環(Zirkulation)という観察の雛形を利用する。自動車、バス、市電の流れ、地下の人員輸送、エレベーターやエスカレーターによる垂直的な空間の踏破のうちに、近代という時代はその姿を現わすのである」¹⁸。当時の知識人や

¹⁵ これはスローターダイクが、メディア化した群集の特徴として指摘した性質でもある。Vgl. Peter Sloterdijk: Die Verachtung der Massen. Versuch über Kulturkämpfe in der modernen Gesellschaft. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 2000, S. 17.

¹⁶ Helmut Lethen: Verhaltenslehren der Kälte. Lebensversuche zwischen den Kriegen. Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 1994, S. 44.

¹⁷ Johannes Roskoth: Verkehr. Zu einer poetischen Theorie der Moderne. München (Wilhelm Fink) 2003, S. 110.

¹⁸ Ebd.

作家たちは、「交通」の領野のうちに、近代社会全体を特徴づける趨勢を読み取ったのだ。

後に確認するように、マルティン・ケッセルの『ブレッヒャー氏の失敗』でも、冒頭の場面で登場人物たちはまず、大都市を秩序づける交通のシステムの参加者として導入される。ケッセルの場合にも、社会的現実の知覚モデルとして「交通」が利用されており、会社員たちはその視点から分析されている。そして、交通のシステムは、それを特徴づける流通＝循環、合理化、機能化、平準化といった点で、Betrieb（企業体、機械の作動、活発な動きなどを意味する）と結びつく。Betrieb は Verkehr とならんで、会社員の分析で重要な役割を果たしたトポスだが、交通のシステムを記述するさいにも用いられた。たとえば、Betrieb/Betriebsamkeit という観点から新即物主義の文学を考察したゼバスティアン・マルクスは、ポツダム広場の忙しい交通が、観察者には「見通しがたい、無意味な騒がしさ (Betrieb)」と感じられたことを指摘している¹⁹。クラカウアーは会社員を大都市、企業体、文化産業の三点から観察したが、そこでは Verkehr と Betrieb の両方のトポスが重要な役割を果たしている。クラカウアーがその考察で試みたのも、近代という時代の趨勢の分析であった²⁰。クラカウアーのような観察者にとって、会社員はティラーガールズや大都市の交差点と同様に、そこに当時の社会構造を読み取ることのできる特権的な事象だったのである。

ヴァイマル共和国中期の言説空間において「交通」というトポスが隆盛した背景として、レーテーンは、このトポスによって示唆される合理的・機能的システムが、戦争と革命とテロに揺さぶられたヴァイマル共和国初期の社会的・文化的危機に対する処方箋として機能した可能性を指摘している²¹。交通のシステムは、個人の信条や社会的地位を一切問うことなく、純粹に機能的な観点から多数の人間のあいだの結びつきを秩序づけるように思われたがゆえに、知識人にとって魅力的なモデルとなったというのである。たしかにこの仮説には一定の説得力があるが、それでも同時代の観察者が依拠した「交通」の理解を無批判にヴァイマル共和国時代の文学作品の分析に援用することには慎重でなければならぬだろう。というのも、その場合には、同時代の観察者の言説が属していた歴史的な脈が見落されるからである。したがって、ここでは「交通」というトポスを別の角度から捉え直してみたい。

そのさい最初に確認しておかねばならないのは、新即物主義の文学が展開したヴァイマル共和国の 1920 年代が、ダイナミックな都市化がほぼ完了した時期に当たっているという事実である²²。ジンメルが 1903 年に分析してみせたような、大都市生活が人びとの精神生活に及ぼす衝撃は、1920 年代中葉のベルリンではすでに消化されていた。また未来派が各

¹⁹ Sebastian Marx: Betriebsamkeit als Literatur. Prosa der Weimarer Republik zwischen Massenpresse und Buch. Bielefeld (Aisthesis) 2009, S. 52. 他方、クラカウアーは、交通の比喩を用いて、職業紹介所を「無数の線路のある操車場」と呼んだ。Kracauer: Die Angestellten, S. 263.

²⁰ Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 10.

²¹ Lethen: Verhaltenslehren der Kälte, S. 44.

²² Vgl. Lauffer: Poetik des Privattraums, S. 27.

種のマニフェストで賛美したような近代技術がもたらす速度とモビリティの経験も、そこではすでに日常的なものとなっていた。当時の言説において「交通」というトポスが台頭したという事実は、なによりもまず、そうした状況の変化を反映している。「20年代の進展のなかで、未来派的・表現主義的な運動の身ぶりは市民的な (zivil) 交通のトポスに転換した。同時代人の行動のポテンシャルは、もはや戦場において実現されるのではなく、日常的な循環＝流通 (Zirkulation) の市民的な領域で実現されたのである」²³。ロスコテンが指摘する通り、この時期に「ドイツ社会のかなりの部分の生活感情は、はじめて前衛たちの様式的な衝動と調和した」のだった²⁴。ヴァイマル共和国中期は、速度とモビリティの経験の日常化、通俗化、大衆化の印のもとにある。

したがって、新即物主義の都市小説においては、戦場でしか体験し得ないような速度とモビリティの限界体験が文学的インスピレーションになることはなかった。それらの小説の関心の中心を占めたのは、都市生活者の日常的な経験だった。こうした関心の変化に対応して、新即物主義の都市小説では、街頭だけでなく、登場人物たちの居住空間もまた重要な役割を果たすようになる。ただしこの居住空間は、すでに述べたように、19世紀の市民階級の室内、家族的な親密さと結びついた定住の空間とは異なっていた。それはむしろ大都市生活のモビリティに対応した独身者の暫定的な滞在地であった。ラウファーは、従来の新即物主義文学の研究では「あたかも1920年代の主人公たちがいまだに世紀転換期の遊歩者のような人物であるかのように、すなわち近代の首都によって過剰な要求に曝され、あるいはそれに魅了された人物であるかのように」考察されていると批判し、それらの文学作品に描かれた新しいタイプの居住空間とそこで登場人物たちが試みる流動的なアイデンティティの構築に注意を促している²⁵。「表現主義者と未来派が首都の躍動するダイナミズムに魅了されていたのに対して、新即物主義の作家たちは、はるかに目立たない私的空間を彼らの関心の中心に据えた」のである²⁶。彼らの小説の登場人物たちは、都市生活を統御する交通のシステムのうちに、強制力だけでなく、モビリティの向上がもたらす自由をも感じ取っていた。

一方、「交通」のトポスにもとづいて同時代の大都市を文化批判的に観察した知識人や批評家は、そうした小説の登場人物たちとは異なる視点から交通のシステムを観察した。そしてそのさい、彼らはみずからの観察を歴史哲学的な解釈と結びつけた。小説家の視点とそうした観察者の視点の違いは、交通に参加する者の視点とそれを外部から俯瞰する者の視点の違いである。小説家が物語を語るなかで交通に参加する登場人物の視点を導入するのにたいして、知識人や批評家は局外の観察者の座を占める。この違いが持つ意味を、ロスコテ

²³ Roskothen: Verkehr., S. 110.

²⁴ Ebd., S. 127.

²⁵ Lauffer: Poetik des Privatraums, S. 19.

²⁶ Ebd., S.20.

ーンは円形交差点を例にとって、次のように説明している。

交通の参加者の立場から観察すると、円形交差点はダイナミズム、決断、行動と反応を表している。俯瞰的視点に立つ観察者（略）から見ると、パノラマ的に異化された眼差しが生じる。その眼差しは円形交差点に何よりもまず、つねに同じであり続ける、決して静止することのない循環を見るのである。²⁷

局外から俯瞰する観察者は、交通の参加者とは異なり、交通のシステムを目的を欠いた循環のシステムとして解釈する。そして、この意味を欠いた空虚な合目的性の形式は、しばしば資本主義に特有の自己目的化した道具的理性 (Ratio) の現れとして解釈された。たとえばクラカウアーは、こうした Ratio の作用を会社員が働く企業体 (Betrieb) だけでなく、彼らを楽しませる文化産業の産物にも見だし、そこに会社員の精神的故郷喪失 (geistige Obdachlosigkeit) を診断している (DA288)。こうした「ラディカルな」言説とは異なり、新即物主義の都市小説は、登場人物の視点を導入することで、局外者の視点から逸脱する契機を含み込むことになる。それゆえ、それらの小説を考察するさいには、局外の観察者による「交通」のトポスの解釈を作品の解読格子として利用するのではなく、そうした解釈との相互作用やそれからの偏差に注意を払うことが重要になる。

ヴァイマル共和国時代の会社員に関する言説を検討したビーブルは、クラカウアーに代表される文化批判的な会社員の考察が、新しい現実を代表する存在として会社員に注目しながらも、それを旧来のなじみのある現実構成の領域に引き戻して分析することしかしなかったと指摘している²⁸。すなわち、会社員という新しい存在は、それが体现する可能性においてではなく、そこに見いだされる欠如 (人格の欠落、個性の喪失、主体性の欠如など) において考察されたのである。会社員小説を新たな角度から読み直すには、そうした言説が提示する会社員への眼差しを再検討する必要がある。同様のことは、交通のトポスの文化批判的解釈にも当てはまる。たとえ「交通」というトポスの重要性に間違いがないとしても、それを解釈する視点は複数存在しうるのである。ここでは会社員小説を読み直すための準備作業として、クラカウアーの『会社員』を群集の言説という観点から簡潔に考察してみたい。

4. 群集の言説としての『会社員』(クラカウアー)

クラカウアーの著作『会社員』は、今日まで新即物主義の会社員小説の解釈に大きな影響を与えている。ここでは『会社員』でなされる議論の歴史的な脈を明らかにするために、そ

²⁷ Roskothen: Verkehr, S. 129 (Anm. 332).

²⁸ Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 12.

れが同時代の群集の言説とのあいだに持っている結びつきに注目してみたい。じっさい、この観点から読み直すとき、『会社員』には、同時代の群集をめぐる言説に特徴的な要素が多数見いだされるのである。ここでは6つの点に絞って簡潔に考察してみたい。

最初にまず基本的な確認であるが、クラカウアーは同書のなかで「会社員」(die Angestellten)という言葉をつたえ、Masseという言葉と一緒に用いている。Angestelltenmassen²⁹や Masse(n) der Angestellten³⁰という言い回しが用いられるだけでなく、Masseという単語で die Angestelltenを指示する用例が見いだされる³¹。こうした用例からも見てとれるように、クラカウアーにとって会社員が群集 (Masse) であることは自明であった。

次に注目に値するのは、『会社員』が古典的群集心理学と同様の図式に従って考察対象を導入していることである。ル・ボンにとって、群集は西欧文明が生み出した内なる他者だった。それはすでに社会的現実は無視できぬ影響を及ぼしているながらも、いまだ知識人によって十分に解明されていない未知の存在だった³²。この他者性ゆえに、ル・ボンの群集心理学では、群集はヨーロッパ人にとっての「未開人」に類似した存在として位置づけられた³³。クラカウアーの議論では、会社員が直接に未開人に喩えられることはないものの、未開人と同様の他者性を帯びた存在として議論に導入される。『会社員』の冒頭でクラカウアーは次のように書いている。

数十万人の会社員が、日々、ベルリンの街頭に溢れている。しかし彼らの生活は、会社員たちが映画で見て感嘆する未開の部族の生活よりも知られていない。(DA218)

この個所では、群集としての会社員が明確に未開の部族と比較可能な存在として位置づけられている。クラカウアー自身と彼の本を読む知的な読者層にとって、どちらの存在も程度の差こそあれ、未知であり、他者であった。こうした意味関連の設定が偶然でないことは、同様の発言が別の個所でも繰り返されていることから明らかである。クラカウアーは、みずからの探求をアフリカへの調査旅行になぞらえ、「この小さな調査旅行はひょっとしたらアフリカ旅行の映画よりも冒険に富んでいるかも知れない」(DA221)と述べる。クラカウアーの会社員論は、ヴァイマル共和国時代に生み出された群集をめぐる言説の多くと同様に、群集心理学が設定した思考の枠組みの影響下にある。

『会社員』と同時代の群集の言説とのあいだの第三の接点として、いま引用した個所でクラカウアーが、ベルリンの会社員たちを映画の観客として提示している点に注目してみた

²⁹ Kracauer: Die Angestellten, S. 219, S. 221, S.246.

³⁰ Ebd., S. 243, S. 288.

³¹ Ebd., S. 265, S. 291.

³² Gustave Le Bon: Psychologie der Massen. Übersetzt von Rudolf Marx, Stuttgart (Kröner) 1982, S. 7.

³³ Ebd., S. 19.

い。大都市の街頭、会社員たちが働く企業体、そして彼らを主要なターゲットとする文化産業という三者が形作る布置のなかに会社員を位置づけるとき、クラカウアーの考察は、すでに述べた 1920 年代中期以降の技術的-機能的群集のパラダイムに従っている。というのも、大都市の交通 (Verkehr)、企業体 (Betrieb)、文化産業 (Kulturindustrie) に共通するのは、合理化と平準化の力学だからである。そこでは諸個人は合理化されたシステムのなかで果たす機能に還元され、平準化される。この合理化と平準化の作用のもとで、会社員はそれぞれの機能に合わせた規範的類型へと規格化されることになる。以下の一節では、そうした機能的・合理的システムによって媒介された群集として、会社員が定義されている。

会社員たちは、今日、群集 (Masse) として暮らしている。この群集の存在はとりわけベルリンやその他の大都市において、ますます単一の特色を帯びてきている。一様な職業的状况と団体協約がその存在の様式を条件づけているが、それに加えて、その存在は (略) 強力なイデオロギー的諸力による規格化の影響も蒙っている。これらすべての強制力が女性販売員、既製服製作者、女性速記タイピスト等々の規範的類型を産み出していることは明白である。そうした規範的類型は、雑誌や映画館で表象されると同時に培養される。それらの類型は一般の意識にまで入り込んでおり、その意識がそれら類型に従って新しい会社員の階層の全体像を形作っているのである。(DA265)

クラカウアーが指摘する規範的類型は、抽象化された統計的モデルではなく、社会的なプロセスの現実的所産であった。それは会社員たちの労働条件 (いつでも交換可能な機能的存在への還元) とメディア化された表象、およびそうした表象を利用する消費経済の複合的な作用の産物として記述できる。「規範的類型は、それに働きかける経済的・社会的諸力の交点に成立するが、それが類型として構築され同定可能なものとなるには、メディアによる映像化と再生産 (複製) を必要とする」³⁴のである。クラカウアーは「品行方正な薄紅色の肌」(moralisch-rosa Hautfarbe) を追求する会社員たちにみられる外見や身ぶりの規格化の背後に、交換可能な存在でしかない者の不安を読み取っているが (DA230)、規範的類型こそ、クラカウアーにとって資本主義的な理性 (Ratio) の作用を証拠立てる事象であった。とはいえ、ここでクラカウアーの念頭にある会社員の規格化は、フリッツ・ラングの『メトロポリス』(1927 年) に描かれる労働者のような画一性——あらゆる差異の消滅——を意味してはいない。ここで問題になっているのは差異の陳腐化であり、クラカウアーは、表層的な差異の戯れの背後で進行する規格化のメカニズムを指摘しているのである。

会社員たちを規範的類型へ規格化された存在とみなすクラカウアーは、彼らにたいして、自由に思考し行動する能力を持つ個人——主権的主体——のステータスを認めていない。

³⁴ Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 126.

この点でもクラカウアーの会社員論は、群集の言説の思考の枠組みに従っている。クラカウアーは、会社員たちに、みずからの置かれた状況を批判的に思考し、その状況を主体的に打破する能力があるとはみなしていない。序文においてすでに、クラカウアーは会社員を「自分自身について話すのが困難な」(DA214)存在として特徴づけているが、本論の冒頭でも「彼ら〔会社員〕はみずからの置かれた状況についてまったく意識を欠いている」(DA218)と断言している。加えて、会社員の採用に利用される適性検査を論じた章では、そうした検査が掲げるお題目とは裏腹に、会社員たちの仕事が「人格」(Persönlichkeit)などまったく必要とせず、彼らを人格として扱ってもいけないことが指摘される(DA225)。人格の欠如もまた群集化した個人の特徴としてしばしば言及される論点である。さらに批判的思考の欠如については、若い会社員たちが市民階級の生活様式の影響を無批判に受け入れていることを指摘しながら、「多くの者は何も知らずに(unwissend)流されて、本来自分がまったくそこに属していないことに気づかぬまま参加している」(DA268)と述べられている。

したがって、クラカウアーにとって、会社員の現実を認識するのは、会社員自身ではなく知識人の役目であり、彼らの状況を変えるのも——後に確認するように——会社員自身ではなく指導的階層の任務であった。ビーブルが指摘するとおり、この点でクラカウアーの探求は、マルクスの企てとは異なっている。

会社員たちはクラカウアーの社会分析の客体であり、彼らはクラカウアーが行う啓蒙作業の主体ではない。この点にマルクスの企てとの本質的な違いがある。(略)マルクスがプロレタリアートに向かって(略)、彼ら自身の状況とそれと結びついた歴史の主体としての役割を意識化させようとしたのにたいして、クラカウアーは明らかに会社員たちに「ついて」語っており、彼らに「向かって」語ってはいない。クラカウアーの分析の宛先は知的読者層なのである。³⁵

じっさいクラカウアーにとって、会社員はどこまでも客体的な存在だった。これが『会社員』と群集の言説の5つ目の接点である。クラカウアーは、会社員たちがその「精神的故郷喪失」ゆえに、容易にイデオロギー的諸力による操作の客体になることを繰り返し指摘している。ヒット曲が女性会社員に及ぼす影響力を述べた個所では、「彼女がヒット曲を知っているのではなく、ヒット曲が彼女を知っているのであり、彼女を手中に収め、優しく打ち負かすのである。彼女は完全な麻痺状態に取り残される」(DA268)と述べられている。また従業員をあいだに共同体的な感情を醸成するために、企業がスポーツを活用していることを論じた個所では、そうした試みの意図が「群集精神(Massenseele)を利用する」(DA274)ことにあると指摘される。あるいはまた、会社員に対して上流階級の顧客が及ぼす影響力を述

³⁵ Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 116.

べるクラカウアーの記述は、群集の言説でしばしば援用される「暗示」(Suggestion)や「伝染」(Ansteckung)の効果を連想させる(DA291)。さらに映画が会社員に及ぼす効果を記述するさいには、群集心理学が指導者による群集の操作を説明するさいの定番である「催眠術」の比喩が動員される。「映画産業によって提供される産物のほとんどすべて」は、「社会の見せかけの高みの持つ模造の輝きによって観衆(Menge)を麻痺させる」のであり、「催眠術師は光り輝く物体で被験者を眠り込ませるのである」(DA295)。

群集の言説においては、群集の客体性は指導者の必要性を正当化する機能を果たしている。クラカウアーの会社員論では、個人としての指導者の問題が論じられることはないが、指導(Führung)の必要性は論じられている。これが『会社員』と群集の言説を結ぶ最後の接点である。クラカウアーの考えでは、会社員の現状は、彼らを導くべき支配階層がその責任を果たせなかったことの結果である。会社員たちは、本来彼らが求めていた指導を得ることができなかったがために、混乱に陥ったのだとクラカウアーは指摘する。

なぜなら、従属的な者たちの生活は、そこに課されている強制への十分な根拠づけを要求するのであり、支配層が正しい概念を欠いていればいるほど、彼らの生活はますます逆さまなものにならねばならないのだ。上層の沈黙が下層の混乱を引き起こすのである。(DA298)

クラカウアーはヴァイマル共和国の新しい支配層(企業家たち)に対して同情的である。彼らは指導者層としてその役割を果たす準備がまだできていないときに、任務を引き受けることになったのだ。戦後の時代の経過のなかで、彼ら〔企業家たち〕は変化した社会的・経済的状况と折り合いをつけねばならなかったが、消滅したかつての上流階級が残した空白を埋めるという要求も課されたのだ。ただ事業を経営するのではなく指導するという任務が、一夜のうちに生じたのだ(DA303)。この新しい支配層は「みずからの権力の利害に従うと同時にそれに抗してみずからの立場を世界観をもって基礎づける」(DA304)ことができなかった。その結果、「会社員の日常がますます犠牲となった」のである(Ebd.)。クラカウアーは『会社員』の最後の章で会社員の組合が取り組む文化運動を論じているが、そこでは組合が依拠する文化の概念が批判されており、会社員の自己組織化の可能性に期待が表明されていない。クラカウアーの議論では、会社員は犠牲者であり、客体のままなのである。

以上、6つの観点からクラカウアーの『会社員』における議論と群集をめぐる言説との接点を確認してきた。この考察から明らかとなり、クラカウアーの会社員論は同時代の群集の言説の文脈のうちに位置づけられる。新即物主義の都市小説を『会社員』の提示した観点から読むことは、それを当時支配的だった群集をめぐる文化批判的言説の枠内で考察する

ことにほかならない³⁶。

5. マルティン・ケッセル『ブレッヒャー氏の失敗』に描かれる同期する身体

最後に以上の考察をふまえて、新即物主義の都市小説であり、また代表的な会社員小説のひとつでもあるマルティン・ケッセルの『ブレッヒャー氏の失敗』に描かれた群集と集団性の表象を簡潔に分析してみたい。そのさい、ここでは新たな角度から新即物主義の都市小説に現れる群集表象——あるいはその一員である会社員の人物造形——を検討するための観点として「同期」の概念を導入する。

『ブレッヒャー氏の失敗』は1932年に出版されたが、1929年の経済危機後に台頭した会社員小説というジャンルに属する作品である³⁷。ケッセルはこの長編小説の執筆に1923年から取り組んでおり、当初予定されていたタイトルは『女性事務員たち』(Kontoristinnen)だった³⁸。じっさい、この作品では、ブレッヒャーという男性会社員だけを主人公として物語が展開するのではなく、複数の女性会社員たちの物語もまた語られる。本作を詳細に分析したビーブルによれば、『ブレッヒャー氏の失敗』は、ヴァイマル共和国時代の会社員をめぐる言説を総括する作品である。そこではこの言説を特徴づける基本図式——社会分析の題材としての会社員、近代の生の条件を体現する存在としての会社員、無力な存在としての会社員の周縁化、社会を全体主義的に組織する原理としての企業体——が取り上げられ、結び合わされているという³⁹。ただし、この小説に描かれる会社員を一方的に周縁化された無力な存在とみる解釈に対しては、異なる読解があり得ることはすでに述べた通りである。

本書は各部10章からなる3部構成の大作で、初版本では720頁のボリュームがある。物語の舞台は、はっきり時期は特定されていないものの1930年頃のベルリンで、主要な登場人物は全員、商品売買・出版・広告などを手がける大企業 Die Universale-Vermittlungs-Aktiengesellschaft (略称Uvag)の宣伝部で働く社員たちである。すでに述べたように、この小説では複数の登場人物のエピソードを織り交ぜて物語が進行するが、中心的な位置を占めるのは男性社員マックス・ブレッヒャーと彼の大学時代からの同僚であるドクター・ガイスト、さらにブレッヒャーの発言につねに異を唱える女性社員グドゥラ・エフテン、および新入りの女性社員ムキ・シェップスの4人である。物語を大雑把に要約すると、第一部ではUvagのオフィスで社員たちが交わす会話を通して職場の人間関係が描かれ、第二部では主要な登場人物の家族が登場して労働と私生活の錯綜が語られる。そして第三部ではUvagでスト

³⁶ 次の議論も参照のこと。Sabina Becker: Experiment Weimar. Eine Kulturgeschichte Deutschland 1918-1933. Darmstadt (wbg Academic), 2018. S.78-94.

³⁷ Vgl. Becker: Neue Sachlichkeit im Roman, S. 17.

³⁸ Vgl. Lauffer: Poetik des Privatraums, S. 266.

³⁹ Biebl: Betriebsgeräusch Normalität, S. 243.

ライキの動きが発生し、ある事件がきっかけでブレッヒャーが解雇されることで、彼の運命とオフィスの人間関係が激変していく様子が描かれていく。本論では、第1部第1章と第3部第8章で描かれる場面を取り上げて考察する。

本書の冒頭に描かれる場面は、この小説がヴァイマル共和国中期以降に成立した多くの都市小説と同様に、大都市を交通の機能的システムとして把握し、そこに参画する人びとを技術的-機能的群集として描くことを明瞭に示している。小説はベルリン・フリードリヒシュタット地区の街頭の次のような描写から始まる。

毎日、特にオフィスが閉まるころには、中心部、すなわちベルリンの基礎に震動が走る。まるでなにか想定外のことが起こってでもいるかのように。あらゆるものが移動している。朝早く定刻に自分の会社の建物に到着した人びとは、いま再び——人間を単なる労働力に格下げし、その最良の部分を利用した消化のプロセスの後で——街頭に放たれ、私的な運命に委ねられる。ひとつの組織が解放すると、別の組織が受け入れる。労働力から乗客や歩行者が生まれ、彼らに対して映画館やレストランが門戸を開く。そしてそれぞれの段階がその対価を要求する。

ある場所で棒が空に向かって突き立てられ——停留所とも呼ばれる——たり、別の場所で地面の穴が地下鉄に通じていたり、演壇——プラットフォームとも呼ばれる——ができていたりすると、ただちにそこで結晶化が起こる。人びとが集まる。急ぎ足の様々に異なる種類の通行人たち、しかし彼らはまるで旗の回りに集まった最後の団体構成員でもあるかのように真剣な顔つきをしている。⁴⁰

ここではベルリンの中心部の情景が交通のシステムという観点から把握されている。夕刻、会社から退社する人びとの姿が描かれているが、興味深いのは、それがひとつの機能連関から別の機能連関への移行として記述されていることである。昼間、労働力の機能を果たしていた人々は、通行人や乗客という機能的存在へ移行し、さらに映画館やレストランで消費者という機能を担うことになる。企業体、交通、文化産業は、都市空間のなかで互いに接続されたシステムであり、それらの総体が都市生活を支えるより大きな機能連関——交通のシステム——を構成しているのである。ここには新即物主義の都市小説を特徴づける交通というトポスが典型的な形で現れていると言ってよい。

群集もまたこうした交通のシステムに媒介された存在として描かれている。街頭に行く人びとは交通の結節点（停留所、地下鉄の入り口、駅のホーム）で結晶化する。それはシステムのなかで拡散している人びとがはっきりと群集として可視化される局面である。そのさ

⁴⁰ Martin Kessel: Herrn Brechers Fiasko. Stuttgart Berlin (Deutsche Verlags-Anstalt) 1932, S. 11. 以下ではタイトルを BF と略記し頁数を本文中に記載する。

語り手は、これら群集を構成する人びとを、差異の消滅した塊としては描いていない。「さまざまに異なる種類の通行人」に言及することで、差異の存在を指摘しているからである。しかし、それらの差異は機能的存在としての彼ら一人ひとりに何らの違いも生み出さない。差異が陳腐化しているのである。ここに描かれた群集は、私たちが技術的-機能的群集と呼んだものにほかならない。

こうしたベルリンの都市空間の描写に続いて小説の登場人物が導入されるが、彼らもまた冒頭に描かれた群集を構成する会社員たちのひとりとして提示される。会社の入り口に立つ二人の人物——ブレッヒャーと同僚のドクター・ガイスト——について、語り手は次のように述べる。

紳士風の強盗のように他人に思われたなら、それがもっとも彼らの意にかなっていただろう。しかし彼らはただの二人の平凡な会社員——宣伝部社員——にすぎないので、彼らはそれで満足する。(BF16)

彼らはフリードリヒ通りを歩き始める。このとき語り手は、さきほど語ったのと同じ機能連関の移行——労働力から歩行者への変容——が彼らのもとでも生じたことを読者に伝える。「街頭に出るや、ほとんど気づかれることのない劇が繰り返された。二人のごく平均的な給料を得ている会社員が、街歩きする男性に変身したのである」(BF17)。二人は会話しながら通りを下り、ライプツィヒ通りの角を曲がって、ポツダム広場へ向かう。特に明確な目的地があるわけではない、毎週土曜日の勤務後に繰り返される歩行を、語り手は次のように描写する。

彼らはライプツィヒ通りに沿って、恋人同士のように腕を組んで歩いていたが、乗客で一杯の電車とバスが傍らを轟音を立てて走り去り、車列をなしていた。それを後方から眺めると、独特の活気をもたらず楽しみが感じられた。(BF24)

彼らの歩みは都市の交通の流れの中にあり、彼らもその一部であるのだが、不意にその流れを観察して、そこに展開する運動のダイナミズムを楽しむこともある。しかしそんな時も、二人の会社員=通行人の眼差しは、クラカウアーのような批判的知識人が交通に向ける俯瞰的眼差しとは異なっている。二人は最終的にポツダム広場にたどり着き、結局はいつもの通り、カフェに落ち着くことになる。するとカフェの窓越しに、ビルの屋上で瞬く Uvag のネオンサインが見えるのだった。

こうした新即物主義の都市小説の登場人物たちを分析するさい、しばしば社会的類型という観点が強調されることはすでに指摘した通りである。それと並んでもうひとつの影響力

のある分析アプローチは、アメリカの社会学者デイヴィッド・リースマンが『孤独な群集』（1950年）で提案した社会的性格の一類型——「レーダー型」（他人指向型）——を新即物主義文学の登場人物の解釈に援用することである。これはヘルムート・レーテーンが1994年の著作『クールネスの行動学』（*Verhaltenslehre der Kälte*）で試みて以来、多くの後続の研究で採用されているアプローチである⁴¹。レーダー型の人物とは、自己のうちに内面化された価値規範に従うのではなく、つねに他人や周囲の環境（マスメディアも含む）から発せられるシグナルに注意を払い、それに合わせてみずからの行動を調整していく人物を指す。レーテーンがレーダー型という社会的性格を新即物主義文学の研究に導入したのは、そこに描かれる大都市生活のモビリティに順応した登場人物たちを「慣れ親しんだ歴史哲学的枠組みと文化批判的ルサンチマンから切り離して」⁴²読み直すためだった。この類型によって、レーテーンは「新即物主義の時代に構想され、自律（Autonomie）の可能性を与えられた人物」⁴³に光を当てようとした。その限りにおいて、レーテーンの考察は、新即物主義小説の登場人物のうちに単なる客体的存在ではなく、主体化の可能性を具えた存在を見いだす試みであったとすることができる⁴⁴。しかしながら、実際の作品分析において、レーダー型の概念を用いて登場人物に具わる自律の可能性を考察することには困難が伴う。というのも、この概念には行動主義的な図式（刺激反応図式）との親縁性が拭いがたく付随しているからである。そこで本論では、このレーダー型に代わる観点として「同期」の概念を導入して、新即物主義の小説に描かれた登場人物たちの行動を考察してみたい。

本論が参照する「同期」（*Synchronisierung*）の概念は、元来、群れの振舞いの研究に由来する。それらの研究において、同期とは、多数の個体間のローカルな関係において生じる振舞いの変化が、外的環境からの刺激に対応する群れ全体の振舞いの変化を生み出すメカニズムを指す。その意味で、同期とは単なる同時性ではなく、同時性を生み出すプロセスである。個々の個体間で生じる動きの変化は非同期的だが、それらの動きが特定の仕方で連鎖することで、中枢的な統御も階層的な意思決定もなしに、群れ全体としては同期的な振舞い（たとえば方向を急に变えるなど）が生み出される。ゼバスティアン・フェールケンは、同期のプロセスを以下のように説明している。

相互の連関を欠いた単に多数の個体からなるバラバラで無秩序な群がり（Schwärmen）から、ひとつの群れ（Schwarm）が生じるには（略）、群れの全体的な動きがそこから発

⁴¹ Vgl. Lethen: *Verhaltenslehre der Kälte*, S. 235-243. Loskothen: *Verkehr*, S. 133-135. Michael Gamper: *Masse lesen, Masse schreiben. Eine Diskurs- und Imaginationsgeschichte der Menschenmenge 1756-1930*. München (Wilhelm Fink Verlag) 2007, S. 492-505.

⁴² Lethen: *Verhaltenslehre der Kälte*, S. 235.

⁴³ Ebd.

⁴⁴ Lauffer: *Poetik des Privatraums*, S. 37-38

生するような仕方で、諸個体の個別的な動きを同期させる諸関係が効果を発揮しなければならない。それゆえ、群れとは決して完結することのない同期のプロジェクトだとみなすことができる。そこでは、中枢的な刻時装置やマスター・クロックを参照することなく、多数の非同期的な個別的運動が同期的運動へと結合される。⁴⁵

パフォーマンス研究者のカイ・ファン・アイケルスは、2013年の著書『集団的なものの技芸』(*Die Kunst des Kollektiven*)において、こうした同期の概念を批判的に受容しつつ、人間が集団で行う行動にふさわしい同期の概念を探求している。本論が『ブレッチャー氏の失敗』の考察で援用してみたいのは、この同期の概念である。

ファン・アイケルスは、群れの科学がもたらした知見を二つの点で評価する。ひとつはそれが集団の自己組織化の能力を明らかにしたことであり、もうひとつはエネルギー論的な群集論から情報論的な群れの理論へのパラダイムチェンジを成し遂げたことである⁴⁶。しかしその一方で、ファン・アイケルスはまた、群れの科学の知見を無批判に社会理論に転用することには批判的である。というのも、動物の群れの振舞いを主な研究対象とする群れの科学の知見を安易に社会理論に援用すると、集団の行動とその組織化における権力や自由の問いが周縁化されてしまい、結果として、容易にポストフォーディズムのイデオロギーと結びついてしまうからである⁴⁷。こうした問題意識にもとづいて、ファン・アイケルスは人間の集団的な行動と組織化の分析にふさわしく「同期」の概念をアップデートした。

ファン・アイケルスは、17世紀の数学者・物理学者・天文学者クリスティアン・ホイヘンスの同期現象の発見にまで遡ってこの概念の成立を確認しているが、ファン・アイケルスによれば、同期とは、それぞれ異なるリズムを持つ複数の行為やプロセスが相互に影響を及ぼし合うことで、おおよそのリズムの連関が成立する事象である。集団のパフォーマンスや行動における同期を、ファン・アイケルスは次のように定義する。

同期とは、それぞれに異なる固有のリズムを持ついくつものパフォーマンスやプロセスが相互に影響を及ぼし合うことで、ひとつのおおよそのリズム的連関が生み出される過程である。(略) そのさい決定的な特徴は相互性である。(略) また同期による同調は一体化 (*Vereinlichung*) をもたらさない。たとえわずかであろうとも (略)、つねに複数のリズムのあいだには差異が残り続けるのである。そして、同期は融合 (*Verschmelzung*) を引き起こさないで、相互の連関はつねに反転可能である。同期は

⁴⁵ Sebastian Vehlken: *Zootechnologien. Eine Mediengeschichte der Schwarmforschung*. Zürich (diaphanes) 2012, S. 265-266.

⁴⁶ Vgl. Kai van Eikels: *Die Kunst des Kollektiven. Performance zwischen Theater, Politik und Sozio-Ökonomie*. München (Wilhelm Fink) 2013, S. 166-167.

⁴⁷ Vgl. ebd., S. 31-33, S. 204-207, S. 287-288.

諸々の行動や出来事のあいだで情報を伝達するメディアムを必要とする。そこでは、アナログであれ、デジタルであれ、複雑性の低いものであれ、高いものであれ、〔情報を〕伝達するものはすべてメディアムとみなされる。重要なのは、伝達 (Übertragung) が現実⁴⁸に生起するということである。「伝達」は単に想像上のプロセスを隠喩的に表しているのではない。⁴⁸

このように定義された同期には、以下の6つの特徴がある。(1) 同期においては、エネルギー論的なパラダイムにおける群集形成——ひとつのエネルギー源 (たとえば指導者) から発せられたエネルギーが人びとのあいだを循環することで群集を形成し、それを突き動かす——とは異なり、何かを共有する必要はない。(2) 同期は相互性に立脚している。すなわち、同期する諸個体は、それぞれが動く能力 (agency) をみずからのうちに保持している。この点で同期は、一方向的なエネルギーの伝播としての共振 (Resonanz) から区別される⁴⁹。(3) 同期においては、ひとつの全体への諸個体の統合は起こらず、個体間のリズムの差異が存続し続ける。(4) 同期を律するのはエネルギーではなく情報である。ある個体の動きとリズムの変化が差異の知らせ (情報) となり、他の個体の動きとリズムに影響を与える。(5) したがって、同期は情報を伝達するメディアムを必要とする。(6) 情報の伝達は現実の出来事である (パフォーマンス論でコ・プレゼンスを定義するエネルギーの共有においては、エネルギーは隠喩に過ぎない)⁵⁰。

この同期の概念が興味深いのは、それが人々の集団的な行動を、自由な主権的主体によって遂行される行為としても、また何らかの強制力の作用によって生み出される現象としても、扱わないことである。たとえば、私たちが混雑した歩道を歩くときに起こることを、この同期の概念によって考察してみよう。この場合、私たち一人ひとりの歩行は、歩道と車道の分割や信号や各種の表示によって規制されるだけではない。他の人々の歩みと同調する限りにおいてのみ、私たちは進みたい方向に進むことができる。しかし、だからといって、私たちはみずからの身体を統御する力を完全に失ってはいないし、みずからの歩行のリズムや方向を変える自由を失ってもいない。すなわち、路上を同期しながら移動する私たちは、誰もが集団性と個性のあいだを揺れ動き、動きつつ動かされているのである。本論の最後に『ブレッチャー氏の失敗』の一場面をこのような同期の観点から考察することで、会社員を主人公とする新即物主義の小説の特徴のひとつとして、集団性と個性のあいだで揺れ動く人物たちの姿を考察してみたい。

ここで取り上げるのは、小説の第3部第8章にある一場面である。Uvag社から解雇され

⁴⁸ Ebd., S. 166.

⁴⁹ 共振と群集の結びつきについては本叢書収録の桑田論文を参照のこと。

⁵⁰ Vgl. ebd., S. 164-177.

て失業者となったブレッヒャーは、同僚たちの前から姿を消し、零落した姿でベルリンの街を徘徊していたが、ある夜、ベルリンの街頭で元同僚のグドゥラ・エフテンに遭遇する。

この小説のなかでブレッヒャーは、他の会社員たちの体制順応的な態度から一線を画し、資本主義的な価値観を内面化した同僚たちの言動を絶えず皮肉っていたのだが⁵¹、解雇によって資本主義のシステムから追放されることになる。しかしながら、それは個人を機能的存在として平準化するシステムからの解放を意味してはいなかった。失業もまた——小説の冒頭の場面で示されていたのと同様に——ひとつの機能連関から別の機能連関への移行にすぎないからである。そのとき人は企業体のなかの機能的存在から社会福祉制度のなかの機能的存在になるのであり、数的な存在として管理されることに変りはなかった (BF651)。それゆえブレッヒャーは新しい職を探すのではなく、夜、ナイフを手にしてベルリンの街頭を彷徨い、行き過ぎる女性のあとをつけるようになる。

ある日の夜9時頃、エフテンはクアフルステンダムをタウエンツィーン通りに向かって遊歩 (flanieren) していた。同僚のムキの母親のもとを訪ねた帰り道に華やかなベルリンの大通りの雰囲気を楽しむためである。ちなみにエフテンは片足に障害があり、跛を引いて歩く女性である。語り手はエフテンが味わう感情を次のように描写する。

じっさいのところ、彼女はここでこの夕べを楽しむ唯一の人間だった。それを彼女は疑わなかった。光り輝く塵が作る雰囲気、社交的で淀みなく流れる交通 (Verkehr) の魅惑を彼女は味わっていた。周囲になにか感染力のあるものを感じ、ひとつひとつの行き過ぎる顔に明るく照らされるものを感じた。そして彼女はカップルや洒落た男たちに、またそこで妻たちが浮気をはじめるカフェの一角に、密かに挨拶を送ったのだった。(BF643)

ここでは夜のベルリンの街頭の魅力が交通の魅惑として提示されている。「社交的で淀みなく流れる」(gesellig und reibungslos) という形容詞が示唆しているように、ここで「交通」と呼ばれているのは、単に道路を行き交う車や市電だけではない。路上を行き交う女性や男性もまた交通の一部であり、カフェの男女の (エロティックな) 関係もそこには含まれる。それらすべてが光り輝く街頭の雰囲気を作り上げ、エフテンを魅了しているのである。

エフテンはタウエンツィーン通りに入り、マネキンが並ぶショーウィンドウの前で立ち止まる。最新の流行を観察するためである。この個所でも、エフテンが背を向けているカイザー・ヴィルヘルム記念教会の周囲をめぐる交通の流れが記述され、星空の光が街頭の明かりと混ざり合う。「彼女の背後で記念教会の周囲を回る交通が行き交っていた。多種多様でいくつも層をなす照明の効果にとって恰好のプラネタリウムである大空は、ここではより広々と広がっていた。そして街路もまた星形に広がって走っていた」(BF644-645)。

⁵¹ Vgl. Spies: Die Angestellten, die Großstadt und einige „Interna des Bewußtseins“, S. 244ff.

交通の場にたたずみ、ショーウィンドウに展示されたスカーフを眺めるエフテンに、背後から何者かが近づく気配がする。彼女が周囲に注意を払いながらその人物を見ると、それはブレッヒャーだった。ブレッヒャーは手に持っていた剃刀を地面に落とす。

エフテンという女性は、この小説において、職場の同僚たちに単なる機能以上の存在——ひとりの人間——を見ようと努力する人物として描かれている。彼女は女性社員たちの相談に乗り、彼女たちが自分の生活を変えようとするのを手助けする人物であり、ブレッヒャーの皮肉な発言に絶えず反撥していたのも彼女だった⁵²。零落したブレッヒャーの姿を目の当たりにしたエフテンは、「ブレッヒャーを再び人間に戻すために」(BF654) 自分の部屋に連れて行くこうと決心する。エフテンはブレッヒャーの腕を取り、彼の身体を自分の身体の方に引き寄せて歩き出す。二人はニュルンベルク通りを進んで行く。エフテンはフリーデナウの自宅まで市電を使うつもりだったが、ブレッヒャーの歩みが止まらないのでそのまま歩き続けることにする。語り手は彼らの歩みが都市の交通のシステムの内部で起こっていることを読者に示唆する。

平行して線路が走っていた。家々の化粧しっくいのはグロテスクに若返った。家の番号が続いた。そして人びとは互いのことを知らなかった。彼らは互いに無関心だった。
(BF655)

この記述に続いて、通りを進むエフテンとブレッヒャーの姿が描写される。そこには非常に奇妙な集合的運動が見いだされる。二人は、都市を行き交う技術的-機能的群集とは微妙に異なる集団性を作り出しているのである。

この二人の人物を目で追う者がいたならば、彼らの歩行の強情さ (Eigensinn) の観察にふけたことだろう。どちらも普通に歩いてはいなかった。男の側がふらつき、軽くよろめかねばならない一方で、女の側は跛を引きながら上下していた。統一体とみなすなら、彼ら二人は、ある作動中の機械の人間的な象徴になりえただろう。その機械の複数の運動はラディカルな差異にもかかわらず、互いにかみ合っていた。一方にとってあちらとこちらへの揺れであったものは、他方にとっては上下の動きであった。彼らがこの奇妙さをみずから理解するのは、耐久力の問題、相互的な接近のプロセスの問題にすぎなかった。(BF655-656、強調は引用者による)

前述の同期をめぐる議論をこの場面の考察に援用するなら、異なるリズムで運動する二人の人物の身体が、相互に影響を及ぼしあうことで「同期」した動きを生み出していると言う

⁵² Vgl. Lauffer: Poetik des Privatraums, S. 258-266.

ことができる。そのさい、この同期は二人のあいだの差異を解消することはない。二人は、たとえば革命的群集のように、差異を失ってひとつの集合身体を形成するのではない。二つの身体は、差異を保ったままひとつの共同性を作り出すのである。

またこの二人の運動は、周囲の環境から隔絶してはおらず、それと干渉することもない。彼らの周囲では市電や自動車が走り、建物が連なり、通行人たちが行き交っている。「周囲の生活は通常の歩みを続けていた。映画館は通行人たちを勧誘し、タクシーは素早く、また売春婦のように、通りすぎた」(BF657)。彼らは交通のシステムのなかで、周囲の環境とそこに生起する運動によって動かされながら動いている。彼らは都市の技術的なインフラストラクチャー(歩道、車道、レール、建築物など)や市電や車や通行人の動きによって動かされているが、しかし彼ら自身の力能を完全に失ってはならず、独自の組織化を成し遂げている。それによって、彼らは交通のシステムから完全に逸脱することなく自由を見だし、単なる交通のシステムの利用者とは異なる存在になることに成功する。じっさいブレッヒャーはエフテンの隣で動きながら、次のように感じるようになる。

しかし、交通信号のための一機能以上の存在である人間、運賃を支払った乗客以上の存在である人間の隣で歩くのは、良い気分だった。(BF657)

ブレッヒャーが機能に還元されない存在の隣でともに運動していると感じたとき、彼自身もまた機能への還元を逃れていたことは確かである。つまり、この場面で二人の登場人物は、同期によって、小説冒頭で描かれた機能的存在としての群集とは異なるオルタナティブな共同性を作り出しているのである。

この後、二人はエフテンの部屋にたどり着き、そこで風変わりな一夜を過ごすことになる。夜が明けると、労働者のゼネストの計画に関わりを持っているらしいブレッヒャーが地下に潜って姿を消す一方で、ブレッヒャーが抱いていたであろうゼネストによる蜂起の夢がエフテンによって夢見られることになる。このようにして小説は、資本主義のシステムに管理される群集とは異質な集団の胎動を暗示して終わりを迎える。それは1920年代初頭にヘルミニア・ツウア・ミューレンやエルンスト・トラーが描いていた革命的群集とも、1932年にユンガーが提示した「労働者」のヴィジョンとも異なる集団性の表象である。この小説の結末部の検討は改めて行わねばならないが、同期の概念は、本論で検討したケッセルの作品に見られるような、新即物主義の都市小説に特徴的な登場人物の動きと彼らが形作る集団性の表象を新たな視点から分析するのに有益な示唆を与えてくれる。

* 本稿は JSPS 科研費 JP21K00439 の研究成果の一部である。

あとがき

2023年10月14日に開催された本シンポジウムでは登壇者の発表の後、活発な質疑応答が行われた。以下に全体テーマおよび各発表に関する質疑応答の要旨をまとめる。記録に当たっては、当日の応答の順番通りではなく、また紙幅の関係上、そのすべてを遺漏なくまとめることはできなかったが、多くの重要な指摘とコメントを寄せていただいたフロアの参加者に感謝したい。なお発表者による応答は正確を期すために情報の補足を行っている。

全体テーマに関しては、本シンポジウムのタイトルでもある「〈群集〉を再訪する——ただしパトスなしに」の「パトス」の含意について質問と確認がなされた。両大戦間期における「群集」という問題を考える上でも全体主義の台頭を無視することはできないが、例えばナチズムでは「共感」をはじめとする感情の動員が積極的に行われたことが指摘され、パトスないし感情の政治的利用について質問があった。これについては、群集の言説史を踏まえると、フランス革命やパリ・コミュンに対して保守的な態度を示したル・ボンの（ヒトラーにも影響を与えたとされる）『群集心理』以来、「群集」概念は論者にとって多くの場合ニュートラルではなく、そこには群集に対する嫌悪にしろ、称揚にしろ、あらかじめ何らかのパトスが含まれてきたことが改めて確認され、両大戦間期のドイツ語圏を対象とする本シンポジウムがこうした群集概念の暗黙の（政治的）価値判断それ自体を歴史的に相対化する視点に立脚していることが説明された。また群集の言説史を再考する際に、近年活発に行われている感情史研究を参照することの重要性は疑いないが、同時に群集の理論と言説の歴史から体系的に感情史を照射することも必要であろう。

感情という問題については、フロイトの集団心理学における「感情の結びつき」において現実の「女性」がどのような位置を占めるのか、またユンガー編著の『忘れえぬ人々』における「偉大な女性としてのドイツ」がどのような母性のイメージを喚起するのかをめぐって質問とコメントがあった。フロイトが集団として念頭に置いている軍隊と教会のうち、軍隊における兵士たちの結びつきは男性間に限定され（ただしフロイトは集団形成に際して実際の性差が何らかの役割を果たすとは考えていない）、また『忘れえぬ人々』では母性のイメージを利用しながらも、そこで追悼される戦死者は当然ながら男性の兵士である。しかし実際に兵士たちを戦場に送り込み、「母体」としてのNationを維持するには、銃後にいる母親や妻たちの感情もまた動員されるのであり、とりわけ戦死者の追悼に際して母親や妻たちの「悲しみ」の集団的共有を考える必要があるのではないかという趣旨のフロアからのコメントは重要な問題提起を含んでいるだろう。ユンガーも「総動員」において、銃後にいる家庭内の女性の動員を考えていなかったわけではないが、集団の動員とジェンダーの関係に

についてはさらに検討される必要があろう。

群集表象の再検討に当たって参照された「共振」と「同期」の概念についても確認があった。本シンポジウムが主に参照したカイ・ファン・アイケルスの理論によれば（詳細は本論集の海老根論文を参照）、一般的に「共振」は具体的な発生源を特定でき、一方から他方へと影響が及ぶのに対して、「同期」はそれぞれが発生源であり、相互的な影響関係にある。またデーブリーンはすでに群れの発生の背景に「共振」があることを論じていた。デーブリーンの例に即していえば、ある種の振り子の原理が問題となり、そこでは誰もが同時的な発信源になりうる（詳細は本論集の糸田論文を参照）。デーブリーンは「共振」における集団を「凝集させる力」にも言及している。この点については本シンポジウムでは取り上げられなかったが、質疑応答で名前の挙がったベンヤミンが比較の対象として興味深いだろう。海老根によれば、ベンヤミンは映画館の観衆について、心理的な凝集がほどける瞬間にこそある種の主体の生成と新たな組織化の可能性を認めていた。

また本シンポジウムで取り上げた作家たちの様々な影響関係についても質問があがった。ヘルマン・ブロッホの『誘惑者』（現在の版では『魅了』もしくは『山の小説』）の日本語訳者でもある小説家古井由吉の短編小説「先導獣の話」との比較において、しばしば動物的存在ともみなされてきた群集の描写をめぐる議論がなされた。早川によれば、もちろん群集という問題に関して、animalité（動物性／獣性）という観点は、『群集狂気論』も含め、ブロッホの作品群と深く関わるが、意外にも動物そのものについての描写はあまり見られず、またそれが群集表象と直接結びついているかどうかは断定できない。そもそもブロッホの小説群において群集の描写が成功しているかどうかは批判的に検討されなければならない問題であろう（詳細は本論集の早川論文を参照）。また『群集狂気論』の執筆に取り組んでいたブロッホがフロイトなどの古典的な集団心理学・群集論に親しんでいたことは間違いないが、ユンガーやデーブリーンの同時代作家の集団をめぐる考察をどの程度知っていたかは明確ではない。この点について補足すると、ブロッホが亡命前のウィーンで年下世代のカネッティと群集について議論をしていたことはいくつかの資料からも跡付けることができるが、群集を論じる方法論に関しては大きな径庭が存在する。群集への基本的な態度として、フロイトの精神分析学を引き継いだブロッホと身体的な群集体験が基底にあるカネッティとは、その出発点が大きく異なっている。同時代に数々の長編小説を執筆したデーブリーンとブロッホについても、その群集描写と群集観のさらなる詳細な比較検討が必要であろう。

同時代的な背景としては当然第一次世界大戦の影響を無視することはできず、その点では実際に従軍したユンガーの戦争体験と戦友意識の意義についても改めて議論となった。戦場がユンガーにとっての集団のイメージを決定づけたことは間違いないが、戦場を生き延びたユンガーは同時に戦場の集団の冷静な観察者ないし例外者ではなかったかという点が指摘された。ユンガーが初期作品を何度も改訂していることについては本シンポジウム

の発表では触れられなかったが、ユンガーが戦場の「群集」から屹立した存在として語り手を提示していることはしばしば論じられてきた。またユンガーの追悼の身振りにも、無名の戦死者から己を差異化する傾向と、偉大な戦死者たちと同一化する傾向が同時に認められる。特に『忘れえぬ人々』で追悼される戦没者たちはいずれも当時の有名人であり、ユンガーがこうした英雄たちの列に自分もまた連なると考えていた可能性は否定できないだろう。

質疑応答でも群集の言説史をめぐるミヒャエル・ガンパーの研究書 (Michael Gamper: *Masse lesen, Masse schreiben. Eine Diskurs- und Imaginationsgeschichte der Menschenmenge 1765-1930. München (Wilhelm Fink) 2007*) が挙げられたが、最後に本シンポジウムの意義を先行研究との関係で次のようにまとめることができるだろう。ガンパーの大著では 18 世紀と 19 世紀の群集言説の分析に比重が置かれているのに対して、本シンポジウムはデーブリーンやブロッホ、ユンガーなどの両大戦間期の作品を集中的に取り上げることでこの時代的な間隙を埋めている。その際、「群集」概念の刷新を目指す本シンポジウムは、一見すると群集とは関係がない、あるいは群集描写としては美学的に成功していないように思われる場面にも注目した。またヴァイマル共和国の文学作品における群集表象を扱ったツェラーの研究 (Regine Zeller: „Einer von Millionen Gleichen“ *Masse und Individuum im Zeitroman der Weimarer Republik. Heidelberg (Universitätsverlag Winter) 2011*) との違い、「同期」や「拡散」、「共振」といった概念を部分的に導入した本シンポジウムは、自明とされてきた「群集」と「個人」の対立関係を群集心理学の受容とは違った観点から問い直す一つの端緒を提供できたのではないだろうか。

(文責：古矢 晋一)

本シンポジウムの成果は、JSPS 科研費 JP21K00439 の助成を受けたものである。

日本独文学会研究叢書 157号
2024年10月19日発行
© 2024 一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Nr. 157

Alle Rechte vorbehalten

©2024 Japanische Gesellschaft für Germanistik e.V. Tokyo

「群集」を再訪する—ただしパトスなしに—
—両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討—

編集 海老根 剛

発行 一般社団法人日本独文学会

〒170-0005

東京都豊島区南大塚 3-34-6-603

電話 03-5950-1147

メールアドレス <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

SrJGG

ISBN 978-4-908452-47-5